自己点検・評価報告書 第8号 (平成25~26年度) 並びに平成27年度 外部評価報告書

はじめに

鹿児島工業高等専門学校は、平成27年12月10日(木)午後に半日のスケジュールで外部評価委員会を開催しました。本報告書は、その審議と意見交換の概要、学校としての今後の対応策等をまとめたものです。

本校は毎年、独立行政法人国立高等専門学校機構(高専機構)に年度計画とその実績報告を提出しています。今回の外部評価に当たっては、高専機構に提出した平成25年度から26年度までの2年分の年度計画・実績を再整理し、自己評価を加え、「自己点検・評価報告書」とし、外部評価委員会の資料としました。この資料を事前に委員の皆様に送付して質問事項と指摘事項を提出していただき、それらを事項別に分類してそれぞれを学内担当者に渡し、学校としての回答をまとめました。

外部評価委員会では、委員の互選により羽野忠先生(九州工業大学監事、大分大学顧問・名誉 教授、前大分大学学長)に委員長に就任していただきました。委員会では、まず副校長(教務主 事)がスライドを用いて本校の概要と特色、そして自己点検・評価報告書について説明しました。 説明終了後に、委員の皆様に幾つかの施設、実験設備等を視察していただきました。

校内視察後に委員会を再開しました。委員の皆様から、これまでの説明や事前にいただいた質問事項や指摘事項を踏まえ、特に確認したい点を絞って発言いただき、それらについて学校側が回答するという方式としました。

羽野委員長に各委員の指摘内容を要約し、特に重要な点を大きく3点に絞って整理していただきました。ご指摘いただいた3点の講評に対して本校が回答をまとめ、この報告書に含めています。

次年度の平成28年度からは、外部評価委員会を毎年開催し、より早いサイクルで外部評価の結果を本校の活動に取り入れていく予定としています。本報告書をご確認いただき、忌憚のないご意見やご批判を賜りますようお願い申し上げます。

平成28年3月 独立行政法人国立高等専門学校機構 鹿児島工業高等専門学校 校長 丁子 哲治

目 次

はじめに

第1部 自己点検・評価報告書 第8号(平成25~26年度)	
1 教育に関する事項	1
(1) 入学者の確保	1
(2)教育課程の編成等	3
(3) 優れた教員の確保	4
(4) 教育の質の向上及び改善のためのシステム	5
(5)学生支援・生活支援等	7
(6)教育環境の整備・活用	8
2 研究に関する事項	9
3 社会との連携、国際交流等に関する事項	10
4 管理運営に関する事項	12
自己点検・評価報告書に対する外部評価委員からの事前質問等に対する回答	14
第2部 平成27年度 外部評価報告書	
1. 外部評価委員会委員名簿	27
2. 外部評価委員会出席者名簿	28
3. 平成27年度鹿児島工業高等専門学校外部評価委員会実施要領 2	29
4. 平成27年度外部評価委員会日程表	30
5. 外部評価委員会規則	31
6. 外部評価委員会議事録(一部要約)	32

第1部

自己点検・評価報告書 第8号 (平成25~26年度)

度~平成26年度)
当書(平成25年
自己点檢·評価報台
平成27年度

【自己評価の模語 S:目標以上に達成している。 A:達成している。 A':概ね達成している。 B:一部達成している。 C:達成していない。】

自己評価の 根拠となる資料			③南日本新聞記事資料 (スクラップ)	(4)⑥一日体験入学バンフレト、中学生の皆さんへ、高事女子百科小・鹿門馬島寺版、アンケートを計算、 アンケートを計算、 アンケートを計算を表現の 13 に 第一次の 13 に 第一次の 13 に 第一次の 13 に 第一次の 14 に 1 に 1 に 1 に 1 に 1 に 1 に 1 に 1 に 1	②中学生の皆さんへ
コメント (次年度の重要事項等)					
田口部			∢	<	∢
鹿児島高専(平成25年度、26年度)実績			(高島市地区の中学校長・高等学校長金へ出版し、高単についての詳細説明を実施するともに、中学校側との情報が要後の「「新事への関連的の復差をした。」 (2) 自250周年記念事業 (126歳間 元 2002年 ・ 127年 ・	(164年度、中学校訪問のガイダンスを実施の35、10月~11月にかけて全教員が入学 書募集のための中学校園別期 170校程度 を行うた。 ②一目体験人学や女人が記録明金、PrAが修復策等による本校訪問時等に利用し学 役PRと完美させている。 (2)	①高事機構が作成している「高車のSEN」や「キラキラ高車ガール」「高車女子百科」等 の各種パンプレットについても、学校説明金、第33金や公開講座等で配付するなど活発 に活用した。現場に、「キャラモ海事ガール」に編す女子百科については、中学生と保護者 を周知した。 1 を記載の内容を網膜したい配布し、高車やの女性が社会に出て活躍していること ため、高広報誌の内容を網膜した原統に中学生のみなおへ」に再編し、中学生及びで 1 の 保護者の打工機能の日本の大の大の経験に対して、ドロ学生のおさおへ、山に再編し、中学生及びで 1 の 保護者の日本教・大の経験では、一本・エス・ジでの情報を開います。 1 いた配けするとともに、ホームページでの情報を置い努めた。また本校の最多り駅で から、REの場合を表現して、「本の情報を置い努めた。また本校の最多り駅で ある。REUまを表現し、本ームページでの情報を置い努めた。また本校の最多り駅で ため、日里書本線集人服構内の本校専用の掲示板でもボスターやすう、場所に取り組ん
高専機構の年度計画に対応または関連する鹿児島高専の計画			①霧島市地区の中学校長・高等学校校長会へ出席し、情報交換を通して高事への理解の促進を図る。 事べの理解の促進を図る。 他収3年度は創立50周年に向けて、創立50周年記念事業実行委員会を中心に、広報活動を行う。 ②南日本新聞社との連携協力協定の締結を活用し、広くPR活動に努める。	①全教員を対象に効果的な中学校訪問のガイダンスを行い、170校程度の 6 書等 7 (2)県内中学校を訪問する。 (2)県内の中学校を訪問する。 (3)に (3)に (3)に (4)と (4)と (4)と (4)と (4)と (4)と (4)と (4)と	①高事機構が作成した各種パンフレットを積極的に活用する。 ②本校既存の中学生及化その保護者向け広報誌の「世界を支える技術者と して」と「中学生のみなさんへ」の内容が重複することから、両広報誌の内容を 担する。 用する。 ③鹿児島高専で作成している各広報誌やポスター、ホームページ等を適宜見 「直し、各企画での積極的活用や県内主要及び近隣駅構内への掲示等を適宜見 する。
高専機構の年度計画(平成25年度~平成26年度)	独立行政法人通則法(平成11年法律第103号)第31条の規定により、平成21年3月31日付け20X料高第8039号で第7年後7を受けたより、平成21年3月31日付け20X料高第8039号で第7日を関けた独立行政法人国立高等専門学校機構(以下「機構という)の中期目標を進成するための計画(中期計画)に基づき、平成25年度、平成26年度の業務運営に関する計画を次のとおり定める。 1 国民に対して提供するサービスその他の業務の質の向上に関する目標を達成するために取るべき措置	1 教育に関する事項 (1)入学者の確保	(1)全日本中学校長会、地域における中学校長会などと連携を深め、国立高等専門学校(以下「高専」という)への理解を促進するととして、マスコミ等を通じ広く社会に向けて高専のPR活動を行う。	(2) 各高車における入学説明会、体験入学(オープンキャンパス)、 学校記明会等の取組について調査し、その事例を各高車に周知する。 ととれてその成果を分析する。 また、高車を卒業に産業界等で活躍する女性の情報等を盛り込ん だ女子中学生向けのパンレットの利活用を行うとともに、女子中学 生が象の各高車における取組状況を調査し、事例を各高車と共有す。 ることで女子学生の志願者確保を推進する。	(3) 中学生及びその保護者を対象としたパンフレットについて、各高 に 専での利活用状況調査等を行い、その結果を踏まえた広報資料を作

成していない。】	自己評価の 根拠となる資料		
:一部連成している。 C: 通	コメント (次年度の重要事項等)		
ている。 目	自己評価	∢	
S:目標以上に議成している。 A:議成している。 A':概ね議成している。 B:一部選成している。 C:議成していない。】	鹿児島高専(平成25年度、26年度)実績	意入学者の修学状況について の比率など入試方法の改善に引き機を検討している。	①中学校訪問のガイダンスを実施のうえ、10月~11月にかけて全教員が入学者募集の ための中学校園別訪問(170校程度)を行った。また、中学校側から最上能力ある高専に ついての情報収集を目的として、近隣の中学校に校長自ら出向き、校長・被領等との情報交換を行った。 報交換を行った。 ・かして表現を存った。
(自己評価の標語	高専機構の年度計画に対応または関連する鹿児島高専の計画	①平成21年度に変更した推薦入学の要件と推維機的に調査し、現在30%としている推薦入学 2017で引き続き検討する。	
平成27年度 自己点檢·評価報告書(平成25年度~平成26年度	高専機構の年度計画(平成25年度~平成26年度)	(4) 高専教育にふさわしい人材を選抜できるよう、入試方法の改善方策について検討し、最寄地受験制度及び複数校受験制度等について、実施可能なものから随時導入する。	

①中学生のみなさんへ
∢
(2) (1) (1) (1) (1) (1) (1) (1) (1) (1) (1
①入学志願者は募集定員20倍以上となるよう様々な広報活動の実施に努める。
(5) 各高事・学科における学力水準の維持のための取組を調査し、 その事例を名高専に周知する。 また、入学志願者に係る調査結果の分析を踏まえ、とりわけ入学志 願者が減少している高事・学科においては入学志願者の確保方策に ついて検討し、改善を行う。

バ:概お達成している。 B:一部達成している。 C:達成していない。]
【自己評価の標語 S:目標以上に達成している。 A:建成している。 A
平成27年度 自己点核•評価報告書(平成25年度~平成26年度)

自己評価の根拠となる資料			①③将来計画委員会の 諸事録等の資料		①授業評価アンケート集 計結集 ())授業改善計画書 (内部資料)	①平成23年度、平成26 年度学外3一千等關係 ②平成25年度、平成26 年度後援会(学生支援) 関係	①1年生集団研修のしお り りの必学生便覧(平成25 年度、平成26年度)行事 予定表
コメント(次年度の重要事項等)			₩ a		()全学生による授業評価アンケート及 び校長による授業報報を中成25年度と 同様に実施して、これらの結果を踏まえ で授業改善計画書を提出する。	○ 4 ⊙ 4 ms	⊙ उ∙्स ॥ :
自己評		∢	4	Ø	4	∢	∢
鹿児島高専(平成25年度、26年度)実績		(1モデルコアカリキュラムを一般科目と専門の学科(電子制御・情報)で平成28年度に 等ま了1、市成27年度から製みがすることによった。 を第71、市成27年度から製み表することとがつた。 空中成25年度から製み提案に変更したことにおりカリナュラムがスリム化されたため、 空中間を収りを学の学力不振者を対象に補置を実施している。 3. 鹿児島県技術士会との協定に基づき、専攻科の授業で、技術士との共同教育を維続 し、電影している。 (9. 高車場供料用の解析主義との協定に基づき、専攻科の授業で、技術士との共同教育を維続 し、政策的している。 (9. 高車場無料用の解析主義を対象が一般を充分で流程進事業も含め、平成25年度は124名、 中級65年度は25名の学生が海外研修者方つた。 ングップを実施した。 アグップを実施した。 東京26年度は、24イビーンアでのインターンシップを実施し、平 成26年度は、ベトナムでのインターンシップを実施し、平	() 平度22年度に土木工学料から名称変更した、都市環境デザイン工学科を平成26年度 まで年次進行で整備を進わた。 また、第6クラスによる基礎学力の定着に関して、有意差のある効果は認められていない。 また、第6クラス電管のための学生モディーションの指揮や時間制制機、教育配置の租 も想定してコアルナニカース。 も想定してコアルナニカース。 本籍を制御金化を行うので、建クラスは中止た。 自然でが年度に、現在の土木工学専攻を適切な事攻名に改組するために、将来計画を 員会、事攻利差員会、都市環境デザイン工学科において、専攻名および教育内容等に ついて統計し、建設工学専攻1に名称変更することで了承され、平成26年9月に学位長 与機構へ申請を行うた。	()平成25年度は、1.2年生を対象に、基礎学力の定着を目的とした補精の実施につい て、保護者的ご知知、平成25年度は、本科・2年生を対象に、基礎学力の定着を目的 として数学におわる学力不振の学生を指名して、前学期後半から後学期に掛けて延べ 20本校での表類の母奏のが構むつで10分間の場立、工業英語、乗用英語検定を組み合わせ (2本校の公務の母奏の対策ができかが構むつにのの情点、工業英語、乗用英語検定を組み合わせ (3の高等連携事業で招聘した外国人講師2名により、学生及び教育を対象として、英語 による授業・講演、英会話等の表稿前研修、英語フレセン研修等を実施した。	(前) 学期及び後学期末試験後(学生に対して授業幹価アンケーを実施した。また、授業評価アンケートの自由記述の書式改善に関する統計を印要員会で行なっている。 (2学校評価アンケーに関連を分析に、結構、本科の業生、専攻制を指すとも認りの上位 の学校評価でリーンケーに関連を分析に、結構力、本分では、表現を開始できた。 が開発に関われている。高等性の第4万をもの上位 が開発に関われている。 (3授業評価アンケート結果(第学期)(つ)いては、その内容を参照(フィーバックし、 それぞれ改善計画書の提出を依頼し、提出された改善計画書を現在業計中である。 お、後学期分に係る授業評価アンケートの組製については、その内容を参照(コン・ドング)。	①後援会と連携し外部指導者等を積極的に登用し、平成29年度は、全国高専体育大会 (サッカー、陸上競技、ソアトス、パレーボール、乗車、モース、水が、同工がション セースン・スト、同プログラングコンテスト、同プサインコンペディション、同英語プレゼンー・ショ セース・コンテスト、3次元デジタル(影計 施おコンテスト〜出境し、平成26年度は、全国高等体 コードスト (現技20名)、全国高車ロボットコンテスト(8名)、プログラングコンテスト(8名) の学生が出場上活躍して。 ②を集び出場上活躍して。 ②を集び出場上活躍して。 ②を集び出場上活躍して。 ②を集び出場上活躍して。 ②を集び出場に対してカーン・ファン・マン・マングロンテスト(8名)、フロイフスト(8名)、フラブ活動に対する学外指導者の登用・充実のための財政支援を得 ており、これにより学生の技術力・モティーション等の向上に成果が出ている。また、平 成プは使からは、外部コーチの旅費についても、引車教職員と同じ対応となるように改	(1)新1年生に対する集団研修を4月に実施し、本校学生としての自覚を身につけさせるとともに、自然体験活動を通じた人格形成を図るプログラムを実施した。 で学生を映画的は、10分割を発展している。また、高東線等の学校行事の前に、一斉指揮日子 と対し、学生を指したとかり実施している。また、高車線等の学校行事の前に、一斉指揮日子 設け、学生・機能員から同じ実施した。 設け、学生・機能自分を同じ実施した。 以上、また、「年生は全策制の下金がした。 (3学生と活動の一環で、交達を全地の「学寮における検渉指数を実施 した。また、「年生は全策制の下め、寮生金を中心「学寮における検渉指導を振動的」 、実施されている。 (4年全を中心に、18年人服の駅舎及じその周辺の海福と駅から本校までの通学路 のチリ・空き缶拾い等(条施)と、また、学寮においては寮生会を中心として、定期的に コミステーションの海橋作業を実施した。春仕やボランティアの精神を育成してい。こ
高専機構の年度計画に対応または関連する鹿児島高専の計画		①本校の学習教育到達目標を前提としつつ、機構から提示されるモデルコアカリキュラムとの整合性をとりながら取拾選択し、時代のニーズを踏まえたカリキュラムとの整合性をとりながら取拾選択し、時代のニーズを踏まえたカリムを有力。 化を行う。 化を行う。 では、1914年度に本校で実施した教育各Pの成果を踏まえながら、技術士会、選集しつ共同教育の充実を図る。 の工成の、は、1914年度は一本校で実施した教育会Pの成果を踏まえながら、技術工会、現場を持て、1914年度から開始した。1914年度から開始した。1914年度から開始した。1914年度から開始した。1914年度から開始した。1914年度から開始した。1914年度から開始した。1914年度から開始した。1914年度から開始した。1914年度から開始した。1914年度から成果を踏まえて、長期インターンシップや海外交流プログラムについて検討する。	①5学科体制(1学科定員40名)を維持しつつ、産業界における人材需要や学生のニーズの変化等に分がたした、教育プログラムの改善について検討する。 空中成26年度は数学と英語で導入した混合グラスの効果について追跡調査し、混合グラス連用の改善を図る。 ③平成27年度の土木工学専攻の改組(学年進行による)について検討する。	①学習到達度試験の数学・物理共、全国平均点を上回ることを目指す。 ②本校での英語の授業の評価とTOEICの評価、工業英語、実用英語検定を 組み合わせて総合的に判断する方法を引き続き実施する。 の充実を図る。	①学生による授業評価アンケートを実施する。特に自由記述では、具体的な改善になる投票が不る建設で有用な適定を引きまりませるような書式を検討する。 必要にこなら体理に行った卒業と、企業による学校評価アンケート調査の分析結果に基づき、今後の対応を検討する。 ③に基づき、今後の対応を検討する。 ②在学生による授業評価の調査を実施し、教員にフィードバックし、必要に応じて改善計画書の提出を依頼する。	①学生を、全国高専ロボットコンテスト、プログラミングコンテスト、英語プレゼンテーションコンテスト、デザインコンペティンヨン、3次元デジタル設計を形コンテスト、マイクロメカニズムコンテスト等に積極的に参加させるための指導及び終費に関する支援を行う。 ②クラブ活動への財政支援について後援会との連絡を密に行う。	()新1年生に対する集団研修を4月に実施し、本校学生としての自覚を身につけさせるとともに、自然体験活動を通じた人格形成を図る。 ②学生と教職員が共に取り組む美化活動を企画、実施する。 ③挨拶の励行に努める。 ④学生会、寮生会の健全な活動を通して、奉仕やボランティアの精神を育成 する。
高専機構の年度計画(平成25年度~平成26年度)	(2)教育課程の編成等	(1) 再編した宮城・富山・香川・熊本地区の4高専における教育・研究体制の高度化を着実に進めるとともに、その成果を検証に各高申力りと情報を共有する。また。その他の各高専においてもそれぞれの特をや地域事情を踏まえ、学科構成や新分野の学科設置の在り方、専党女科の整備・光雲の具体化に同け検討する。また、平成21年度に実施したカリキュラムに関する調査の報告の報告の表現を関いて日本度に実施したカリキュラムに関する調査の報告を調査を表現、高専に来められるニースを踏まえたカリキュラムは試案)の策定を踏まえ、高専に来会があれるニースを踏まえたカリキュラムは試案)の策定を踏まえ、高専に来会があれるニースを踏まえたカリキュラムは対象の策定を踏まえ、高専に来会があれるニースを踏まえたカリキュラムは対象のを表現を表現し、高車に対けるモデルコアカリキュラム(試案)適用に係る課金を対し、高車に対けるモデルコアカリキュラム(試案)適用に係る課金を	(2) 地域や学生のニーズに応じた弾力的な学科編成とするため、学科の大括り化やコース制の導入について、その具体化に向け、検討しする。	(3) 教育の改善に資するため、基幹的な科目である「数学」、「物理」(に関し、学生の学習到達度を測定するための各高専共通の「学習到(建度試験」を実施する。また、その試験結果について公表を行う。 英語 については、名書車におけるTOEIC の活用状況を調査し、その事例を各高車に周知する。	(4) 教育活動の改善・充実に資するため、在学生による授業評価の (調査を実施し、教員にフィードバックする。	(5)全国高等専門学校連合会と協力して、学生の意欲向上や高専のイメージの向上に資する[全国高等専門学校体育大会」や「全国高等専門学校なりがラミックコンテスト」「全国高等専門学校プログラジックコンテスト」(全国高等専門学校プログラジックコンテスト」(全国高等専門学校支配プレゼンテーンコンテスト)等の全国的な競技会やコンテストを実施する。	(6) 各高専におけるボランティア活動など社会奉仕体験活動や自然 体験活動などの様々な体験活動への参加実績や取組状況を調査・ 分析し、各高専に周知することで、その実施を推進する。

年度)
成26年度
两~平
²成25年度~
卢
面報告書(
証
回己点極
回口
7年度
平成274

C: 達成していない。】

B:一部達成している。

A': 概ね 準成している。

A:達成している。

8:目標以上に達成している。

(自己評価の標語

①平成25年度教育功労 希遇考泰司等 科学技术分野の款公部科学技术分野公文部科学技术分野公文部科学技术的对 学大臣表彰科学技術的 ②图在高等專門子資料 員顯彰「関する資料 ①公募書類等の資料 ②H24施設整備費補助金 実績報告書 ④全国高専教育フォーラムに関する資料 ①全国高専教育フォーラムに関する資料 自己評価の 根拠となる資料 (次年度の重要事項等) コメント 口背角 ⋖ ⋖ ⋖ ⋖ ⋖ ⋖ ⋖ 体へ ①平成25年度は、高車機構本部等か主催するファカルティ・ディベロップメントを含んだ 教員研修126名参加した。 ②平成26年度は、鹿児島県教育委員会主催「10年程験者研修」(3名参加)[11名の講師 ②平成26年度は、鹿児島県教育委員会主催「原児島上森等専門学校と霧島市立学校との連携 [よるが研修会」(6名参加)[12名の講師を形造した。 ③平成26年度は、FD・50台同フォーラム、鹿児島大学PD委員会・大学地域コンソーンア の参 人庭児島主催に本校歌島 [14] 名が参加した。 ②東西電教育フォーラムに平成26年度は12名、平成26年度は18名参加し、高準機構 3、6、20 高教育自五の授業参製、相互評価を前で弾列及び後学期に実施した。 (⑤教長による授業規模を後学期に実施した。 ΨШ (丁甲成25年度の心夢要領より、女性教員を優先的に採用する文面を追記して、公募を行った。中収26年度は「独立行砂法人国立海等専門学校機構に国土業高等専門学校とのより、大切24年度というの野面において同事と認められる場合によ、女性を優先的に採用します。の文面を必要要領に起訴して、機械工学科、職人電子工学、一般教育科(英語)の教員公募を実施に、電源して、単株工学科、電気電子工学科、一般教育科(英語)の教員公募を実施に、電流電子工学科で、名の女性教員を平成かれ4月日採用することとよった。 (丁中成25年度は、高車機構教員顕彰候補者の一般部門及び若手部門各1名を推薦した。また、繋切が着といて質見名(一般目動談、疾疫菌之、同、24日億割が表験して一般の自動、中枢の経費と、中枢の経費に対す 対学技術分野の文部科学大臣表彰科学技術質及び若手科学者質し、一般教育が教員、日本の経費に、理解推進部門で受賞した。 第15、一般教育が教員、物理を推薦に、理解推進部門で受賞した。 26届車機構教員顕彰安賞者講演会・の参加及び議購についての案内を、学内オフィス (リ平成25年度は、公募制により、博士取得者、博士取得男込み者を含む)、技術士の資格を有する人材を確保するたか。全学科におけるが会の業務間に条件を存在間拠しる場を行いた。事故26年度は、新規集用教員について公募を実施し、他の教育研究機関おより民間低金素をのの職務機関を持つ数値の採用で行った。現実制度の存用が存在。 「中国企業等での職務機関を持つ数値の採用でが実施、他の教育研究機関が上 に民間企業をの職務機関を持つ数値の採用でが実施。 用計画に基づき、採用を行った。非常制備的で採用・画について、教作な任 用計画に基づき、採用を行った。平成26年度は、非常製講師手製・総額の施減を視野に (14今後者を挑誘して複割してい。。 ①平成25年度は、公募制により、博士取得者(博士取得見込み者を含む)、技術士の資格を含むする人材を衝露するため、全学科における公募要組に条件等を記載した薬を できた。 生理ならなをしている。 では、博士取得者としては博士取得見込み者(圧倒付款員)の公募を 発泡した。 (全国高等教育フォーラムに平成25年度は12名、平成26年度は8名参加し、高等機構 教員観覧を賞名の開送されどの、その発表を聴傷した。(再級) (2018ATF等に参加すると共に発表を行った。 (3回447年間をから各間学会・研修会等の情報が広洋中のに周知し、参加した。 "明安、如財委員会において、教職員に対し国の外の意格は管質なやシャーナル、学協 会話等・の積極的な投稿・掲載により国内外の意格は管質なやシャーナル、学協 鹿児島高専(平成25年度、26年度)実績 ①全国高専教育フォーラムへの教員の発表及び多数の教員の参加を促す。 ②国際シンポジウム(ISATE)への教員の参加を促す。 ③国の外で開催される学会での研究発表および各種研修等への教員の参加 を促す。 ①教員の新規採用に関しては公募制をとり、多様な背景を持つ教員の採用に 努める。 ②平成26年度に向け、非常勤講師の採用計画の見直しを進める。 (5) 教員の能力向上を目的とした各種研修会を企画・開催するとも、②地元教育業員等が実施する高等学校の教員を対象とする研修や近隣大、全国馬事教育フォーラム等で一般科目、専門科目の各領域に、全国高事教育フォーラム等で一般科目、専門科目の各領域に、学等が実施するFDセミナー等への教員の派遣を検討する。 の高専問の連携を強化する。 また、地元教育委員会等と連携し、高等学校の教員を対象とする。 前を限するの名高専の参加状況を把握し、派遣を推進する。 (6枚長による授業視察を実施する。 ①女性教職員の採用を積極的に行う文面を公募要領に記載する。 ②平成24年度補正予算で都市環境テザイン工学科様の改修及び増築工事 礼予算措置されたので、女子トイレの改修工事を含め平成25年度中の完成を 目指す。 ①引き続き、教員公募の際に、博士取得者もしくは博士取得見込みの者や技術士等の高度の資格を有する者などの条件で公募する。 高専機構の年度計画に対応または関連する鹿児島高専の計画 ①教員顕彰制度への教員の応募意欲を高める。 ②教員に、高專機構教員顕彰受賞者講演会への参加・聴講を促す。 (3) 各高専に対して、専門科目(理系の一般科目を含む)について に、精工の学化を持つ者や技術主等の職業上の高度の資格を持つ 者、一般科目については、修工以上の学化な持つ者や民間企業等 における経験を通して高度な実務能力を持つ者など優れた教育能力 存する者の実用の促進を図り、専門科目担当の教員については全 体として70%、罪系以外の一般科目担当の教員については全体 して80%をそれぞれ下回らないようにする。 (?) 60名以上の教員を国内外研究員として派遣するとともに、各高事において、教員の国内外の大学等での研究又は研修への参加を促進する。 (2) 長岡、豊橋両技術科学大学との連携を図りつつ、「高専・両技科 大間教員交流制度」を実施する。 また、高等学校、大学、企業等との任期を付した人事交流を実施す (4)男女共同参画社会の実現及び女性研究者の活躍推進のため、 男女共同参画宣言及び男女共同参画行動計画を踏まえ、女性教員 の積極的な登用及び女性教員の働きやすい環境の整備を進める。 <6>教育活動や生活指導などにおいて、顕著な功績が認められる教員や教員グループを表彰する。 (1)優れた教員を確保するため、各高専の教員の選考方法及び採用状況を踏まえ、高専における多様な背景を持つ教員の割合が60%を下回らないようにする。 高専機構の年度計画(平成25年度~平成26年度) (3)優れた教員の確保

1
_
EX.
丰 庚
쐕
264
出
F
7
赵
1
戊25年 月
Ö
长
計
$\stackrel{\smile}{=}$
面報告書
业
価報
庫
肱
åR∕
当己点檢·
416
Ш
Ш
H.V
田
4
274
松
臣
•••

A:達成している。 A':概ね達成している。 B:一部達成している。 C:達成していない。】

S: 目標以上に達成している。

自己評価の標語

①平成25年度第1回自己点檢·評価委員会議事要目 要目。③自己檢·評価報告書第7局(平成22~24年度) 並びに平成25年度外部 ③自己点検・評価報告書第7号(平成22~24年度)並びに平成25年度外部評価報告書 ①インターンツップ集計表 自己評価の 根拠となる資料 KTCへのインターンシップの依頼文書等を整備する (次年度の重要事項等) 自己評価 ⋖ ⋖ ⋖ ⋖ ⋖ ⋖ ⋖ (①平成24年度機関別認証評価における改善を要する事項は「教育目構造成の効果的な 科目群の記憶」及び的実践が自己点換。指面の表面に関する。学校型目の評価項目の と、平成26年年に関係技能があり、事な料委員会、自己点錄。評価委員会を中心に核的 に、平成26年度中に関係技閣があり、事な料委員会、自己点錄。評価委員会を中心に核的 に、平成26年度中に関係技閣等の改正をするたととなり、事な料委員会員においては、核 専門共通課表的の別果的な計目等の配置について核的が行われ、平成27年度から1年生 専門共通課表別目として「AKを行会のかかわり」を開闢することなった。また、学校独 に対応した経済に関い、自己点格・評価委員会で継続的に審議し、本校の年度計画 に対応した評価項目とすることとし。 ③平成22年度、平成24年度の自己結婚、評価に基づき中成26年度に外部評価を責金 程開催し、技術語を受賞を必要が大きが目で起るに今が開節機能を再作形して、外部 開催し、対策指揮を買ったの技術に対する「審目の回答の「グローバル・コニーケー ジュー能力を構成、社職を対抗権を可能においては、直線・基準において、本校上 大学を集やすための努力と拡制については、地域のバンラ等を参考数域とし、また 大学者を集やすための努力と拡制については、地域のバンラ等を参考数域とし、また 野を支える技術者として一洋発行し、反義によりが外がいけずにいけ事性の設定を開発し、また 野を支える技術者として一洋発行し、反義により特殊が出来が ①各高専で開発された数材などの情報を収集し、学内における数育改善へ活かすため 「に、様々な機会を捉えて情報収集に努めている。 にて実施した。 にて実施した。 ②モデルコアカリキュラムを一般料 日本専門の2学科(電子制御・情報)で平成28年度に ③モデルコアカリキュラムを一般料 日本専門の2学科(電子制御・情報)で平成28年度に を示した。他学科(機長・電影子・番标展線デザイン)については学則改正等の手続き を完了し平成21年度から導入することとなった。 た。 「漫様工学科では、危険物取扱者の資格試験を積極的に受験するように指導している。 また、電気電子工学科では電験3種・2種の資格試験受験に同けた補請を実施し、資格 取得を積極的に進めている。 ①専攻科のカリキュラムである「環境創造工学プロジェクト」に対し、専攻科経費から重点 的な予算配分を継続するとともに、5名の担当教員を配置し教育内容の充実を図った。 ①受入れ企業拡大のため、年度初めに企業アンケートを実施し、受人可の企業を カータペースへ会験にいてく年生が開設できる体制を発掘して、 ように整備したので、本利4年生及び専攻科1年生に対してそれらを活用して、「いら、平成25年度は、本料3名、専攻料上12名が構造を構造、研修的な参加を促 ターンシップに積極的に参加するよう促す。 名、東次本程度は、本料3名、単数4年12名が開始、中間20年度は、本料3名、単数4年12名が加入、平型24年度は、本料4年の 名、東次本程度は、本料3名、単数4年12名が、中間20年度は、本料4年8日の 名、東次本月2月のアルファップに積極的に参加するよう促す。 20条 東大村田7カラルでは。 ②企業大村田7カラルでは、東東田7本の多加を促すとともに、受け入れ企業の増加を、児島県内のインターンシップを企業を封閉に、「今後の発展につなれるようフィローアッ フを行った。また、インターンシップを実施打開して、一般の発展にあり、インターファローアップを の名。また、インターンシップを実施にていく上での学内の体制を充実する。 フを行った。また、本格を登却間に、一般の多限につながあたファローアッ ・所事学生情報符合システム」の開場に渡するために、本校の情報工学科教員が、機構の学生情報特合能会などな仕様就定委員会の委員とに令回し、学内の調整と平成領域のシステム導入に向けて準備を行っている。 ①鹿児島地域大学コンソーシアムが夏季休暇中及び後学期に実施するコーディネート科目を学生が受講し、他大学学生等との交流を図った。 ①平成26年度にJABEEの継続認定審査を受審し、26年度を含めた6年間の認定を得 鹿児島高専(平成25年度、26年度)実績 (1>-1 高専の特性を活かした教材や教育方法の開発を推進するとと「①各高専で開発された教材などについて情報を収集し、教育改善へ活かす検しし、開発した教材や教育方法をデータペース化し、各高専において 討をする。 計断用を推進する。また、平成21年度からモデルコアカリキュラムの「②應児島県技術士会との連携による特色ある共同教育を推進する。 計画用を推進する。また、平成21年度からモデルコアカリキュラムの「②應児島県技術士会との連携による特色ある共同教育を推進する。 導入を推進するため、全国高専教育フォーラムや高専各校において ③平成74年度からのモデルコアカリキュラムの全学科への導入に向けて準備 説明会等を実施する。 ①専攻科のエンジニアリング・デザイン教育に位置付けている、環境創造工学プロジェクトの教育内容の充実を図る。 ①本科4・5年および専攻科の教育プログラム「環境創造工学」について、平成 26年度に日本技術者教育認定機構(JABED 「よる審査を受ける。 ②在学中の資格取得について、学生に積極的に案内するとともに、資格取得 を推進する。 (5) 大学評価・学位授与機構による高等専門学校機関別認証評価 を計画的に進める。 また、各高専の教育の質を保つために、評価結果及び改善の取組事(②平成24年度に機関別認証評価を受けた結果を7年後の機関別認証評価の 第1で、各高専の教育の質を保つために、評価結果及び改善の取組事(②平成24年度に機関別認証評価を受けた結果を7年後の機関別認証評価の 例について総合データベース「KOALA」で共有する。 ③平成22~24年度の自己点検・評価に基づき、外部評価委員会を実施する。 ③平成22~24年度の自己点検・評価に基づき、外部評価委員会を実施する。 ・「高専学生情報統合システム」については、高専間で要件定義や基本設計 のすり合わせを行い、システムの導入に向けての準備を行う。 ①鹿児島地域大学コンソーシアムで結んでいる単位互換協定により、夏季休暇中に開講されるコーディネート科目の受講を通じて、他高等教育機関の学生との交流を推進する。 高専機構の年度計画に対応または関連する鹿児島高専の計画 (1>-2「高専学生情報統合システム」整備に向けて、要件定義や基本設計を行い、調達に着手する。 「また、企業と連携した教育コンテンツの開発を推進しつり、各高専の教員を中心とする検討部会において、「共同教育」の標準倒等教育方式の不実力等について検討を進めるとともに、取組事例を取りまとめ、周知する。 (3) サマースクールや国内留学等の高専の枠を超えた学生の交流活動を促進するため、特色ある取組を各高専に周知するともに支援を行う。 各高専におけるインターンシップへの取り組みを推進するととも 産学官の連携による効果的なインターンシップの実施を推進す (4) 各高専の優れた教育実践例や取組事例を、総合データベース 「KOALA」を活用して収集・公表し、各高専における教育方法の改善を促進する。 〈2〉 JABEE認定プログラムの更新・拡充を行うとともに、教育の質の向上に努める。 また、在学中の資格取得について調査し、各高専に周知する。 高専機構の年度計画(平成25年度~平成26年度) (4)教育の質の向上及び改善のためのシステム

S:E
【自己評価の標語
4成27年度 目己点核•評価報告書(半成25年度~半成26年度)
25年周
(+ 灰
教行書
草油· 逐
7年度
- 凤2

	1	1		
C:達成していない。】	自己評価の根拠となる資料	①] 年生企業員学資料、 教職員KTC企業見学資料 料		①グループウェア掲示「H25年度moode利用希望材目について」(2013/3/8付)③申請マスタープラン
B:一部達成している。 C:当	コメント (次年度の重要事項等)	拳職員による企業訪問では質疑やOB との交流もできるような面談を設ける		・本質的には別案件だが、Moodleへの 移行を促進するためにも、既設の学生 用ダーンウェアの円滑は利用終息が 重要である。 一地高等で成果が上がっている(7活用 終育 本注度担付する(14、高載等) フォーラムへの関係者の聴講派部は重 要である。 本部案件として校内光ファイバの更新 が検討されており、その期向如何によっ には本校側独自で必要性を再表明を の深動がある、場をによっては本校側 機自での活動は不関してる可能性もあ るため、注視を要する。電源系統句管 を記して活動によるには、ない のにあって、その必要性をある。 を記していては、 のには、 のには、 のには、 のには、 のには、 のには、 のには、 のに
ている。	自己評価	∢	∢	ш
S:目標以上に達成している。 A:達成している。 A':概わ達成している。	鹿児島高専(平成25年度、26年度)実績	(廉児島県技術士金との協定に基づき、事政科の授業で、技術士との共同教育を継続 して薬物によっまた。銀工第ラッパ(ペラカラ)(KIC) 急速の主体のも対象者によ た。本材生への知財教育(接票)・キッリア教育(講家、施設)県、等の共同教育を実施 た。本社を大の知財教育(接票)・キッリア教育(講家、施設)県、等の共同教育を実施 村本の水田の本屋は、1年生の全学生を対象に、地境企業を良く知ってもう取扱として申 料毎のKICの基金の企業生を対象に、地域企業を良く知ってもら予取場として申 料金のKICの基の主要を対象に、また、教職員による部工等のイバークララフ会 発展するよう機を対ける。今後、内容を元実させ、会員に業との共同研究に 受職を支配といるの学外指導者を登用し、学生の干メペーション及び技術力の向上を 区場再与選大会機務(明末、サッカ・競技の企画高等体育大会優勝、与遺跡の西日本地 区高再ラ道大会機務(明末、サッカ・競技の企画高等体育大会優勝、月道部の西日本地 区高再ラ道大会機務(明末)中が、東京の企画の全部の全国本地、大会総合優勝、 レカニンク本研究的の全国のボン出場、英語部の全国本地と高率を選が会総合優勝、 バルニンク本研究的の全国のボン出場、英語部の全国を建設する「当大会総合優勝、 につながっている。なお、平成25年度指導表稿時間数(は2861時間である。	①平成26年4月に7名、平成27年4月に5名の学生が豊橋・長岡両技科大学へ編入学した。次年度以降は10名程度を維持するようにする。 (2.同長科大が研究費を見出している共同第3へのの募を推進した結果、平成26年度 大が3件の展択があった。 大が3件の展択があった。 ③カ州工業大学、東京工業大学、北九州市立大等の大学院財明をを実施した。また平 高か州工業大学、東京工業大学、北九州市立大等の大学院財明を支援した。また平 会を実施した。北陸充端科学技術大学院の教員向17体験会に教員を派遣し、大学院財明 会を実施した。	(本部のMS包括ライセンス契約の見重しにともない、これまでに適用をしてきた学生用 グループウェアから、授業支援機能のMacodeへの移行を予定している。まずは学習管理 システムMoneloの利用を促進している状態であり、現在つの科目において利用してお (2他高等で成果が上かっているいでは再算等手法が1要がよない状況であるため、値 (3枚内ネットワーシンステムにおいて技術に影配されて、ASAアイの表がにいる。 (3枚内ネットワーシンス・ACICは、T技術に影配されて、ASAアイルのまだには、 (3枚内ネットワーシンス・ACICは、T技術に影配されて、ASAアイルを計化には、 (3枚内ネットワーシンス・ACICは、T技術に影配されて、ASAアイルを計化には、 更新」についてマスターブランへの目間を行った。また、業務継続性の向上を図り、「精報 基盤影響への電源系統地設と電源系統切音盤設置についてもスターブランへの申 調を行った。
)【自己評価の標語	高専機構の年度計画に対応または関連する鹿児島高専の計画	①鹿児島県技術士会との協定に基づく技術士による共同教育に加え、錦江湾テクノペークカラブやOB技術者による共同教育の実施を検討する。 ②クラブ活動に学外指導者を登用し、学生のモチベーンョンと技術力を高め る。	①本科を修了後、両技科大への編入学を希望する学生に編入学を推奨し、10名程度の編入学者数を維持するよう努める。 ②技科大が研究費を負担している共同研究への教員の応募を推進する。 ③専政科学生に対して、理工系大学院進学のガイダンズを実施する。	①ICT活用教育専門部会の検討結果を参考にしながら、学習管理システム Moodle とラーニング教材の利用を促進する。 ②他高導で成果が上がっているCT活用教育手法を確認する。当該手法が本 校では導入大かていい。は会とは、その導入を検討する。 がのネットワープシステムにおける障礙化箇所の更新や業務継続性の向上 のために必要な設備等について積極的にマスタープランへの提案を行う。
平成27年度 自己点検・評価報告書(平成25年度~平成26年度	高専機構の年度計画(平成25年度~平成26年度)	(7)企業技術者等を活用した教育の現状について調査を行い、特色(ある事例について各高専に周知するとともに、総合データベースド、OALA」で、各高専における企業技術者等の人材情報の共有化を推進する。	〈8〉技術科学大学を始めとする理工系大学との協議の場を設け、教(員の研修、教育課程の改善、高華卒業生の継続教育などについて、連携して推進する。また、長岡・豊橋両技術科学大学と連携・協働して「三機関が連携・協働した教育改革」を推進する。	(9) 教育・FD委員会の下に設置したICT活用教育専門部会において、ICTを活用したアウティブラーニングの教育実践事例を調査し、各高等の導入者権する。 本法、ICT活用教育に必要となる各高専の校内ネットワークシステムなどの情報基盤について、現状調査、分析及び課題抽出、施策の検討、移行及び調達計画の検討を行い、具体的な整備計画を策定する。

⊕
運
64
Ñ
皮
片
(بير
田田田田田田田田田田田田田田田田田田田田田田田田田田田田田田田田田田田田田田田
입
Ŋ
位
也
#
和
評価報告
豊
iiia
自己点檢
堰
L)
価
퐞
成27年度
Ë
松
开展
1

【自己評価の模語 S:目標以上に達成している。 A:達成している。 A':概ね達成している。 B:一部達成している。 C:達成していない。】

高専機構の年度計画(平成25年度~平成26年度)	高専機構の年度計画に対応または関連する鹿児島高専の計画	鹿児島高専(平成25年度、26年度)実績	自 計 章	コメント (次年度の重要事項等)	自己評価の根拠となる資料
(5)学生支援·生活支援等					
〈1〉各高専の教職員を対象としたメンタルヘルスに関する講習会を 開催するとともに、「学生支援・課外活動委員会」において、各高専の ニーズや経済情勢等を踏まえた学生に対する就学支援・生活支援を 推進する。	①教職員に対し、高専機構主催及びその他のメンタルへルス講習会に積極的に参加するよう問知する。 し参加するよう問知する。 2。 ③学生委員会および寮務委員会において保護者の経済情勢等を踏まえ、学生に対する就学支援・生活支援を推進する。	①平成25年度は、全国国立高等専門学校メンタルヘルス研究集会に相談室長、看護 師が参加した。平成26年度は、国立高等専門学校後標本権メタルヘルス講習会「校 長、何で44間診塞長が参加した。 たのが、 でいるが、 でいるが	٧		②平成25年度厚生補導 圆縣 ③平成25年度学生委員 会関係
(2) 各高専の図書館及び寄宿舎の施設の実態調査とニーズ調査の 結果を踏まえ策定した整備計画及び平成25年度整備方針に基づ き、整備を推進する。また、女子学生の志願者確保に向けて、女子 寄宿等等の整備推進生る。 平成26年度は、各高専の著宿舎などの学生支援施設の実態調査 とニーズ調査を実施し、その結果を踏まえた整備計画の見直しを実 施し、当該年度整備計画に基づき、整備を推進する。	①寄宿舎(志学寮)及び図書館の老朽化した施設の現況、利用状況等の実態 ①施 を調査・分析するとともに、その結果を踏まえた施設計画を策定し、整備を推 ②だ。 進する。 (25.74年 成立5.28年度当初)の学生が寄宿舎生活を送っている特性を踏す 慰む え、学寮を全人教育の場上位置づけ、宿日直、指導体制を維持・強化する。 (3市学界と校舎と結ぶ通路を整備するかための増積等の事業を行う。 (4部市環境テイイン工学科様改修工事に伴い、図書館2階の9数表を行う。 (4部市環境テイイン工学科様改修工事に伴い、図書館2階の9数表を行う。 (4部市環境テイイン工学科様改修工事に伴い、図書館2階の9数表を行う。 (4の検討を行い、施設概算要求を行う。 (5年度中の完成を目指す。 (5年度中の完成を目指す。 (5年度中の定限に向け防犯体制、アメニティーの充実等一層の強化を図 製力 る。 (5女子寮の改修工事を行い、女子入療定員の見直しを行う。	他に、他介護の現場調査を行い施設機能改修計画を策定し、素務委員会や療生会の意見をも 性に、毎行が元本学の民族を基本を実施した。 地域の大学生の中級を超えることから、教育策の意義を高めつつ適正な運用を図 高ために、発生を制備を強化して、第一直体制を維持するとともに、2名の学案指導員(會 あために、発生を構造・通路については緊急に面の通行を制制に見続ることとした。 (場所は第一件が上が上が上が上が上が上が上が上が上が上が上が上が上が上が上が上が上が上が上	∢		(1) (2) (3) 張務委員会資料 (1) (4) (6) 契約李績 (4) 化对邻聚聚聚 (5) (4) 化散聚偏离 (5) (5) (4) 化散聚偏离相的 (5) (4) 化数离离离 (4) 化数离离离离
〈3〉各高専に対して各種奨学金制度の積極的な活用を促進するため、高専機構HPIに高専生を対象とした奨学団体への情報を掲示すまた、要学金について、産業界から支援を得るための方策を検討する。	①奨学金制度として、独立行政法人日本学生支援機構奨学金、鹿児島県育 英財団奨学金、各自治体奨学金、民間奨学金、その他の学生支援、生活支援。 として、授業対象院制度と災害共済給付制度があるが、これらの積極的な活 用が促進されるように情報を学生や保護者に提示する。 ②奨学金の返済遅滞がないよう、十分なガイダンスを行う。	①日本学生支援機構及功應児島県育英財団奨学生を対象に採用に係る諸手続の説明 会を4月に開催した。また、他財団・機関等各種奨学金や授業料免除制度と近害共済給 付制度等については、精動的に活用がある方、学生や設護者へ解構設検を行うた。そ のでは、生生や保護者からの問い合わせは、学生領において個別相談等に応じている。 ②日本学生支援機構奨学金の返還手続説明会を毎年2回開催した。	A		①平成25年度日本学生 支援機構關係 ①平成25年度鹿児島県 育英財団関係 ①平成25年度市町村等 各種要学金関係
(4)各高專における企業情報、就職、進学情報などの提供体制や相談体制を調査し、各高專における取組状況を把握し、その事例を各高専に問知する。	①各学科において過去および新規の企業情報。就職・進学情報のデータ、 入の充実を図り、担任および学科長を相談相手に学生の道正や希望に応 よる進路実務セミナーを企画する。 はな校の産学官連携組織である錦江湾テクバパーククラブ会員企業の会対 明会を実施する。	①次年度款職予定者を対象に、マイナビ講師による款職に関する講演会を実施した。ま た、企業情報については、会学制で自由に閲覧できるよう整理されているほか、別途図 書館がで自由に閲覧できるように配架した。 ・平成が官員は、春川高専の内田田理子教授による、「輝く性技術者であり続けるた に、一年が成立事 年本一と題に大・サイリア教政会議議第余金を文学生対象 に「三実施、「精験後も能力を活かして働き続けたいですか」といいに「はい」と「「は一に「精験後も能力を活かし、他参続けたいですか」として「「三実施」に「精験後も能力を活かし、他参続けたいですか」という間いに「はい」と「ない」と ・中での産学覧・連携機能のある。第二後の計算後は81ポイント増加して82%になった。 に、準備のための金瀬に出席した。 ②本技の産学覧・連携機能である額に漢テクノバーククラブ会員企業の会社説明会を平 成2本技の産学覧・連携機能である額に漢テクノバーククラブ会員企業の会社説明会を平 成2本程は「月に、平成26年度は「採用選考に関する記号の倫理憲章」の見直しにより 来年度4月に実施することだった。	∢	(可な77年4月17日に実施した。日程は 再終別の必要あり「平日は体育解体育 分 で使用、その後準備して実施、窮屈で はあつどが確備した打けまででき た、「本備かたずりはおいま。」((てで企業紹介用に企業パンラキ作政 し、クラスへ掲示、広頼誌にも掲載した)(①平成25年度、平成26 年度就職関係、女子キャ リア支援講演会ポス ター、女子学生の7ための キャリア支援講演アン トードの基準議アン イートの基準、機構提出 進の取り組み) (22014地域共同参画推 進の取り組み) ンター広報誌、研究シー ズ集19頁
〈5〉平成23年3月ご発生した東日本大震災により授業料等の納付が困難となった学生に対し、経済的理由により修学を断念することがないよう、授業料免除等の経済的支援を引き続き実施する。	該当する学生に対し、授業料免除等の制度を周知し、支援する。	本校に該当者はいないが、引き続き周知徹底を図る。	∢		
〈6〉商船学科における就職率を上げるための取組状況を把握し、その事例を各商船高導に周知する。					

26年度)
~平成
党25年度
告書(平原
·評価報
自己点檢
平成27年度

平成27年度 自己点檢·評価報告書(平成25年度	[1] 【 ○ 1	S:目標以上に維成している。 A:谦成している。 A':犇ね濰成している。		B:一部達成している。 C:道	C:達成していない。】
高専機構の年度計画(平成25年度~平成26年度)	高専機構の年度計画に対応または関連する鹿児島高専の計画	1 鹿児島高専(平成25年度、26年度)実績	自己評価	コメント (次年度の重要事項等)	自己評価の根拠となる資料
(6)教育環境の整備・活用					
(1>-1 機構全体の視点に立った施設マネジメントの充実を行うとともに、施設・設備についての実態調査を基礎として、施設管理に係るコイン・在把握、策定した整備計画に基づき、メンテナンスを実施する。また、実験、実型設備をお析化等の状況を確認し、その改善整備を推進する。併せて、モデル校によるコスト総減状況のフォローアップを行う。	(1)平成26年度は、平成24年度補正予算による耐震補強、教育施設の改善実も 施状況を踏まえ、平成26年度以降の施設整備総合計画を作成する。 1・平成26年度は、設備整備マスターブラン策定要項に沿って、老朽化した設備 1の 西利取び納規教育研究設備の調査を行い、計画的位数等・研究活動の推 、	第 ①平成25年度は、平成26年度以降の施設整備総合計画の基になるキャンパスマスター プランを施設マネジジント委員金で終けした。 第 プランを施設マネジジント委員金で終けした。 被 中収5年度は設備業金オスタープラン等が変現にかって、設備の更新及び新規教育研 を 実施の多数に、影像整備マスタープラン場入本盤一層を作成した。 ②平成25年度施設マネジメント委員会にて了承された教員配置計画に従い、中成26年 [1] 度に普通数マネジメント委員会にて了承された教員配置計画に従い、中成26年 [2] 第 第 2 年 2 年 3 年 3 年 3 年 3 年 3 年 3 年 3 年 3 年	ેં		() キャンパスマスタープ () シャセンパスマスタープ () ラインンパスマスタープ () 一部 () 一部
<1>-2 施設の耐震化については、計画的に整備を推進する。	①1s基準値を下回る施設の耐震改修について、平成24年度補正予算事業に て平成28年度に全てを完了した。	(①s基準値を下回る施設の耐震改修は完了したため、機能改善を目的とした図書館改善を平成28年度概算要求、情報教育システムセンターを図書館改修と同時期に宣議要求で要求し建物の長寿命化を図ることとなった。	∢		・H28年度概算要求書
(1>-3 PCB廃棄物については、ボリ塩化ビフェニル廃棄物の適正な処理の推進に関する特別措置法等に基づき、適切な保管に努めるとともに、計画的に処理を実施する。	①JESCO北九州事業所が平成26年度に閉鎖することから、本年度中に処分 を完了させる。	①分(①LESCO(日本環境安全事業(株))と平成26年6月に覚書を取り交わし、平成26年12月 に最終処分を売了した。	S		・JESCO請書、マニフェスト
(2)産業構造の変化や技術の進展に対応した教育環境の確保、安全で快適な教育環境及び環境に配慮した施設の充実を行うため、施設の老坊度、牧路化、耐震性、ユニバーサルデザインの導入状況、実験・実習設備等の支お行に等の実践を調産・分析力をとせし、その結果を指表で、策定した整備計画に基づき、整備を推進する。また、平成22年度に策定した省エネ化対策方針に基づき省エネ化を推進する。	①平成24年度補正予算で、都市環境デザイン工学科構の改修及び増築工事が予算措置されたので、平成25年度中の完成を目指す。 ②耐震強度不足の福利施設棟及び老村化に伴う図書館改修の予算要求を行う。 行う。 ③環境保全(低炭素化)・経費節減の観点から、引き続き全学的に省エネル ギーに取り組む。	- 事 (・	۶,		①③H24施設整備費補助 金票積報告書 (校舎) ②H27概算要求
(3)学生及び教職員を対象に、常時携帯用の「実験実習安全必携」 を改訂したうえで配付するとともに、安全衛生管理のための各種講習会を実施する。	①全学生及び全教職員へ、常時携帯用の「実験薬習安全必携」を配付する。 ②実習工場等の安全講習会を年1回、定期的に実施するとともに、新規設備等の導入に応じ適宜開催する。	5. ①全学生及び全教職員に対し、実験業習安全必携(改訂版)を配付した。 (企業習工場の安全課習会を4月に実施した。非た、実際実習以外の実習工場利用につ (構しても講習会を実施した。平成26年度には新規設備15輪制御マンニングセンタ」の講習 会も実施した。	∢		②平成25年度実習工場 の安全講習会実施報告
(4> 男女共同参画に関する情報を適切に提供するとともに、ワーケ・ ライフ・パランスを推進するための意識離成等環境整備に努める。	①機構本部等から発信される男女共同参画に関する情報を教職員へ周知する。 る。 ②講演会等を実施し、男女共同参画に関する教職員の意識向上に努める。	①機構本部等から発信される男女共同参画に関する情報。「男女共同参画News Letter」、「平成20年度ベビーンッター育児文語事業制引物の発行について」、平成26 年度「大学等における別女共同参画推進セオケー」のほか、次部科学名生建放策局や、 1ず 歴史編集、第高中の日本技術は全地をあたの情報を、学的の電子組帯やゲメールにて参照 員に開始を行った。 ②受講事をおけるために、ビデオ教材を活用した男女共同参画に関する講習金を日に がて実施し、全数職員の73%が参加した。 ・142年度から発足した出児島大学が主筆する「歴児島県内大学等男女共同参画連携 金属」で、各校の連携について意見交換を行った。	4		①②男女共同参画の意 議啓発に伴うDVD視聴に ついて

平成27年度 自己点檢・評価報告書(平成25年度~平成26年度)

【自己評価の標語 S:目標以上に達成している。 A:達成している。 A':概ね達成している。 B:一部達成している。 C:達成していない。】

自己評価の 根拠となる資料		①科母費応募一覧表 ① / 應児島県の農業・水 産業中心の産業構造と 間単との連携の力が制発を 関する調査分析・報告書 覧、平成27年度学校要 覧、平成27年度学校要	③產学官連携教育 CD報 告書	
コメント (次年度の重要事項等)				
自己評価		۶,	٨	A,
鹿児島高専(平成25年度、26年度)実績		(1) 平成25年度は、長岡技科大学と連携し、科学研究養療産差本校で開催した。こうし 生物。10 本等は、大大の本学に関係している方式・平成26年度は、中央内域環境、中央内域環境 生物の大力を募集に対しているであった。平成26年度は、中央内域環境の利研 要、気動研究の基準にいるでものよう。 一般である事業を行うしている下、環境省、農林大 産金の事業等に積極的に高速したが、不採択であた。 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・	①平成25年度は、高評価の研究題目については、校長裁量経費での研究費の傾斜配 分を行った。平成26年度は学内予算の減額で、評価の高かった者への傾斜配分は実施 いでもなかったが、当初予算配分で校長裁量経費を指置し、公募型により教員への予算配 いでもなったが、当初予算配分で校長裁量経費を指置し、公募型により教員への予算配 (②申請可能な人特 高成曲時事業の公券がなん数字をなかったが、申請可能な募集が (②申請可能な、共享に成事できる状態を推荐した。 (③地域共同テンパセンタースタッフに産学管連携教育コーディネーターが連携し、各種外 部資金への申請や、企業訪問等を実施した。	(
高専機構の年度計画に対応または関連する鹿児島高専の計画		(研究費補助金(科学研究費助成事業、A-Step その他)への応募者が引き 総書60%を超えるようである。 (対象を成るようである。 (付金等)の受け入れ総額が昨年度以上となることを目指す。 (金数 別が研究者院)のデータを展体 「同面新する。 (金数 別が研究者院)のデータを展体「同面新する。 事施する。 (本数 別成事業における申請書の作成法に関する講習会を今年度も 事施する。 (本数 の高専に呼びかけ、平位20年度より実施している「高事・中学校の連 場による環境気象情報ペットワークの構築に関する試験的研究(略称:気象 ネット)」[1週間・各共同研究体制を構築する。 (例 制資金の獲得のために、学内オフィス掲示板等により研究助成公募等の 情報提供を積極的に行う。	①外部資金への採択及び採択には至らなかったが評価が高かったものに対して、研究費を債齢配分することにより、共同研究等の受えを促進する。 2、所務基準省及び全国中小企業団体中央会の人材養的等の要のでので (以担い年育成事業への応募及び実施に積極的に取り組む。 ③企業と協力した技術者育成事業への応募及び採択に向け、積極的に取り組む。	(3) 長岡・豊橋両技術科学大学との連携のもと、産学官イベント等へ 地口展を通じてシースを紹介することにより、研究成果の実用化を促 ①研究を特許に結び付けるアイデア出しを促進する。 進する。平成23年度に構築した4的的財産管理システムの運用を行 2長岡・豊橋両技術科学大学及び鹿児島に0並びに351と連携し機構承継 い知的財産を有効かつ効率的に活用する。 知的財産書寄会の開催や知的財産コーディネーターを活用すること ③機構本部が構築した知的財産管理システムを活用し、知的財産に関する情 で、各高車の研究成果の円滑な知的資産化及び活用に向けた取り 頼の共有を図る。
高専機構の年度計画(平成25年度~平成26年度)	2 研究に関する事項	(1) 全国高事テクノフォーラムや各種新技術説明会等の開催により、各高事における研究成果を発信する機会を設ける。また、各高等での科学研究費助成事業等の外部資金獲得に関する調査を実施し、好事例の共有と活用を行う。	《2〉研究成果を発表する各種機会を活用し、高導の研究成果について広く社会に公表する。また、地域共同ナクノセンターや産学官連携・コーイ・イーター等を活用し、産業界や地方公共団体との新たな共同研究・受託研究・受託研究・受託が発売がある。例える指述する。	(3) 長岡・豊橋両技術科学大学との連携のもと、産学官イベント等への出表を通じて一人を紹介することにより、研究成果の実用化を促し、近する、平成23年度に構築した知的財産管理システムの運用を行い知的財産を有効かつ効率的に活用する。知的財産計留会の開催や知的財産コーディネーターを活用すること、な、各高車の研究成果の円滑な知的資産化及び活用に向けた取り、積約分を促進する。

高専機構の年度計画(平成25年度~平成26年度)	高専機構の年度計画に対応または関連する鹿児島高専の計画	鹿児島高專(平成25年度、26年度)実績	田口智	コメント (次年度の重要事項等)	自己評価の 根拠となる資料
3 社会との連携、国際交流等に関する事項					
〈1〉産学官連携コーディネーターを活用し、高専のもつ技術シーズを地域社会に広〈紹介するとともに、「国立高専研究情報ポータル」や産学連携広報誌等を用いて情報発信を行う。	「研究シーズ集への教員・技術職員の掲載率について引き続き90%以上: 目指す。 ②コーディネーター・テクノセンタースタッフを中心に企業訪問や産学官講演 会等へ出席し、研究シーズの紹介やPRを行うことにより、共同研究の推進 努める。 36 座学官連携組織「錦江湾テクノバークラブ」、鹿児島県産業支援センタ と連携し、本校にてシーズツアーを実施し、広報活動を行うと共に共同研究 の構造を図る。 の構造を図る。 の推進を図る。	在 (1)平成26年度の研究シーズ集への教員・技術職員の掲載率は57.3%であった(平成25年度は55.0%)。31を続き90%以上を目指す。 (2.地域共同テクルセンタースタッンと原学管理路教育コーディネータを中心に企業訪問や産学管課法会等へ出席し、研究シーズの紹介やPRを行っており、引き続き共同研究の推集に写める。 (3座学官連携組織「第江海テクルパークラブレ連携し、平成26年度と26年度の2月、本校にてジルスプルーを実施して「10年度の加が36)、実施を75・アプーを実施して「10年度の加が36)、実施を75・アプーを実施して「10年度の関係を10年度が36年の10年度は、10年度の最終を10年が一下を実施して「10年度を97年で10年度が36年の10年度が36年の10年度が36年の10年度が36年の10年に「36年度を77年を74年度が10年度が36年の「36年度を77年」では77年を74年度には「10年度を77年度を77年度を77年度を77年度を77年を71年度に対して10年度を77年で10年度を77年度を77年度を77年度を77年度を77年度を77年度を77年度を7	<		・鹿児島高専地域共同テ クノセンター広報誌 研 究シーズ集2014年度版
〈2〉小中学校と連携した理科教育等の取り組みの実施状況について調査・分析し、結果を各高専に周知するとともに、特色ある取組については総合データベース「KOALA」を活用し各高専に周知する。	①鹿児島県の小中学校を対象に、出前講座を実施する。 ②鹿児島市立科学館と連携し、「鹿児島高専の日2013」等の企画を推進す るがこしま県民大学中央センターと共催で行う「かごしま県民大学連携講座」 を活用して、「鹿児島高専の日2013」や科学実験教室等の「連携講座」 する。 6) 「象ネット」を維持すると共に、より広域的なシステムに拡張するよう努め 6。	()無内の離島等を含め、3件の出前型公開課醛を企画した。 ②平成25年8月11日(日)に應児島市立科学館で歴児島高事の日2013左開催し、約 2000名の入館者があった。 ③12月15日(日)にかして実現交流センターで第2回[鹿児島高事の日2013左開催し、 ③12月15日(日)にかして主張民交流センターで第2回[鹿児島高事の日2013左開催し、 (土)、26日 日)に開催し、第4年、「第単ロボットがやって(を)」は平成26年1月35日 (土)、26日 日)に開催し、第600名の入場をがあった。「無別 さらに、9月29日(日)にか と用係し、小中学生11名とその保護者の参加があり、大変好評であった。 (気楽ネットンスチムとして県内5地点、県外1地点の気象センサーの維持を行っている。(再携)	<		②「鹿児島高専の日 2013」 12013」 台書 台書 ③平成25年度かごしま県 長大学連携講座 申請 書・報告書及び平成25年 度校務連議事録
(3)公開講座(理科教育支援を含む)の参加者に対する満足度のア ンケート調査を行うとともに、特色ある取組およびコンテンツについて は総合データベースを活用して各高専に周知する。	 ①各学科がものろくりを主とした公開講座を実施する。 ②祭島・特別 養養 会会との事業協力が配こるうき機構構座を実施する。 ・社会人を対象として「ユーライブルッジ等島」を実施する。 ・小・中学生を対象とした「霧島チャレンジャー」を実施する。 	(平成28年度は小中学生を対象とした9件の公開課産を開講し、82名の参加者があった。 た。 所28年度は、施児島県教育委員会の組織である「かごしま県民大学中央センターと の共催で、小中学生及び一般市民を対象とした3件の「かごしま県民大学連携講座」を開 い。「計分の名の参加者があった。また小中学生を対象とした6件の公開講座を開講 に第4、計分の名の書かます。また小中学生を対象とした6件の公開講座を開講 (2平成28年度は「霧島市中学・高校教員研修」を月2日(大)、28日(木)に実施し12名 の参加があった。また、「きりします・レング・一括・12月4日(土)に実施した。 加があつた。また、「きりします・レンジャーは、1月4日(土)に実施した。	∢		①公開講座一覧、アンケート集計表
(4)各高専単位で構成されている同窓会同士の連携を強化するため、中収21年度に立ち上げられた「全国高専同窓会連絡会」の活動を支援する。また、本部事務局に卒業生担当の窓口を設置し、卒業生とのネッドワーク作りを強化する。	①創立50周年記念を機会に同窓会との連携を一層促進し、卒業生のネットワークを強化する。 ワーを強化する。 を修了生に伝える。 を修了生に伝える。	①同窓会と本校教員が連携し3年毎に同窓会名簿を作成するとともに、会員がネット上で データ更新ができるようにwebに各図った。また。創立50周年事業でモニュメントの共同 作成をはじめ同窓会館建設に向け連携体制を更に強化していく。 ②専攻科修了後も本校から情報を提供できるように、修了時にメールアドレスを収集している。	<		
(5)~1 公私立の高導や長岡、豊橋両技術科学大学との連携を図りつ、海外の教育 機関との学術交流を推進し、学術交流協定に基づく交流活動を充実させる。また、海外交流のなかで特に優かに取る 流活動の活性化を促す。 第4、海外交流のなかで特に優かに取る 4年に表してのよりました。第4、海外交流のなかで特に優かに取る 4年によったがイールのポリテクニック5校(平成23年度締結し、国際交付のよンガギールのポリテクニック5校(平成23年度締結し、国際交付のよングモンケル、上科大学ラカルグ・中成23年度締結)、音楽方学・「中成24年度締結)、音楽が1000円で「は、台村学校交流協定になって、学生で成24年度締結)、これで「は、台村学校交流協定性ないが、選を積極的に推奨することで交流活動の活性化を促す。また、在外研究員制度を活用し、数員の学術交流協定校への派遣を積極的に推奨することで交流活動の活性化を促す。 14、在外研究員制度を活用し、数員の学術交流協定校への派遣を積極的に推奨することで交流活した。 14、在外研究員制度を活用し、数員の学術交流協定校への派遣を積極的に推奨することで交流活生を積極的に推奨することで交流活生が、4分の正性化を促すとともに、長岡・豊橋面的に推奨することで交流活動の活性化を促すとともに、長岡・世代の東西東の東地の一環とに、表園のFD研修に取り組む。 数員のFD研修に取り組む。 45に、国際協力機構の教育分野の案件への協力を進める。	 ①本科低学年生の海外語学研修(オーストラリア・カナダ)を継続する。 ②カーティン大学(オーストラリア・パース)と連携した国際ものづくりブロジラを継続する。 ③の高導選携共同教育推進事業により、学生や教員の海外交流、海外インターンシップを推進する。 ③マーケンパリア・オクロデ生を海外にがボールのボリテクニックとの学生交流を続する。 ⑤サイリア・ボリテクニック等シンガボールのボリテクニックとの学生交流を続する。 ⑥マイヴ・ポリテクニック等シンガボールのボリテクニックとの学生交流を付ける。 ⑥オのカセサー大学及びキングモングットラカバン校、キングモンクットオバンカカセク及が存在権、実施する。 ③タイのカセサー大学及びキングモンクットラカバン校、キングモンクット1バンイン・アのペーロナエ科大学との交流を継続する。 ③カル州経済連合会会員企業や日系企業の協力を得ながら、アジア諸国に付るインターンシップを推進する。 ⑩カ州経済連合会会員企業や日系企業の協力を得ながら、アジア諸国に付るインターンシップを推進する。 ⑩日本学生支援機構(JASSO)の学生の支援プログラムに応募する。 	(1) 平成25年度、本科学生32名(1年生6名、2年生14名、3年生12名)を語学研修として7 メリカ・カリフルーアに活躍した。 ・1年の26年度、本科学生20名(1年生4名、2年生7名、3年生9名)を語学研修としてス ウェーデンに落進した。 ・2. 現在な済を休止中である。 (3) 年度な済を大は中である。 (3) 年度な済を大は中である。 (3) 年度な済を大は中である。 (4) 年度な済を大は中である。 (4) 年度な済を大は中である。 (4) 年度な済を大は中である。 (5) 年度な済を大は中である。 (5) 年度な済を大はからかった。 (5) 年度な済を大は、2000年度とも、2000年度とのスペリコウラルであるテラコカ ルテルレン湾番尾に流電した。 (5) 年度な発産を大の2000年度とも、2000年年1名。2000年を入びプラウスあるテラコカ ルテルレン湾番尾に流電した。 (5) 年度な発産を大の2000年度とも、2000年で1名。2000年を入びプラウスを入び入 ルテルレン湾番尾に流電と、2000年に1名。2000年年の名が入れた派遣を 製造した。 (5) 年度な存在を大の2000年年を入びインカボールのボリテクニック等を指揮的に学生交流と (6) 年間な写を集まりを発展した。 (7) 年度な存在と一ペン・ボリテクニックに不満とした。 (6) 年間は発生なる(2000年年の2000年年の2000年年)を不満した。 (7) 年間はまりに目言して本料学生2000年年)を不満した。 (7) 年間は、2000年年の支流を平月の2000年年の交流を平成が43日に対した。 (6) 日本学生な経した。2000年年の支援を平成が43日に対するイン ターンップについて、ベトナム、タイ、マレーンアでのインターンシッグを実施した。 (6) 日本学生支援機構(JASSO)の学生の支援プログラムに応募予定であったが、申請に は至らなかった。	∢		① 鹿児島高車だより第68 号・69号 学問連株大司 3) 一・8分号 管理機大司 数 高 作 (金) 本学 (

平成27年度 自己点檢・評価報告書(平成25年度~平成26年度)

【自己評価の標語 S:目標以上に達成している。A:達成している。A':概ね達成している。B:一部達成している。C:達成していない。】

			£ 32		
自己評価の根拠となる資料	①大学間連携共同教育 推進事業報告書 ②日本学生支援機構か らの採択通知書		①鹿児島高専だより第68 号 ・外国人留学生支援懇談 会資料		
コメント (次年度の重要事項等)					
自己評価	∢	¥	٨		
鹿児島高専(平成25年度、26年度)実績	() 平成26年度は、海外インターンシップの実施時期等の兼ね合いで専攻料生の応募はなかったが、専攻料進学予定の6年情報工学科の学生が海毒機制による海外インターンシップに募し、無代金社に、東ルスを目の1921年の2月の実際期間に、マレーンプの東洋工事の8年度は、高年機構による海外はのサンシップングリンがは、700割がインターンシップアングリンが、700割がインターンシップアングリンが、700割がインターンシップに対しては、前学類を指し、高年機構による事な社の海外インターンシップについては、前学類を指しいの高等者はな、後学期(3月実施分の希望者の募集を行ったが応募者に対しました。大名、高電連携等業による海外インターンシップについては2名の専攻を上が原本の事と変要を表集側面に実施している。	()平成25年度は、電子制御工学科へ国費外国人留学生1名を受け入れた。 ・平成26年度は、機械工学科、電気電子工学科、電子制御工学科へ国費外国人留学生 2名とマレーシア政府派遣留学生1名(お名)を受け入れた。 発展外国人留学も大名を受け入れた。 ので生産・環境の大学の大学のでは、 ので生産・環境の大学の大学のでは、 (3県内外で開催される各種国際交流関連の会議や研修・講習会等に積極的に参加し、 情報の収集に努めた。	①平成25年10月19日~20日に都城高車の担当で開催された「平成25年度 九州沖橋地区留学生文法研修会」に、4名の本校が国人留学生が参加した。 ・沖橋市場の担当で開催を近の「平成36年度 九州市構造区 留学生交流研修会」に、5 ・予備の外国人留学生が参加を下であったが、台湾接近のため中止となった。 ・平成27年 月32日(名)~3日(日)に日本文(化体験等を目的とした研修旅行(広島県芸 ・「本成27年 月32日(名))の第一日、日本文(化体験等を目的とした研修旅行(広島県芸 ・「本成27年 月32日(日)に開発が「成場、「中枢の保存」と一年の日本の保存 ・「本成27年 月32日(日)に開発した。		
高専機構の年度計画に対応または関連する鹿児島高専の計画	①高専機構による専攻科生の海外インターンシップに、積極的に応募する。 ②日本学生支援機構の奨学金制度への応募に向けたプログラム作成を行う。	①今後の私費外国人留学生の受け入れを考慮し、教育面および施設面の両の不受け入れ体制を整備する。 ②本受け入れ体制を整備する。 公前に学生療(第7志学療)に外国人留学生(長期、短期)を受入れられるように体制を整備する。 ように体制を整備する。 ③県内外の各種国際交流関連の会議に出席し、情報を収集する。	①日本文化勉強会、九州沖縄地区留学生交流研修会、九州地区の工場見学、または各種の地域国際交流イベントへ参加させる。		
高専機構の年度計画(平成25年度~平成26年度)	(5)~2 海外への留学を希望する学生を支援するため、日本学生支援機構の奨学金制度を積極的に活用するよう各高専に促す。また、今高事を対象に派遣学生を募集し、安全面に十分配慮した上で海外インターンシップを実施するとともに滞在期間を長くするなどの質的 19月1日指す。	(6)全高車による外国人学生対象の3年次編入学試験を共同で実施し、日本学生支援機構及び国際協力機構が実施する国内外の外国人対象の留学フェア等を活用した成績活動を行うとともに、留学性の受入れに必要となる環境整備や起策外国人留学生のための要学 10 金確保等の受入体制強化に向けた取組を推進する。また、全国共同利用施設として設置した留学生交流促進センターを 3 発展させ国際交流センターを設置し、留学生交流促進センターを 3 発展させ国際交流化ンターを設置し、留学生教育プログラムの企画 (各行うとともに留学生指導に関する研究会等の更なる充実を実施する。	<1>各地区において、外国人留学生に対する研修等を企画し、実施 する。		

平成27年度 自己点檢・評価報告書(平成25年度~平成26年度)

C: 嫌成していない。】

B:一部達成している。

A':概ね達成している。

A:達成している。

目標以上に達成している。

ö

【自己評価の標語

する資料 ②個人情報保護に関す る研修開催に関する資料 ・平成26年度鹿児島高専 公的研究費内部監査実 施要領 ・平成26年度高専相互会 ・平の部監査の実施について ①平成25年度、平成26 年度校長裁量経費の申 請について(通知) コンプライアンスに関 自己評価の 根拠となる資料 (次年度の重要事項等) コメント 自己評価 ⋖ ⋖ ⋖ ⋖ ⋖ ⋖ À ①「研究活動における不正行為」や「研究費の不正使用」に関するガイドラインの見直し 等に係る即時金及び「研究活動」における不正行為、の対応等に関するガイドライン」脱 報告に3名参加した。 ②平成が8年月18日、30日の20回開催した学内科研費股明会において、研究活動した 所名が五行為」や「研究費の不正使用」に関する各ガイドラインの脱明なし、教職員間で 情報共有を図るととした「不正施を響のの抗止を開放際にした。また、科研費股明会不審し イカス・エーム、「不理27年3月24日(2人)に研究機関における公的研究費の管理・監査 のガイドライン学習会 在開催した。「研究機関における公的研究費の管理・監査 ③・研究活動における不行為」と「研究機関における公的研究費の管理・監査 ③・研究活動における不行為」と「研究機関における公的研究費の管理・監査 ③・研究活動における不行為」と「研究機関における公的研究費の管理・監査 ③・研究活動における不行為」と「研究機関における公的研究費の管理・監査 た。 ②高事機構および九州沖縄地区校長・事務部長会議に継続して出席している。 第二事機構および九州沖縄地区校長・事野局専で開催された。昭和38年度校校長会議に 出席した。 (④平成27年1月に鶴岡高車で開催の、国立高等専門学校教員出身校長研究会に出席した。 (□)公的研究機構物でより力を作成し、活用している。 (②学生限では、機構の素粉は普換角金で作品)と素粉マニュアル-幕粉ガイドブック等 を参考して実務を行っているが、同マニュアル毎に基づいた本投におけるマニュアル 等等なものといいない。供売部門に関しては、機構の 教務の無質能を落しまるで本質 が表演角・教務派で毎年作成する「教務の手』書を活用し、担当業務を行っている) (丁坪成26年11月、金教職員に対し、コングライアンスセルフチェックを実施した。なお、コングライアンスは同するセルリチェックをディンスイスに関するセルリチェックの提出8.6%であるが。 ンプライアンス・スニュアルを 北京の年度は、全教職員に対して機構本部が作成したコンプライアンス・スニアルを ENすると提出、1月1日~1月28日の間にセルンチェックを実施し、全教職員が 120年以における教職員に対するが出年事件や各種解除間、高事業権機関序等的位 (2学内における教職員がするが出年事件や各種解除間、高事業権機関序的位 報セナュリティー 個人権機保護、パラスシェ、公的資金管理等可能な範囲でコンプライアンスに関する項目を強ひ込み、教職員の意識の上に繋がるよう努めだ。 ①内部監査については、5名の担当職員を発令し、12月に公的研究費内部監査を実施し た。 (②高専相互会計内部監査については、平成26年12月18日~19日に都城高専職員によ |各監査を実施した。 ①平成25年度、平成26年度とも、機構本部の主催する教員研修「管理職研修」へ参加し ①平成25年度、平成26年度とも、当初予算配分で校長裁量経費に1,000万円を措置し、 公募型により各教員への予算配分を行った。 ①総務課と学生課にそれぞれ緊急連絡用PHSを設置し、緊急時に備えている。 26年度)実績 鹿児島高専(平成25年度、 ①機構の業務改善委員会の各部門(庶務部門、会計部門、学務部門)で業務マニュアル・等務力イドブック等を作成し、これまで8つのマニュアル、事例集等のかれた。必要に応じ、同マニュアル等を基に本校におけるマニュアが等を作成し活用する。フル等を作成しばれまる。例のでは、同マニュアル等を基に本校におけるマニュースル等を作成しばする。例の理解を深め、協力を得られるように努める。ソフペトンルを推進してし、。 ①各地で開催される「研究における不正行為」や「研究費の不正使用」等についての説明と「精維共育を図る。 いての説明と「精極的」に参加、情報共育を図る。 のガイドライン等についての説明を行い、研究費の不正使用防止に対する体制の確認を行う。 別の確認を行う。 続い的研究教等に関する不正使用の再発的上策に基づいた取り組みを引き続き実施し、不適正経理の防止を周知機能する。 ①全教職員に機構本部が作成したコンプライアンス・マニュアルを配付し、年 に1回コンプライアンスに関するセルフチェックを実施し、教職員のコンプライア ①校長裁量経費を活用し、教育研究経費の戦略的かつ効果的な配分を行う。 ①内部監査を実施する。 ②高専相互会計内部監査においては、共通課題について高専間で情報を共 有い、指摘を受けた課題については、速やかに改善する。 ①学生・教職員の安否確認システムの導入を推進する。機構本部危機管理 室と各高専リスク管理室との緊急連絡用PHS回線による通信網を活用する。 ンスの向上を図る。 ②教職員の研修等において、コンプライアンス意識向上に関する研修を取り 入れるよう検討する。 高専機構の年度計画に対応または関連する鹿児島高専の計画 ①機構本部の主催する教員研修「管理職研修」への参加を推進する。 活動を機構などが、外が組出の校長事務制長金騰に参加する。 ③照和38年度校校長金騰に参加する。 (国国工高等専門学校教員出身校長研究会に参加する。 (1)一3 常勤監事の配置や監査体制の充実等、内部統制の充実・強化を推進する。また、時宜を踏また内部監査項目の見直しを行い、(発見した課題に上鉄超については精報を共有し、速やがに対応を行うとともに、監事監査報告について中間報告を行う。また、各高専の相互監査を見直し、一層の強化を行う。 (1)~2 機構本部が作成した、コンプライアンス・マニュアル及びコンプライアンスに関するセルフチェックリストを活用して、教職員のコンプライアンスの目上を行う。カイアンスの自上を行う。各高事の教験した路層別研修等においてコンプライアンス意識向上に関する研修を実施する。 (3)教職員の各種手続きの電子化及び簡素化について検討するとたれて、事務マニュアルの使用状況及び要望の把握に努め、内容の更新及び充実を推進する。 東邦及び充実を推進する。 また、T資産管理システムにより、ソフトウェア管理を適正かつ効率的に行う。 (1)-1 機構としての迅速かつ責任ある意思決定を実現するととも |に、そのスケールメリットを生かし、戦略的かつ計画的な資源配分を 行う。 〈1〉一4 各高専での取り組み状況を定期的にフォローアップすること により、公的研究費等に関する不正使用の再発防止策を確実に実施し、不適正経理の防止に努める。 (2)各地区校長会などにおいて高専の管理運営の在り方について 被約を進めるとともに、新代校長を対象とした高専の管理運営に関 する「新任校長所修会」、主事クラスを対象とした一等校運営、教育課 題等に関する教員研修「管理職研修」を実施する。 <1>一5機構本部及び各高専の緊急時の連絡体制の強化を行う。 高専機構の年度計画(平成25年度~平成26年度) また、必要に応じ本再発防止策の見直しを行う 管理運営に関する事項

5。 A':概お達成している。 B:一部達成している。 C:達成していない。】
【自己評価の標語 S:目標以上に達成している。 A:達成している。
平成27年度 自己点核・評価報告書(平成25年度~平成26年度)

コメント 自己評価の (次年度の重要事項等) 根拠となる資料			・情報セキュリティインシデント発生時の - 連絡体制を広めて手順をオーソライズ - 中名を心要がある。 - ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・
自己評価	٧	٧	∢
鹿児島高専(平成25年度、26年度)実績	①機構ならびに国立大学法人等、自治体の主催する研修会に搭極的に参加している。 下原の4年度は、九州・沖縄地区国立大学法人等の主催する研修会とび接触員の公技術職員のスキル には一定の5元。 「中位之程の必算が対きして、この分別員の表現を見りままでは、 「中位之程の表現の対策対策として、この分別員の表現を見りままに合ける。 「中位の4年度を育りが考望考表」表を開催し、3名(総員1名、事務2名)の被表彰者を決 定した。なお、この表表示での4年間に実施した。 についての4年度を育りが考望考表 日本の第一の第一の第一の第一の第一の第一の第一の第一の第一の第一の第一の第一の第一の	①平成25年度、鹿児島大学との人事交流による出向者は平成25年7月1日現在で12名でかり、事務職員全体の約43%とわめる。 であり、事務職員全体の約43%とわめる。 ・平成26年度、鹿児島県内4機関における人事交流による出向者は平成28年7月1日現 在で12名であり、事務職員全体の45%を占める。事務職員の活性化の観点から、高専機構の高専問職員交流制度等も活用し、次年度以降も積極的に安流を実施する。	①情報セキュリティインシデント発生時の連絡体制及び対応手順の最終調整済版まで確定した。 ・②情報セキュリティ経査での指摘や助富への対応を検討した。 ・②情報セキュリティ経査での指摘や助富への対応を検討した。 ・場の能定要求を制け付けないことにした。 ・「最初の能定要求を制け付けないことにした。 ・「最初の第2年要求を制け付けないことにした。 ・「最初の第2年要求を制け付けないことにした。 ・「最初の第2年要求を制け付けないことにした。 ・「最初の第2年のよりがある。」 ・「「「「「「「「「「「」」」」、「「「「「「」」」、「「「「」」」 ・「「「「「「」」」、「「「「「」」、「「「「」」」、「「「」」、「「」」 ・「「「」」、「「「」」、「「「」」、「「「」」、「「」」、
高専機構の年度計画に対応または関連する鹿児島高専の計画	①カ州・沖縄地区国立大学法人等や(独)学生支援機構等が主催する研修会への参加を積極的に推進、継続する。 ②教育・女仏宣忠及仏社会貢献に関し顕著な功績を挙げた者を「教育功労 過去して表彰する。 ③高專機構、九州沖縄地区、JASSO等が行っている各種教職員研修会を積極的に活用する。	①高専機構の高専間職員交流制度を活用し、他高専等への職員派遣に努め る。また、鹿児島県内4機関における人事交流を推進する。	①情報セキュリティ実施手順を段階的に整備する。 ・情報の格付けと取り扱い制度を具体化する作業を進める。 ②情報セキュリティ監査の講評を踏まえて、情報セキュリティ対策の見直しを 進めるとともに、全教職員を対象とした情報セキュリティ意識向上のための研 修を計画・実施する。
高専機構の年度計画(平成25年度~平成26年度)	(4)事務職員や技術職員の能力向上を図るための研修会を計画的 に実施するとともに、国、地方自治体、国立大学法人、一般社団法人 国立大学協会などが主催する研修会に参加させる。 また、職務に関して、特に高く評価できる成果が認められる事務職 員や技術職員の表彰を行う。	(5)事務職員及び技術職員については、国立大学や高専間などの(人事交流を積極的に推進する。	(6) 各高導の校内ネットワークシステムシステムや高専統一の各種(システムなどの情報基盤について、時直を踏まえた情報セキュリティ・対策の見直しを進める。 また、教職員の情報セキュリティ意識向上のため、必要な研修を計・ 画的に実施する。

評価項目 1 教育に関する事項 (1)入学者の確保

回答	1) 高専機構全体と本校の方針に基本的な違いはない。但し、立地条件(県内ないし近県に有力な工業系企業が多数 あるか、そうでないか)により、中学生の意識は異なるのでそれに対応したPRが必要であることは言うまでもない。本 校では平成26年度までの取り組みや入学者の分析から、「就職がよい工業系」の学校という狭い認識を変えることを目 指している。平成27年度より中学生へのPRにおいては、多様な進路が可能な「高等教育機関」であり、「技術者(エンジェア)は新たな技術開発をおこなう職種であり、技能職とは異なる」ことを強調している。 ジェア)は新たな技術開発をおこなう職種であり、技能職とは異なる」ことを強調している。 2) 女子中学生向けの公開講座を募島市と歴児島市で開催しているほか、平成27年度より体験入学において女子中学生向けの茶話会を開催し、おおむわ好評であった。 生向けの茶話会を開催し、おおむわ好評であった。	「効果分析」として、1日体験入学の参加生徒の内、本校受験の生徒数を毎年調べている。この比率は例年同程度なので、1日体験入学の参加生徒が増えれば、本校受験の生徒数も増えるので、1日体験入学のPRには特に力を入れている。した。また、平成27年度から 霧島市教育委員会との連携を強化し、小中学生向けの公開講座については教育委員会を通じて、霧島市の全小中学校に案内を配布して頂いている。 度島市の全小中学校に案内を配布して頂いている。 庭児島高専の日や公開講座(理科教育支援を含む)等の参加者に対しては必ず満足度に関するアンケート調査を行うと共に、新入生へのアンケート調査も行い、入試志願者数等との相関についても検討する。	ご意見・ご提案に感謝します。中学校訪問時にはその中学校出身者の就職先、進学先の紹介をしているが、その後の活躍、実績などについては、組織的な調査・活用はなされていない。どのように調査し、データを活用するかなど、今後、検討したい。	志願者倍率の低い学科については、平成27年度に入ってから学科として志願者確保のための特段の取組をお願いしている。それに応えて、学科独自のリーフを作成し配布する、また地元自治体の広報誌に取り上げられた在学生の記事をPRIこ活用するなどの取組がなされている。また、日本の工科系高等教育機関の中で独自の体制を持っている高事の認知度をあげるために、有力な外部媒体で高専を取り上げた記事を積極的に活用することも必要であり、効果的であると考える。(最近では、文藝春秋2015年12月号pp.352~359「地方企業を支える高専の底力」など)	推薦選抜への志願者増に少しでもつながるように、過去の入試データの分析結果も踏まえて、推薦選抜における工学適性検査と作文を課さないようにした。 また、4年次編入試験においては、筆記試験をとりやめ、口頭試問とした。今後は基礎学力とともに工学技術へのモチベーションの高い学生の掘り起しにつながる方策を検討したい。	鹿児島県内においても、中学生やその保護者への高専の知名度はまだまだ低く、高専の情報を知ったうえで、志願しない(させない)というより、高専そのものを知らない部分が大きい。学校制度としては国外からも認められる優良な制度であるので、質・量ともに大幅な広報活動の拡大がまず必要であると考える。		
事前コメント	1)少子化が急速に進む状況を控え、入学希望者の確保に向けてどの様な戦略を立てているか。高専機構 全体としての方針と、鹿児島県に立地する高専としての貴校の方針は、同じものかどうか。 2)今後女子の入学者増が産業界から期待され、学生確保の点とも併せて喫緊の課題であろう。貴校も 様々な努力を試みているが、戦略と成果を伺いたい。	少子化で中学校卒業者が減少するなか、入学説明会や体験入学をはじめ、あらゆる機会を通して貴校の「PRIC努めており、また配布物等についても工夫・充実してきている点は評価できる。 今後は様々な取り組みが入試志願者数等にどれくらい反映しているか、その効果分析を行うなど精査して いくことも必要かと思われる。	以前に勤めていた会社で、高専卒業生の専門性の高さや、社会人として質の高さを実感していた。卒業生 の実績をもっと強調することで、入学への強い動機付けを作ることが出来ると思う。	 量的には十分なPRがなされていると思う。質の部分、例えば、倍率が低い学科への集中的な取り組み等 すなども検討する必要があるのではないか。	現状のままとなっている入試方法の改善については、貴校が求める学生選別につながるようなユニークな入試等も含め、スピード感をもって検討されることを望む。	少子化が進展する中、中長期的な入学者の見通しを踏まえての取り組みが必要ではないか。	広報誌の再編や女子学生確保へ向けた取り組みを積極的に行っている。	入学希望者向けのツールとしての「キラキラ高専ガールになろう」、「高専女子百科Ju. 」は、解りやすく、大 変興味が特でた。
項目	ご 徳 用等	に ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・ ・	が開発を表	いき用等	改善を要する 点	改善を要する 点	優れた点	優れた点
通し番号	-	2	8	4	r.	9	7	8

評価項目 1 教育に関する事項 (2)教育課程の編成等

通し 番号	項目	ナンベロ恒棒	回答
6	ご意見等	1)高専創立以来の熱心な教育改革により、高専全体として教育課程は完成の域に達しているものと推察、するが、近年の激しい社会・経済界の変化ならがに学生の資質・環境の変化により、今後も種々の改革が、求められるであろう。一方で、過度上頻繁な教育改革は卒業生の質の不安定化や教員の疲弊を招きかわない。豊校では、教育改革の検討を、との様な組織でとの程度の周期で行っているか。 2)改革にはPDCAサイクルによる評価が有効であるが、貴校での取組状況はいかがか。	1)教育改革の検討は、教務主事・主事補を中心として教務委員会が行っている。大きな周期としては高専機構による 中期計画にのっとって5年をサイクルとしている。またその他のチェックのサイクルとしてJABEEが6年毎、機関別認証 評価が7年毎、認定専攻科の審査が7年毎となっている。校内でのPDCAのサイクルは課題によって異なるが、委員会 ごとの課題であると1年ないし2年である。 2)教育についてののPDCAサイクルは「鹿児島高専教育改善システム」として規定されており、それに則った活動が行 われている。
10	に意見等	時代のニーズを踏まえたカリキュラム改革や土木工学専攻の改組、英語カ向上へ向けた取り組み、授業 ・ 評価等意欲的に推進されているが、具体的な内容について詳細が分からなかった。	高専全体として取り組んでいるモデルコアカリキュラムは、教育の質を保証するものであり、本校では平成27年度より 一般科目から、すべての学科の教育課程がこれに対応するものとなっている。土木工学専攻の改組は平成22年度に 本科の土木工学科を都市環境デザイン工学科と改称し、建築の要素も取り入れたことに伴い、その完成年度卒業生に 合わせて専攻科も改組した。
11	に意見等	企業が学生に求めるものとして、専門性以上に、熱意・意欲や行動力・実行力といった点があげられると言うわれている。 高専の教科で弱いと言われる基礎教養と共に、専門性以外のこれらの資質を上げることも求められている と思う。	経済同友会2010年の調査において採用選考の際、最も重視する項目として「熱意・意欲」が挙がっているが、通常は、 行行動力・実行力」として評価しているところが多い。こちらについては、その他の調査からも高専卒業生に企業からの 不満はないようである。 しかし、基礎教養が弱いと言われていることから、窮屈なカリキュラムの中で、可能な範囲で取り入れるようにしてい る。しかし時間の絶対数が少ないために十分ではない。
12	にき見事	学習到達度試験の結果が全国平均を上回るようにするための多くの取り組みが計画通りに実施されたことには分かる。その結果、目標(平均値越え)が達成できたのかは不明。学習の場を設けることも大事であるが、どうやって達成するかの戦略も重要と考える。	学習到達度試験の結果が全国平均を上回るようにするための多くの取り組みが計画通りに実施されたこと 平成25年度より始めた1,2年生の数学の学力不振者を対象にした補習によって、学内での成績がわずかではあるが は分かる。その結果,目標(平均値越え)が達成できたのかは不明。学習の場を設けることも大事である 向上したとの分析結果がある。今年度(平成27年度)の学習到達度試験の結果を分析して、今後の対応を検討した が,どうやって達成するかの戦略も重要と考える。
13	改善を要する 点	鹿児島高専ならではの特色有る科目やカリキュラム等の検討を期待する。	高専ごとの特色を打ち出すことは、大きな課題であるが、一方で国立高専全体の教育内容の基礎を統一するモデルコアカリキュラムがあり、これへの対応が喫緊の課題であった。今後は学科ごとの特色をカリキュラムにどのように反映できるか検討したい。 できるか検討したい。 今後は例えば農工連携の分野で、学科毎に特色あるカリキュラムについて検討している。
41	優れた点	時代や地域・学生のニーズに応じた改善を継続的に進めている。また、学生レベルに沿った補講体制の整備等、細やかな対応が行われている。	

評価項目 1 教育に関する事項 (3)優れた教員の確保

運産出	項目	オンメロ神幸	回答
15	ごき見等	1)「優れた教員」の定義は、どの様にお考えか。人事は貴校でも公募に依っていると思うが、複数候補者から題考するにあたってとかく研究権信用が行きやすい。指導を受ける学生の年齢域を考慮すると、「教育能力」の評価視点を確立することが必要と考える。 う能力しが開価視点を確立することが必要と考える。 2)ただし上記の意見は研究能力の評価を任みているのではなく、専攻科等を志す学生の指導において、最先端の研究体験を情熱をもって語れる教員の存在は、宝であろう。	本校の教員として教育を担当するにふさわしい教育上の能力を有し、優れた知識、経験及び実績を有していることは基本的に必要な条件であるが、さらに、専攻科を担当できる能力として、博士の学位を有し、採用後も継続して研究に専念することができる人材を優れた教員と考える。公募を行った際の「教育能力」の評価視点として、面接時に面接官を学生とみなした模擬授業を行っており、一定の水準に満たない応募者は採用しない。
16	ご意見等	現教員へ向けた研修、評価システムの充実と共に、公募制や女性教職員の積極採用等優れた教員確保に向けた取り組みは、枠組み先行に終わらないように留意して欲しい。	今年度についても引き続き公募制により教員の確保を図り、公募要領に女性教員を優先的に採用する文面を記載している。また実際に今年度4月より女性教員を1名採用している。 いる。また実際に今年度4月より女性教員を1名採用している。 研修についても機構本部等が開催する研修会への教員の参加を引き続き推進している。
17	ご意見等	教員確保に困窮している状況なのか,そうでないのかの状況で取り組みの方法も異なるような気がする。	教員確保については、緊急に人員の補充が必要な状況であっても公募制を採択している。基準に達しない応募者については、想定していた期間内の教員の確保が困難になった場合でも採用は見送っており、教育の水準を下げる事が無いように配慮している。
18	改 善 た 所 か う	、優れた教員"とは、どのような人材なのか?鹿児島高専にとって必要な人材、また全教員への効果的な 研修の機会について検討も必要なのではないか。	"優れた教員"については、通し番号15の回答参照 高専教員にまず求められるのは教育力であり、特に近年では、知識を「教える」教育から、学生自らが考え「学ぶ」教育 (アケィブラーニング)を実践できる力が重要である。この点については高事機構の各種研修会に教員を派遣してお (アケィブラーニング)を実践できる力が重要である。この点については高事機構の各種研修会に教員を派遣してお がその教員が校内で打容等について講演事の形をとっている。その他の教育改善(PD)に関するデーマニのいての研 修会を学内で2回程度、即に九州内の他高車の研修をネット配信にて受講するなどして、教員全体への研修の機会を 確保している。更に、教員個別に授業力を高めるための、同学科教員によるピアレビューも今年度より開始した。 上記の教育力と併せて、専門学科教員には専攻科を教育するための研究力(論文を発表するレベルの能力)が求めら 公募制による教員の選考では、公募を行う学科が独断的に採用者を決定するのではなく、校長及び副校長全員が本 校の将来性を考慮した上で必要な人材を採用できる体制を取っている。研修の機会については全教員に等しく与えて いるが、本校において真に効果的な研修の企画についても今後検討したい。
19	優れた点	優れた教員確保へ向けた取り組みの努力が見られる。	
20	優れた点	民間企業経験者等幅広い人材の採用は、教員の資質向上に大き<貢献すると思う。 更に幅広い人材の確保に努められることを期待したい。	

評価項目 1 教育に関する事項 (4)教育の質の向上及び改善のためのシステム

	(1)運営会議に基づき実施されている。2)校務連絡会議で各学科の状況について学科長から積極的に意見を取り入れるようにしている。また校長による教員の配款を全教員に実施している。教職員集会も年に3回実施している。	世界的な教育の方向性として「知識の教授」から「学生の能動的学習」(アクティブラーニング)と、ICTの活用がある。こ れは高専機構全体でも取り組まれていることであるが、特に積極的に進めていきたい。 九州沖縄地区の9高専と連携したFDを実施している。 先進的な取り組むのカフロジェケ・チームをつくり、検討している。	モデルコアカリキュラムについては、全ての学科の教育課程が平成27年度入学生よりこれに準拠するものに改訂された。即ち、教育内容はモデルコアカリキュラム準拠となっている。今後は教育レベルの目標達成を確実にすることへ活動を進めていく予定である。	モデルコアカリキュラムは、各学科において教育すべき科目とその内容、総括的な達成レベルを決めたものであり、現状は上欄で述べたとわりである。インターンシップ(4年工場実習)は、受け入れた業の確保が出来ず、現在4割程度の学生しか参加できていない。また、に7活用教育については電子黒板の設置や教室での無線LANの利用可能台数の拡大など、インフラ整備が必要なことが、推進の障害となっている。 い、また、107活用教育については電子黒板の設置や教室での無線LANの利用可能台数の拡大など、インフラ整備が必要なことが、推進の障害となっている。 一部教育の独権等のため、「グローバルと「アクティブラーニング」という現在の高事教育に不可欠なコンセプトを基に新たに「グローバル・アクティブラーニングセンターを統合してICIT 日教育の独権等のため、「グローバル」と「アクティブラーニング」という現在の高事教育に不可欠なコンセプトを基に新たに「グローバル・アクティブラーニングセンターを設置した。 アローバル・アクティブラーニングセンターを設置した。 アローバル・アクティブラーニングセンターを設置した。 アローバル・アクティブラーニングセンターの日情報教育システムセンターの改修については、概算要求とは別に営籍要求を行っておい、要求が認められると平成28年度の工事となる。 他高専事のICITを活用した。ラーニング教材の導入ならびに、それらを活用したアクティブラーニングの実践事例等を調査し、活用を推進する。	ICT活用教育は、簡単なレベルではプロジェクターを利用した授業から、サーバーを介したLMS (ラーニングマネジメントンステム) を利用した、資料配布、テスト、達成度管理、自宅学習教材の提供等まである。 インフラ整備やLMSの導入など、高専の教力では限界があり、現在、高専機構全体で対策が知られている段階である。 なお、本校においては上欄でも記載した。通り、今年度(平成27年度)より、既存の図書館と情報教育システムセンターを統合してICT活用教育の推進等のため、新たに「ヴローバル・アクティブラーニングセンター」を設置した。	
インメロ追車	1)高専における諸決定の最終責任者は校長と思うが、校長の最終決定権は規程等でどの様に保障されているか。 いるか。 2)教育改革にあたって、校長の決定に対して教員の積極的意見が取り入れられる仕組みになっているか。	教育の質向上ならびに改善のためのシステムづくりに向けて、着実に取り組まれていると感じるが、更に先を見越した先進的な取り組みが生まれることを期待する。	最低限の能力水準・修得内容を国立高専のすべての学生に到達させることを目標とするモデルコアカリキュラムの導入・普及を確実に進めていただきたい。	今年度から導入されたモデルコアカリキュラムの実施内容やインターンシップならびに他大学との単位互 後システムの実施状況・効果等が分からなかった。また、B評価のICT活用教育等に関する事項について は、迅速な取り組みが必要かと思われる。	ICT活用教育は、これから先の教育活動の中で、必須の項目であり、技術系の専門学校として、早急に対策を取る必要があるのではないか。	JABEEシステムの認定や単位互換協定による他大学生との交流の場の提供、インターンシップの推進等 積極的に取り組まれている。
項目	「意見等	「意見等	「意見等	改善を要する 点	改善を要する! 点 点	優れた点
通し番号	21	22	23	24	25	26

評価項目 1 教育に関する事項 (5)学生支援・生活支援等

	通田	ムンメロ垣棒	回答
) J 地 明	姚	1)高専数育の優れたところは、伸びしろの大きな学生が持つ可能性を十分に成長させることだと思っている が、これには教育支援だけでなく、充実した生活支援等が貢献している。この点で、広い意味で学生支援 が重要である。貴校における生活指導の特色を伺いたい。 2)最近は、メンタル的に問題を抱えた学生が多いという声を聞く。貴校の実状と対策はいかがか。	1学生指導の特色としては、全学生の半数以上が生活する「寮」の存在が大きい。学生は、そのなかで、授業以外の生活の大部分を過ごす。寮券主事を中心とに子業務委員の教員、業務係員、舎監・寮母の支援のもと、集団生活のルールを守ること、先輩、後輩、同室者との人間関係の変わさせた。 等力を学び、結解・洗濯などといて生活する(命を学ぶ、このことは、学生の自立心を養うことに貢献している。また、コーチや監督に教職員や学 外コーチを委嘱しての部活動が盛んであることも、学生の死実した生活支援に寄与している。 2シンタルヘルスこのいての実情としては、数名の学生が問題をおえていている。 2シンタルヘルスこのンパでの実情としては、数名の学生が問題をおえている。 具体のシスタルヘルスへの対策については体格診断ラスト等を行い、その全学生に対し、プランセリングを行い、問題を抱えた学生の把握支援以外 に、カウンセリングへの学生の理解を深め、何かあった時の手段のひとつとして、学生に対してカウンセリングを記録させる目的もある。 は、カウンセリングへの学生の理解を深め、何かあった時の手段のひとつとして、学生に対してカウンセリングを認識させる目的もある。 に、カウンセリング、学生を記し、結果を発売し、結果を分析することで経験を要する学生等の情報を発展している。また、ウラス担任制をとって おり、クラスことに、ハイバーのロテスを行い、クラス内での学生の工様の選尾である。また、ウラス担任制をとって おり、クラスことに、ハイバーのロテスを行い、スクログの学生の工様の選尾である。また、の事をはこのでは、個人 おり、クラスことに、ハイバーのロテスを行い、その工様の上標度とするないで変え扱と判断された学生については、個人 が都カウンセリング、学生を取り巻く教職員(学生何でも相談室長・クラス担任・学科長、教科担任・明活顧問等)での見守りの体制で、危機管理 小部カウンセラー2名、嘱託教授3名に依頼し、カウンセリングを実施しており、教員一人が抱えることなく、チームで対応する体制をとっている。
順	ご 意 見 等	安心・安全かつ快適な環境づくりにおいてハード面の充実は重要であり、今後も予算化等優先順位を決めて進めて頂きたいが、多様な学生ニーズへ対応できるよう、相談窓口の充実をはじめ、ソフト面での学生支援・生活支援に努めて頂きたい。	近年多様化している学生ニーズに対応できるよう、学生課でも相談窓口の布実を図っている。 担任制度をとっており、積極的に学生に対して声かけしている。専攻科では専攻長が担任の役割をしている。 また、教員についてもそれぞれ「オフィス・アワーズ」として学生のための時間を確保し、学業、生活等の相談に応じる 制度を設けている。
着	改善を要する 点	学生支援・生活支援等の取り組みが学生のニーズとマッチしているか常に学生の声を吸い上げ、改善していく仕組みが必要である。 いく仕組みが必要である。 また、多様化する学生ニーズに対応するために、相談しやすい体制づくりや窓ロ・ツール等の充実、メン タルヘルス等今日的課題への迅速な対応も期待するところである。	学生の声を吸い上げる取り組みとして、まず担任があたっている。 学内に意見箱を設置し、保護者、学生からの意見が寄せられ、必要に応じて学校として回答を行っている。 また学生何でも相談室には相談室専用のメールアドレスを設けており、メール相談も行っている。更に高専機構による 24時間 対応のKosen機構 相談室ニコン・スのカード(フリーダイヤル 24時間385日受付・無料のカウンセラーとの相 第四については、適し番号28で回答したとおりでも相談できる体制を取っている。 窓口については、適し番号28で回答したとおりである。 また、今日的課題については、費用対効果の観点からも、効率的かつ迅速な対応を行えるよう日頃より担任が中心と なって、情報収集に努めている。
極	優れた点	より良い学生支援・生活支援へ向けて、各種取り組みを推進している。女子学生向けのキャリア形成セミナ一等、効果的な機会を提供できている。	
<u></u> 優	優れた点	女性技術者としてのキャリア形成支援講演会では、高い成果を上げており、このような行事の積極的な展開が、女子学生確保にも有効と思う。	

教育に関する事項 (6)教育環境の整備・活用	オンメロ川事
評価項目 1	項目
	しる

回答	鹿児島大学を代表校とした、地(知)の拠点大学による地方創生推進事業(COC+)(本校は参加校)と、鹿児島、大分、都収3高車携仍教育改革推進本部プロジェケト事業において、地域企業の協力を得て、有識者・技術者を招聘し、学生に対して講義、講演、ゼミ指導、施設見学、体験学習などを実施している。教育設備不実のために、全教員が科研書等の外部資金に積極的に応募している。真た、錦江湾テクノパーククラブ会員企業との共同研究の拡充を図っている。	学生主体の活動として、学生会において構内や近隣地域の美化活動を行っているが、学生自らが考え環境への取り組みを可能とするような体制づくりとして環境マネジメントマニュアルを作成中であり、教職員及び学生の更なる環境に対する意識向上の啓発を図る。	全学生に配付した安全手帳(実験実習安全必携)に基づいて、実施している。 毎年度、卒業研究で実習工場を利用する機会の多い5年生、課外活動で利用する学生及びその他希望者を対象に安 全講習会を実施している。 全講習会を実施している。 平成26年度は、より分かりやすい内容にするために、基本的な安全に係わる事項や、実際の作業で発生している災害 平成26年度は、より分かりやすい内容にするために、基本的な安全に係わる事項や、実際の作業で発生している災害 事例など、図や写真を多用した内容の講習を行った。また、各工作機械の取り扱いに関する講習では、少人数に近分 けして安全作業を行うための必須事項や事故・災害の発生に繋がるリスクを伴ろ行為について、実際にやって見せるな とエ夫をして注意喚起を行った。 とエ夫をして注意喚起を行った。 となりを決定して決算機に対していて、危険作業の事例を交えて、直感的に理解しやすい内容にした講習会を 実施することで、安全が環境づく切り取り組んでい、。 ま施することで、安全が環境づく切り取り組んでい、。 これからも、女性技術者として必要とするキャリア形成を支援する講演会や女子中学生向けの公開講座等を行ってい 、これからも、女性技術者として必要とするキャリア形成を支援する講演会や女子中学生向けの公開講座等を行ってい 、これからも、女性技術者として必要とするキャリア形成を支援する講演会で女子中学生向けの公開講座等を行ってい 、「本教室等を行う。 また、今年度(平成27年度)は、九州沖縄地区の高専が協力して高専女子フォーラムを開催し、女子学生の発表の機会を設ける。
事前コゾント	国の財政状況が厳しさを増す中、現状の教育設備・施設開係予算では、必要レベルの環境維持が困難と推測される。高専教育で重要視される現場体験では、先端的な機器類での体験が必要だが、高専サイドの努力にも限界があるのでは。そこで地域企業(製造業)との協力を得て、カリキュラムの作成から単位評価まで、産学協同を行うことで対応されてはいかがか。既に実施済みであれば、成果を伺いたい。	キャンパスマスタープランに基づいて着実に施設整備を進めていくと共に、ハード面に加えて、省工ネ、省 資源化をはじめ、ソフト面の充実、たとえば学生が主体的に関わっていく機会・体制づくりも必要かと思われる。	安全講習会の実施にあたっては、緊張感ある講習となるようマンネリ化防止の工夫が重要かと思う。 また、男女共同参画社会やワーク・ライフ・バランス推進の研修会については、ワークショップ形式等気づき・考えさせる研修となるよう改善・検討が必要かと思われる。
項目	ご意見等	ご意見等	改善を要する 記
運産の	32	33	34

評価項目2 研究に関する事項

評価項目 3 社会との連携、国際交流等に関する事項

四	1)教員の自己点検票にて、社会連携の取り組みを評価項目としている。 2)低学年では異文化理解と英語によるコミュニケーション能力アップのため、学生のモチベーション向上を狙って、スカェーデン・フラス、アップリス・ハイ)への部外研修を実施している。また、高学年では、大学間連携は国教育推進事業(高卓・企業・アジア連携による実験的・創造的技術者の兼成)に基づいて海外企業でのインターンシップに精権的に参加するように取り組んでいる。これらを通して世界で活躍できる素養を持った技術者の育成に取り組んでいる。	本校の学生や教職員に対し、地元企業を良く知ってもらうために、企業見学を実施した。また、企業説明会を本校で実施し、地元企業への就職希望者に有益な情報提供の場とした。 施し、地元企業への就職希望者に有益な情報提供の場とした。 大学問連携共同教育権権事業((高事・企業・アジア連携による実践的・創造的技術者の養成)に基づいて海外大学等 との交流も積極的に進めており、今年度6ヶ国の海外研修を含め、海外の学生との交流の機会を多数設けている。 現在、補助金が終了する2年後の自立化に向けて検討中である。	・ものづくりや理科教育に関するものとして、本校主催の公開講座で、小中学生向のテーマが数件以上実施され、毎年学生に参加を参加者がある。霧晶神教育 委員会との連携事業である「きりしまチャレンジャー」では毎年約60名の小中学生にものづくり実習を指導している。 ・鹿児島市科学館と連携した「高専の日」では実験教室においても小中学生向けのものづくり実習を実施しているなど、さまざまな機会に子供たちに科学技術やものづくりに興味を持ってもらう取り組みを行っている。 ・かごしま県民大学中央センターと連携し、12月20日に主に小中学生と保護者を対象とした「高専ロボットと音楽会」を 別催予定である。毎年、300名から500名近くの参加者があり、ロボッド等のものづくりへの関心を高めてもらっている。	通し番号41の2)を参照	606十事業を通じて、今後も霧島市への協力を継続したい。	606十事業を通じて、今後も霧島市への協力を継続したい。	高等教育機関のグローバル化は避けて通れないものであるため、本校も力を入れている。平成26年度より、タイの大学から2ヶ月の短期の学生を5名受入れ、5年生の卒研や専攻科の特別研究などで日本人学生と一緒になってプロジェクトを行っている。 今後はこのような事業を拡大していきたい。	従来本校だけで海外インターンシップを実施していたときは、海外の受入企業が少なく、年間2、3名程度であった。現在九州沖縄地区の9高専が連携して行う文科省の補助事業では、本校が代表校となり、特にアジアの国々において企業インターンシップの推進に取り組んでいるが、受入企業の開拓が思うように進まず、年間4、5名程度にとどまっている。。、後は受入企業を開拓し、多くの学生がインターンシップに参加できるようにしたい。	
本ングロ神事	法人化以降、社会との連携や国際化の推進が強く叫ばれるようになっている。以下の点を伺いたい。 1) 社会連携に取り組む教員への配慮(時間、予算)と評価の体制 2) 国際交流の諸活動の中で、本学が力を入れて取り組んでいる活動	貴校の強みを生かした地域社会への交流イベント、海外交流等積極的に進めているように思うが、今後もさらに多面的な双方向交流へ向けて取り組みを進化させて頂くことを期待する。	技術立国日本の将来を考える上で、小学生の段階からものづくり等への興味が持てる環境作り、場づくりが大変有効であると考える。	国際交流の取り組みは、グローバル化進展するなか、重要である。	霧島市の地方創生総合戦略の作成に当たっては、鹿児島高専より有識者委員として参画いただき、産学官連携の分野では貴重なアドバイスをいただいた。	総合戦略においては、学生等の地元就職率の向上による若者の転出抑制を掲げていることから、企業説 明会やインターンシップの推進を引き続きお願いしたい。	全学生、数員が何らかの形で社会とつながり、国際交流を通して視野を拡げられるような仕組みができているように望む。	海外 <i>インターンシップの</i> 実績が少ない点が気になる。その理由を明確にしながら改善が必要ではないかと 思う。	
項目	点	い部別を	に	に	に	に高見事	改善を要する 点	改善を要する 点	
通番しま	14	42	43	44	45	46	47	48]

平成27年度自己点検・評価報告書に対する事前質問等と回答

	ΨĒ	
 優れた点 社会へ向けた各種講座、海外交流等への機会の提供が確立している。 	内向き志向の高校生が多い鹿児島県において、積極的な海外交流、海外研修が行われていることは、高く評価出来ると思う。	51 優れた点 COC+をはじめ、他校に先駆け、積極的に取り組んでいる点を高く評価する。
優れた点 社	優れた点へ	優れた点 C
49	20	51

評価項目 4 管理運営に関する事項

_				
回答	る。ここでは、特に下記の点を伺いた。各種研修会や講習会等に積極的に参加させるとともに、他高専や大学との人事交流を積極的に推進することで、組織、の活性化や人材育成に役立っている。なお、不足する分野については、専門分野の外部講師等を招聘し、充足を図っている。ある人材として社会へ送り出す。 ついる。 ている。 なお、不足する分野については、専門分野の外部講師等を招聘し、充足を図っている。 なお、不足する分野については、専門分野の外部講師等を招聘し、充足を図っている。 なお、不足する分野については、専門分野の外部講師等を招聘し、充足を図っている。 ないる。 ついる。 なお、不足する分野については、専門分野の外部講師等を招聘し、死足を図って、相談のは、しいる。 こいないのは、校長のおき、学生主事、等務主事、学生主事、等務主の様にこれを目指すか、校長のおき、可以科長)の副校長を配置し、組織全体を見直すとともに、業務内容の見直しを図り、教育・研究に専念する時間の確保に努めている。	応等には常に緊張感をもって、現状 教職員に対して、常時コンプライアンス遵守についての周知を行っている。全教職員に対し、年に1回のセルフチェック を実施しており、ほぼ100%の回答を得ている。	FD、SD、教職員研修会、情報セキュリティ、コンプライアンスセルフチェック等を行っている。	平成27年度より、各研究者の研究倫理教育について、CITI Japan プロジェクトの教育プログラム(eラーニング)を活用し、全ての研究者(教員・技術職員)が受講し、結果を校長が把握することとしている。また、校長を委員長として「鹿児島高専生命倫理委員会」を立ち上げ、研究実施における倫理的問題点について審査するシステムを構築した。
事門コメント	厳しい予算のもと、管理運営のご苦労には大きいものがあると推察する。ここでは、特に下記の点を伺いたい。 しょう 人件費の制約が厳しい状況の下、教員や事務系職員の充実状況、および不足分野への対応策2)国からの予算措置に限界があるもとで学生に責任ある教育を施し、有為の人材として社会へ送り出すには、教職員の「ひとを育てる」強固な意志と情熱が求められよう。どの様にこれを目指すか、校長のお考えを伺いたい。	コンプライアンスの遵守ならびに情報セキュリティ対策、リスク管理・対応等には常に緊張感をもって、現状に満足することなく、継続・強化・進化していく必要がある。	教員の不祥事が発生すると、一気に学校への信頼が失われることになる。管理職と教員のどちらもが、常 にコンプライアンス意識を向上させる機会を持つことが必要と思う。そのために、定期的な研修等の実施が「FD、SD、教職員研修会、情報セキュリティ、コンプライアンスセルフチェック等を行っている。 求められる。	研究者倫理などの重要度がますます高まっている。コンプライアンス・マニュアルがきちんと作られており、その徹底は重要である。
項目	ご商用等	ご意見等	ご意見等	言語
通権	52	53	54	55

Ħ	ŀ
Ĭ	ķ
ā	Q
٦.	1
į	ij
è	5
Ň	٠

事前コメント	鹿児島県にある工業高等専門学校として、様々な形での地域への貢献が期待されている。「研究に関する 事項」でも書いたが、鹿児島県の基幹産業は農業であり、農業分野の活性化なくしては、地域創生の実現 はほど遠いように思う。 この意味からも、今後、本校の農畜水産業分野への技術展開を大いに期待したい。	目標を達成するために実施することが計画に盛られ、計画通りの実施がなされたことで「達成した」という評 自己点検・評価報告書の自己評価の項目では、「S:目標以上に達成している。 A:達成している。 A:機わ達成して 価になっている。これとは別に、目標(募集定員を2倍以上にするなど)がどれだけ達成できたかを評価す いる。 B:一部達成している。 C:達成していない。」の5段階の評価を行っている。目標をどれだけ達成できたかを評 ることも必要と考える。	大学・大学院卒、工業高卒でそれぞれ技術者が輩出されるが、世の中から求められている高専卒技術者 中生は、大学と同程度を目指してきたが、大学が大学院生を多く輩出するようになってきて、高専もそれに応じた高度 とは何で、そのためにどのような教育が必要なのか、根本的なところの検討も重要な気がした。 化を進める必要がある。このような根本的検討が、まさに国立高専全体で始められているところである。
項目	鹿児島県にま 事項」でも書 はほど遠いり この意味から	日標を達成す ご意見等 価になってい ることも必要	大学・大学院 ご意見等 とは何で,そ
乗る。	56	57	28

第2部

平成27年度 外部評価報告書

平成27年度外部評価委員会 鹿児島工業高等専門学校 大会議室にて 平成27年12月10日に開催





丁子校長 挨拶



須田副校長(教務主事)から 学校概要・特色のプレゼンテーション



学内視察の様子 機械実習工場案内



大竹副校長(総務・企画担当)から グローバル・アクティブ・ラーニング センターの構想説明



図書館の視察



電子制御工学科棟 ロボット工学実験室の見学



ロボットの実演



都市環境デザイン工学科棟 都市環境デザイン演習室での実習風景

1. 平成27年度外部評価委員会委員名簿

役 職 名	氏 名
第1号委員 九州工業大学監事 大分大学顧問·名誉教授(前大分大学学長)	羽 野 忠
第1号委員 鹿児島大学理事(特命担当) 消費生活アドバイザー	石 窪 奈穂美
第2号委員 鹿児島県教育委員会 教育委員 株式会社島津興業 取締役 相談役	島津公保
第3号委員 鹿児島県工業技術センター所長	中村俊一*
第4号委員 (株) 九州タブチ 代表取締役社長 錦江湾テクノパーククラブ会長	鶴ヶ野・未・央
第5号委員 株式会社南日本新聞社 霧島総局長	中 島 裕二郎
第6号委員 霧島市長	前 田 終 止*
第6号委員 IHI プラント建設(株) 代表取締役社長 鹿児島高専客員教授	小 林 望
第6号委員 株式会社相良製作所 代表取締役社長 鹿児島高専同窓会長	相良正典

[※]第3号委員の中村俊一委員、第6号委員の前田終止委員については、外部評価委員会当日は欠席でしたが、事前に自己点検・評価報告書についてご意見等をいただき、14ページ以降の「事前質問等と回答」に含めました。

2. 平成27年度外部評価委員会出席者名簿 (鹿児島高専)

役職名	備考	氏 名
校長		丁子 哲治
副校長	総務・企画担当	大竹 孝明
副校長	国際交流・地域連携担当	植村眞一郎
副校長	教務主事	須田 隆夫
副校長	学生主事	塚崎 香織
副校長	寮務主事	野澤 宏大
副校長	専攻科長 ※山内正仁専攻科長代理で専攻長出席	吉満 真一
機械工学科長		塚本 公秀
電気電子工学科長	※中村格学科長代理で学科教授出席	井手 輝二
電子制御工学科長		室屋 光宏
情報工学科長		幸田 晃
都市環境デザイン工学科長		池田 正利
一般教育科文系科長		松田 信彦
一般教育科理系科長		拜田 稔
事務部長		大島 英夫
総務課長		南部 元義
学生課長		永松 巖
技術長		山下 俊一

3. 平成27年度鹿児島工業高等専門学校外部評価実施要領

1. 趣旨

鹿児島工業高等専門学校の自己点検・評価について、外部の有識者により本校の教育・研究 活動等の評価、助言を受ける。

2. 評価方法

外部評価は、鹿児島工業高等専門学校の自己点検・評価報告書等に基づき、教育・研究活動 等について行う。

委員会終了後、各委員に外部評価結果について、報告書の提出を依頼する。

3. 外部評価委員

- (1) 羽野 忠 大分大学顧問 前大分大学学長
- (2) 石窪奈穂美 鹿児島大学理事(特命担当) 消費生活アドバイザー
- (3) 島津 公保 鹿児島県教育委員会 教育委員 株式会社島津興業 取締役 相談役
- (4) 中村 俊一 鹿児島県工業技術センター所長
- (5) 鶴ヶ野未央 錦江湾テクノパーククラブ会長 (株)九州タブチ 代表取締役社長
- (6) 中島裕二郎 株式会社南日本新聞社 霧島総局長
- (7) 前田 終止 霧島市長
- (8) 小林 望 IHI プラント建設(株) 代表取締役社長 鹿児島高専客員教授
- (9) 相良 正典 株式会社相良製作所 代表取締役社長

4. 外部評価日時

平成27年12月10日 (木) 13:15~17:00 鹿児島工業高等専門学校 大会議室(管理棟2階)

5. 事前配付資料

- (1) 平成27年度自己点検·評価報告書(平成25年度~平成26年度)
- (2) 平成27年度 学校要覧

6. 日程

(1) 開会

(6) 施設見学

(2) 校長挨拶

(7) 質疑応答

(3) 委員及び本校出席者の紹介

(8) 外部評価委員打合せ

(4) 委員長選出

(9) 講評及び閉会

(5) 学校概要・特色及び平成25年度 自己点検・評価報告書の説明

4. 平成27年度外部評価委員会日程表

1. 日 時 平成27年12月10日 (木)

 $13:15\sim17:00$

2. 場 所 鹿児島工業高等専門学校 大会議室

管理棟2階

- 3. 会次第
 - (1) $13:15\sim14:50$
 - ① 開 会
 - ② 校長挨拶 (5分)
 - ③ 委員及び本校出席者の紹介
 - ④ 委員長選出
 - ⑤ 学校概要・特色及び平成27年度 自己点検・評価報告書の説明(30分) 学校概要・特色

:副校長(教務主事)(25分:パワーポイント等)

平成27年度 自己点検・評価報告書の説明

: 副校長(総務・企画担当)(5分)

⑥ 施設見学(45分)

【14:50~15:00 休憩】

- (2) $15:00\sim17:00$
 - ⑦ 質疑応答 (70分)
 - ⑧ 外部評価委員打合せ(40分)
 - ⑨ 講評及び閉会(10分)

5. 鹿児島工業高等専門学校外部評価委員会規則

(設置)

第1条 鹿児島工業高等専門学校(以下「本校」という。)に外部評価委員会(以下「委員会」 という。)を置く。

(目的)

第2条 委員会は、本校が行った自己点検・評価結果等について検証を行い、本校の教育・研究 等の改善に資することを目的とする。

(組織)

- 第3条 委員会は、人格識見が高く、かつ、本校の発展に理解ある次の各号に掲げる学外者の中から、校長が委嘱した若干名の委員をもって組織する。
 - (1) 大学、高等専門学校等の高等教育機関の教員及び経験者等
 - (2) 本校の所在する地域の教育関係者
 - (3) 地方自治体等研究機関の研究者等
 - (4) 産業界の有識者
 - (5) 報道機関の有識者
 - (6) その他校長が必要と認める者

(委員の委嘱)

第4条 委員の委嘱は、外部評価委員会の開催に合わせて、必要な期間行うものとする。

(委員長)

- 第5条 委員会に委員長を置き、委員の互選により選出する。
- 2 委員長は委員会を召集し、その議長となる。

(報告書と公開)

第6条 外部評価を行ったときは、報告書を作成し、公開するものとする。

(運営)

第7条 委員会の運営については自己点検・評価委員会が行う。

附則

- 1 この規則は、平成16年5月21日から施行する。
- 2 この規則施行後、最初に第3条に規定する委員となる者の任期は、第5条の規定にかかわらず、平成18年3月31日までとする。
- 3 鹿児島工業高等専門学校と有識者との懇談会要項は、廃止する。

附則

この規則は、平成22年4月1日から施行する。

6. 外部評価委員会議事録(一部要約)

~開会 校長挨拶~

【丁子校長】

校長の丁子でございます。どうぞよろしくお願いいたします。外部評価委員をお引き受けいただきありがとうございます。まずは御礼申し上げたいと思います。なおかつ、本日ご多忙中のところ、鹿児島高専の外部評価委員会にご出席いただきありがとうございます。

今回の外部評価委員会は、今までの本校の 外部評価委員会と若干少し変えさせていただいております。過去には3年に1度の外部評価委員会ということで、随分間隔を開けて評価をいただいていたのですけれども、昨今、非常に変化が激しく、高専の特に鹿児島高専における色々な教育、研究等、学生指導の変化がめまぐるしく動いております。そういうことで、できるだけ毎年評価をいただいて、それに応じてまた改良していきたいと、そういう思いでございます。ただ今回は過去にさかのぼって2年間と少し長くなりますけれども、そういうかたちでやらせていただきたいと、特に地域でご活躍の方々を中心にお願いをしているものでございます。

事前に膨大な資料も見ていただきながら、ご意見コメント等を事前にお送りいただきました。本日色々とまたご指摘等ご意見いただきたいと思います。ただ、なにぶんにも時間的な制約がございますので、これはというものでご意見をいただければ幸いに存じます。ただ、本日どうしてもご都合がつかずにご出席にならなかった委員様もございますけれども、事前に色々な意見をいただきまして、それもあわせて本日の委員会にさせていただきたいと思っております。また、本校に詳しい

方も委員にいらっしゃいますけれども、初めてという方もいらっしゃると思いますので学内の視察もしていただく予定もしております。それも見ていただいたことも含めてご意見ということでお願いをしたいと思います。

少しお時間をいただいて、今までの本校の 色々な概略もお話ししたいと思います。外部 評価というものは、この外部評価委員会ばか りではなくて、国立高専ということで色々な 評価を、なかには評価疲れという言い方をさ れておりますけれども、受けております。10 年ほど前、平成16年度より本来独立した国立 高専であったものが、法人化になったという ことで、国立高専機構というものの傘下に 入ってございます。そういうことで国立高専 は税金を使わせていただいており、育成もし ているという機関である限り、色々な外部機 関による評価を受けてございます。まず、一 番高専として核となる外部評価で機関別認証 評価というものがございまして、これに対応 しなければならず、このために国は大学評 価・学位授与機構という独立行政法人を作り まして、そこが担当されまして、7年に1回 程度の頻度で受審をしております。本校の場 合は、平成18年度に第1回を受審し、第2回 は平成24年に受審しております。

それから、もう一つは、最近のこととしまして、専攻科の学位の授与に関して、できるだけ学生の学位が円滑に取得できるようにということで、国立高専機構を通じて、学位を出していただいております、大学評価・学位授与機構というところに色々折衝をしまして、その方策として特例認定専攻科という制度に変わりました。その特例認定専攻科に合格しますと、学生は2年間の特別研究に基づいた試験を受けなくてもいいと、高専が十分学位に相当すると認定をしたら学位授与機構

から学位が出ると、そういう制度に変わりました。ただ、その場合には、今までは学生が学位に相当するかどうかの試験を受けて、学生がその認定を受けていたわけですけれども、この制度になりますと、指導する側、学校の教員側が指導するにふさわしいかどうかの資格審査を受けなければならない。ということで幸いに本校なんとか合格しまして、昨年度認定をいただいたところです。

それから、もう一つ、技術士に関連する資格で、日本技術者教育認定機構、JABEEと言っておりますけど、このプログラムも認定を受けてございます。これは6年に1回の審査でございますけど、直近では平成26年度に受審をして、これも合格してございます。JABEEのほうは、やはり国際的に学士を出す機関として、基準に達しているかどうかという趣旨で審査をされております。このJABEEについては本校随分前に認定を受けてございます。これは世界レベルの学部と同等であるということの証明のために、このJABEEを全高専が受けていますけれども、そういう努力もして認定を受けています。

それから文部科学省の独立行政法人評価委 員会が毎年行う評価も高専機構として受けて おりまして、その中で高専機構が作成する中 期目標、中期計画、それから年度ごとの計画 というものにも対応しながら各高専でそれに 応じた年度計画を作成してそれに対する実績 を毎年提出するということもやってございま す。そういったことで高専機構の大きな方針 がございまして、それに基づいて各校が地域 性も含めたかたちで年度計画を立てていると いうかたちになってございます。

このように色々な評価を受けているわけで ございますけれども、やはり地域に根差した 高専としては、地域の方々にもしっかりと評 価を受けることが重要であるということで、 皆様方にお願いしてございますこの外部評価 委員会があると理解しておりますので、どう ぞよろしくお願いいたします。

先ほども申し上げましたけれども、できますればこの外部評価委員会を毎年開催させていただきたい。その代わり、年度ごとの評価になりますので、これほど膨大な資料も次回からは削減されると思いますので、よりピンポイントのところでご指摘やご批判をいただきながらやっていけるものと思います。今回は少し負担が大きかったと思いますけれども、本校をより良くするためのご意見をいただければ非常にありがたく思いますので、今日はどうぞよろしくお願いいたします。

~自己点検・評価報告書の説明~

【大竹副校長(総務・企画担当)】

平成27年度自己点検・評価報告書につきましては、総務・企画担当副校長でございます私、 大竹のほうからご説明させていただきます。

委員の皆様に事前にお送りしておりました 紙のフラットファイルですけれども、この中 の外部評価委員会資料の資料1でございます。 これにつきましては、独立行政法人国立高等 専門学校機構いわゆる高専機構が、中期目標 を達成するために定めました高専機構の年度 計画に対応する本校の計画と実績に対して自 己点検業務を行ったものでございます。な お、高専機構の中期目標につきましては、4 つございまして、まず1番目に中期目標の期 間、2番目に国民に対して提供するサービス とその他の業務の質の向上に関する事項、3 番目といたしまして、業務運営の効率化に関 する事項、最後の4番目が財務内容の改善に 関する事項でございます。この高専機構の中 期目標を達成するために中期計画を作成しま して、さらに中期計画を達成するために各高 専は年度計画を作成して高専機構に提出して おります。また、年度計画に対する報告も同 様に高専機構に提出しております。

今回皆様にお配りしました自己点検・評価 報告書は、このような背景のもとに高専機構 に提出しました年度計画の実績報告のうち、 平成25年度から平成26年度までの教育研究に 関する部分に焦点をあてまして、中期目標の 2-2にございました「国民に対して提供する サービスその他の業務の質の向上に関する目 標を達成するために取るべき措置」、これを まとめたものでございます。自己点検・評価 報告書の内容につきましては、1番目に「教 育に関する事項」、その中で(1)入学者の確 保、(2) 教養課程の編成、(3) 優れた教員の 確保、(4) 教育の質の向上および改善のた めのシステム、(5) 学生支援、生活支援等、 (6) 教育環境の整備・活用、それから2番目 「研究に関する事項」、3番目「社会との連 携、国際交流等に関する事項、最後の4番目 に「管理運営に関する事項」となってござい ます。この自己点検・評価報告書は、左のほ うから順に、まず高専機構の年度計画、それ に対応または関係する鹿児島高専の計画と実 践、それから自己評価となっております。こ れらを平成25年度から平成26年度までまとめ たものでございます。

今回初めての取り組みといたしまして、自己評価の根拠となる資料という欄を設けまして、参考資料といたしまして根拠資料を当初準備いたしておりましたが、どこまで資料を準備するのか、また量も非常に膨大になり、少なめに準備いたしましても皆様のお手元にございます通り非常に分厚いものとなってしまいました。このことから、委員の皆様には、項目を割り振って資料を添付しましたけれども、実際にご確認いただきたいのは、自己点検・評価報告書でございます。やはり、資料

につきましては今回のように当日の会場で必要に応じ資料などをご確認いただき、委員の皆様にはよりシンプルな報告書を送付して評価いただくかたちのほうが、今後スムーズに開催できるのではないかと考えております。次回からは毎年の開催を予定しておりますので、今後はこのようなかたちで開催させていただきたいと考えている次第でございます。自己点検・評価報告書につきましては以上でございます。何とぞよろしくお願いいたします。

~学校概要・特色の説明~

【須田副校長(教務主事)】

※次ページ以降のプレゼン資料を参照

~施設見学~

<主な見学施設>

- ・機械実習工場
- 図書館

(グローバル・アクティブ・ラーニング センターの構想説明)

- ・電子制御工学科棟1階 ロボット工学実験室
- ・都市環境デザイン工学科棟3階 都市環境デザイン演習室 その他





鹿児島高専の教育目標

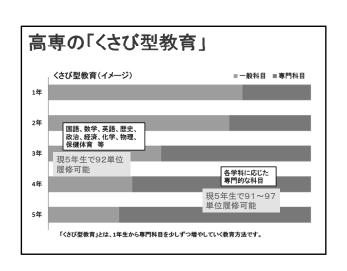
養成すべき人材像として以下の学習・教育到達目標を掲げています。

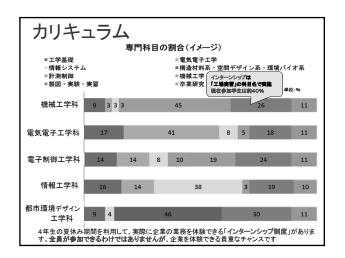
- 1. 人類の未来と自然との共存をデザインする 技術者
- 2. グローバルに活躍する技術者
- 3. 創造力豊かな開発型技術者
- 4. 相手の立場に立ってものを考える技術者

入学者の受け入れ方針(アドミッションポリシー)

本校の学習・教育目標に共感し、この目標達成にふさわしい素質と能力のある人を受け入れます。 特に次のような人を求めています。

- ① 論理的な思考ができる人
- ② もの作りが好きな人
- ③ プレゼンテーション能力のある人
- ④ 21世紀の世界を支える技術者として、 大いに活躍したいという夢のある人





学科の特徴

機械工学科

Department of Mechanical Engineering

電気電子工学科

Department of Electrical and Electronic Engineering

電子制御工学科 Department of Electronic and Control Engineering

情報工学科 Department of Information

Engineering

Design and Engineering

「ものをつくる」ための機械工学の基本と幅広い専門知識を学び、様々な産業分野で活躍できる広い視野と実力を 備えた創造性ある実践的なエンジニア。

半導体デバイス、ネットワークと情報通信、環境・エネル ギーなど電気・電子テクノロジー分野が急速に進歩し続け ている中で革新的なモノを作り出せる研究開発型エンジ

雷気雷子工学・機械工学・情報工学・制御工学の中で 電子制御技術に必要な知識や技術を身につけ、1つの 分野の知識だけでは解決できないような問題に対しても 対応できるオールラウンドなエンジニア。

コンピュータなどのハードウェアとソフトウェアをマスター し、コンピュータが組込まれたシステムを作ったり改善し、 、様々な「使いやすさ」、「便利さ」、「夢」を、プログラミン グを中心に実現していくシステムエンジニア。

都市環境デザイン工学科 自然環境に調和し、人間と他の生物にとってやさしい生 Department of Urban Environmental 活空間を造り上げるための幅広い視野と基礎知識を修 Design and Engineering 得するとともに、豊かな人間性を備えたエンジニア。

	入試統計 平成27年4月現在						
	学 科 名		志願 者数				
本	機械工学科	40	73(1)	1. 8	40(0)	387.5	
	電気電子工学科	40	47(4)	1. 2	42(4)	372.8	
	電子制御工学科	40	62(3)	1. 6	40(1)	411.3	
	情報工学科	40	42(10)	1. 1	42(11)	385.2	
科	都市環境デザイン工学科	40	72(10)	1. 8	42(7)	379.7	
	合 計	200	296(28)	1. 5	206(23)	387.3	
※志願者数は、第一志望の人数(推薦入試の志願者も含む) ※()は女子で内数 ※入学者平均点は、600点満点での点数(数学は200点満点で計算)							

本科卒業後の進路(H26年度) 卒業生数 190名 就職者数 134 名 (70.5 %)

進学者数 52 名 (27.4%)

求人倍率: 16.4倍

※ 進学者数は、短大・専門学校 への進学者は除く 全国平均 は約40% 主な進学先:

鹿児島高専専攻科 転じた 関ウエー 2013 国立大学工学部(3年次編入)

その他 4名(2.1%)

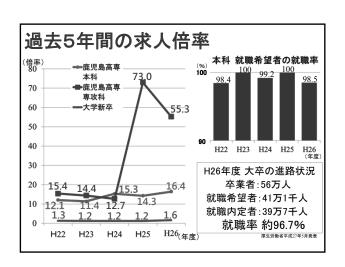
大学·高専専攻科進学先(H26年度)	進学数
鹿児島高専(専攻科)	28
九州工業大学	7
豊橋技術科学大学	4
鹿児島大学	3
熊本大学	3
佐賀大学	2
熊本高専(専攻科)	1
長岡技術科学大学	1
千葉大学	1
東京農工大学	1
京都工芸繊維大学	1
※国立大学への編入学が多い!	!

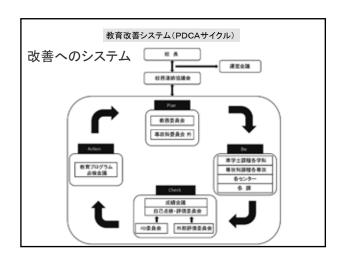
※編入学なので入学のチャンスは多い!

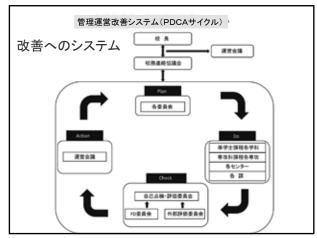
サグイラ 1 及びた品(一次20十及)					
修了生数	20 名				
就職者数 16 名(80%)	進学者数 4 名(20	%)			
求人倍率∶55.3 倍	主な進学先:国立大学大学院				
就職先(H26年度)	大学院進学先(平成26年度)	進学 者数			
富士電機(株)/DMG森精機(株)/ (株)ノリタケカンパニーリミテド/	大阪大学大学院	1			
セイコーエプソン(株)/安田工業(株)/	奈良先端科学技術大学院大学	1			
千代田工商(株)/アロン電機(株)/	九州大学大学院	1			
(株)日立製作所/飛鳥電気(株) / (株)富士通エフサス/パナソニック(株)	熊本大学大学院	1			
AVCネットワークス社/					
安川シーメンス オートメーション・ドライブ(株)/日特建設(株)/セントラルコンサルタント(株)/福岡都市技術(株)/	※トップクラスの国立大学(旧帝国 への入学が多い!	大学)			

日本上下水道設計(株)等

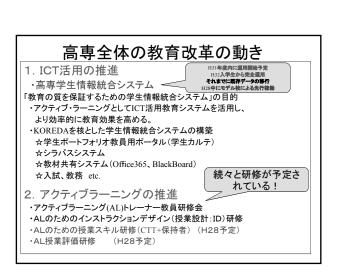
直攻科修了後の准路(平成26年度)

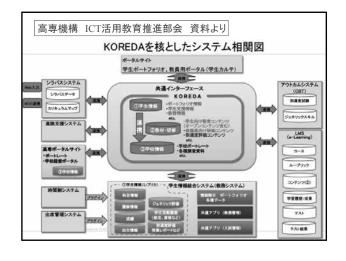






高専機構全体の方向性について 教育を取り巻く環境変化 ①教育の質保証と質向上へ ②教育方法の転換 ・学生が主体的に問題を発見し解を見いだしていく能動的学修プクティブ・ラーニングへの転換 (平成24年8月28日中央教育審議会答申) ・初等中等教育における教育課程の基準等 (学習指導要領)に「アクティブラーニングを導入 (平成26年11月20日文部科学大臣から中央教育審議会への諮問) ③ICT活用教育へ(ディジタルネイティブの入学) ④高等教育の質を巡る世界の流れ(方法から評価へ)







課外活動 本校には、27の体育系クラブと同好会、 22の文化系クラブと同好会があります。

体育系 文化系 硬式野球、バスケットボール、 写真、吹奏楽、文芸、英語、 女子バスケットボール、バレーボール、 美術、軽音楽、エコラン、 ク 映画研究、メカトロニクス研究、 ラ origin、電子・情報・システム、 ブ 将棋・囲其 理論を制作 女子バレーボール、剣道、空手道、 柔道、卓球、陸上、 少林寺流空手道、 弓道、サッカー、水泳、 ワンダーフォーゲル、ソフトテニス、 将棋·囲碁、環境創造物理研究 テニス、バドミントン、合気道、 ハンドボール、極真空手、自転車競技 ピアノ、天文気象、イラスト・CG、 同 航空技術研究、演技、建築、 好 電験、数学、無線技術研究 トレーニング、ゴルフ、フットサル、ダンス、ストリートバスケットボール

※約8割の学生が課外活動に参加しています。

※3年生までは高校総体に、4、5年生はインカレに出場できる競技もあるほか、大 学生の中に高専生として参加している大会もあります。

高専ロボコン2014 (全国大会)

(アイデア対決ロボットコンテスト)

2014年の競技課題は、「出前迅速」。出前ロボットが、お盆に 高く積み上げられた蕎麦(そば)の蒸籠(せいろ)を、3つの障 害物(スラローム・角材・傾斜)を乗り越えて運ぶ競技でした。

2014年度 大会成績

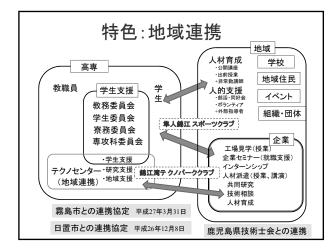
鹿児島高専Aチーム:隼(はやぶさ) 九州沖縄地区大会…技術賞 全国大会…出場

過去大会実績



(2014年 九州大会の様子)

年度	九州沖縄地区大会	全国大会
2013	特別賞(Bチーム)	出場(Bチーム)
2012	技術賞・特別賞 (Bチーム)	出場(Bチーム)
2011	優勝(Aチーム)、準優勝(Bチーム)	ベスト8 (Aチーム)



錦江湾テクノパーククラブ(通称KTC)

国分・隼人テクノポリスを中心とする南九州地域の有 志企業が、地域との連携強化を理念の一つに掲げ ている本校と相図って、産学官交流組織「錦江湾テ クノパーククラブ」を平成10年3月に設立。

会員企業:55社(平成27年12月1日現在)

特別会員:16公的機関

(鹿児島県商工労働水産部、鹿児島県工業技術セン ター、かごしま産業支援センター、鹿児島市、霧島市等)

錦江湾テクノパーククラブ(KTC)

第1回錦江湾テクノパーククラブ 役員会、総会 平成27年5月22日(金)

特別講演

演題 「人口減少と地方創生」

講師福留一郎氏(株式会社庭児島経済研究所経済調査部長)

パネルディスカッション 「県内企業の技術者ニーズと雇用」 パネリスト

福留 一郎 氏 (株式会社鹿児島経済研究所経済調査部長) 鶴ヶ野 未央 氏(錦江湾テクノパーククラブ会長、

株式会社九州タブチ代表取締役計長) 鳥越 孝一 氏 (飛鳥電気株式会社代表取締役)

池田 洋一 氏 (霧島市役所 南工観光部長)

コーディネータ

楠原 良人 氏 (鹿児島高専電気電子工学科教授 地域共同テクノセンター副センター長)







錦江湾テクノパーククラブ(KTC)

第2回錦江湾テクノパーククラブ 例会(地方創生シンポジウム) 平成27年8月31日(月)

講演「鹿児島における地方創生を考える」 講師 小里 泰弘 氏(衆議院議員 環境副大臣兼内閣府副大臣)

パネルディスカッション

魅力ある「まち・ひと・しごと地方創生」を考える

~新卒者の雇用創出に向けて、自治体・企業・高専の立場から パネリスト 前田 終止 氏(編集市長)

宮路 高光 氏(日置市長)

鶴ヶ野 未央 氏(施工第テクパーククラブ会長、 株式会社九州タブテ代表取締役社長) 宮村 憲一 氏(株式会社IGE代表取締役社長、 総工第テクパーククラブ展問)

丁子 哲治 氏(鹿児島高亨 枝長)

コーディネーター 楠原 良人 氏(鹿児島高寧 電気電子工学科教授 地域共同テクノセンター副センター風)



第3回錦江湾テクノパーククラブ 平成27年2月26日(金)予定 ラボツアー(鹿児島県工業技術センターにて)

※昨年度のラボツアー 平成27年2月27日(金)

研究シーズ紹介



|環境磁気雑音の特性把握と低減技術に関する研究。| 電子制御工学科 鎌田 清孝 准教授

『演奏ロボットの開発』

情報工学科 幸田 晃 教授

『海洋環境下における流下土砂を用いたコンクリートのアルカリシリカ反応性』 都市環境デザイン工学科 池田 正利 教授

研究室·実験施設紹介



機械実習棟 プロセス実験室 電子制御工学科 鎌田 清孝 准教授 情報工学科棟1F ロボット実験室 情報工学科 幸田 晃 教授

都市環境デザイン工学科棟1F 材料実験室 都市環境デザイン工学科 池田 正利 教授

実習工場 NC加工室 技術室 原田 正和 技術専門職員

隼人錦江スポーツクラブ

- ・平成15年4月、鹿児島高専と旧隼人町(現霧島市)が提携して設立した総合型地域スポーツクラブである。
- ・平成18年1月、地域住民(会員)が主体となったクラブ運営を目指し、NPO(特定非営利活動)法人化。
- ・霧島市公共体育施設の指定管理者として、隼人体育館・武道場・弓道場・温水プール等7施設の管理・ 運営を実施中。
- ・平成19・20年、鹿児島高専と「学生支援GP」を共催、指導者データバンク(約260名登録)の構築等。
- ・鹿児島高専体育施設を活動拠点の一つとして、現在13講座に約850人の会員が活動中。

特色: 九州沖縄地区高専の国際交流連携事 <高専・アジア・企業連携による実践的・創造的技術者の養成>

- 実践的・創造的技術者の育成
- グローバル技術者の育成

2)概要

- 鹿児島高専を主幹校として九州・沖縄地区の9高専が連携し、海外・国内でのインターンシップ、海外研修、専攻科の単位互換等を推進する。
- 1高専の学生数は本科が800人~1,500人、専攻科が40~150名程度であるが、 連携によるスケールメリットを発揮する。
- インターンシップでは、約900の会員企業を有する 九州経済連合会(ステークホルダ)と連携する。
- 国際交流、海外研修では、アジア諸国の高等教育機関と9高専の交流実績、 及び高専機構が締結してきたMOUを活用し、アジア諸国との関係を強化する。
- 専攻科の教育プログラムを見直し、単位互換、長期インターンシップ、長期海外研修を行いやすくすると共に、専攻科への秋入学の導入により、海外からの研修生、留学生の受け入れを推進する。

この間の取り組み概要

9高専連携事業

1)海外学生との交流

(3)派遣118名(タイ・マレーシア・シンガボール・台湾・モンゴル・インドネシア・中国厦門・ベトナム)
②受人(ア) タイ・3大学73名(内本校)名・6月~7月) (イ) ニーアン・ポリテク18名 (ウ) マレーシアUTP10名
③ハノイ大学における学生研究発表会 (学生30名、教員10名: 平成27年12月10日(木)~11日)

2)海外大学での1ヶ月インターンシップ

タイ・カセサート大学 5名(内本校1名:平成27年8月中旬~4週間)

3)海外企業でのインターンシップ

19名 (タイ・台湾・フィリピン・ベトナム・マレーシア・シンガポール)

4)企業人のグローバル化に関する講演

平成27年12月16日(水) 15:00~16:30 TOTO グローバル戦略室 田村信也室長

5)英語カアップのための講座

この間の取り組み概要

本校の国際交流活動

1)海外研修旅行

欧米・アジアへの異文化理解・語学研修旅行 44名の学生参加 ①フランス(12名・9日間) ②スウェーデン(3名・9日間) ③ハワイ(10名:17日間) ④タイ(ベトナム旅行を統合) (9名・6日間) ⑤台湾(8名:5日間)

- 2)スウェーデンNTI高校から校長以下3名の教員が本校視察 平成27年10月27日(火)~29日(木)
- 3)フランス・モンペリエIUT,トゥールーズIUTとのMOU締結 ①フランス・モンペリエIUTから1名希望 ②トゥールーズIUTから1・2名ほど希望
- 4)高専祭における海外研修旅行のポスター展示 ①海外研修旅行のポスター ②留学生のお国紹介ポスター

学生交流や工場見学

ニーアン・ポリテクにおける 学生交流





マキノアジア・シンガポール T場見学



三井ハイテック・シンガポール 工場見学

海外のインターンシップ







台湾(九電工)でのインターンシップ

フィリピン(千代田化工)での インターンシップ



鹿児島工業高等専門学校 創立50周年記念式典

- 鹿児島高専は、本年、創立52周年 (昭和38年4月創立)
- 平成25年11月1日に鹿児島高専の体育館を会場として、約1500名の来賓や在校生・教職員の臨席のもと記念式典を開催
- 記念式典後、「この50年、これからの50年」をテーマにデザインを募集し、最優秀賞に選ばれた都市環境デザイン工学科4年生のデザインをもとに同窓生と学生が協力して作成したモニュメントの除幕式





~質疑応答~

【羽野委員長】

それでは、意見交換に今から移りたいと思います。今までご説明いただきました事項につきまして、委員の皆様からご意見・ご質問をいただければと思っております。そのご意見・ご質問につきまして、鹿児島高専の皆様から回答や意見を伺いたいと思います。委員1人あたり4分程度でご質問いただき、高専側の回答を4分程度、計8分を目処に進行していきたいと思います。今からお伺いする順番ですが、私は、最後にまとめて質問させていただきたいと思います。順番といたしましては、外部評価委員会の規則第3条に記載されている委員順でお願いできればと思います。それでは、石窪委員からよろしくお願いいたします。

【石窪委員】

では、最初に発言させていただきます。今 回事前にいただきました資料を拝見させていただきまして、外部評価報告書に意見等は書かせていただきました。その中でほとんど意見・質問的なことも含めて書かせていただいたような気がしております。トップバッターでまだ話すことがまとまっておらず、要を得ていないと思いますが、本日、校内を見学させていただいた感想から話したいと思います。

前回も参加させていただいたのですが、その後また新しい機器が入ったり、施設ができたりしておりまして、特に最後に見学した都市環境デザイン工学科のデザイン演習室ですか、大変先進的で今日的学習要素である様々な機能を盛り込んだ素晴らしい施設だと感じました。これに関してはPRも含めて鹿児島高専の目玉として、外部から視察が訪れるような場所になるのではないかなと感じました。これから多様な機能をどう効果的に使っていくかが重要かと思いますが、楽しみにし

ています。あの場所だけではなく、高専の新 しい取り組みについて、一体的にPRしてい かれればと思います。

それに加えて、図書館の構想にも夢を感じ ました。予算化の課題があるようですが、学 生主体のグローバル・アクティブ・ラーニン グセンターとしての位置づけは、単なる図書 館の域を脱して、情報・連携等の場として期 待するところです。前回も感じたのですが、 今の図書館は、暗くて寂しいイメージです。 特に寮生にとって、図書館というのは、教 育・授業を受ける場と寮に行く間の、橋渡し の場所として私はとても重要な場所だと思っ ています。そこで学びを深めたり、コミュニ ケーションしてみんなと一息ついたり、自分 の専門以外のことに触れて、新しい発見がで きる場所かと思っています。できることから の早急な対策と新しい構想の進展との両方で 進めていってはどうかと思います。地域に開 かれた図書館とするのであれば、地域の方も 巻き込んだ新たな取り組みをしていかれるの も一つかと思います。

もうひとつ、女性の活躍、機会の提供等についてです。女性教職員の積極採用等取り組まれているとのことですが、現状や今後についてはどうなのでしょうか。課題等がありますか。女性の活躍には、環境の整備と意識改革がすごく重要だと思いますが、あるフォーラムにおいて、女性登用をどうしていくか、女性研究者をどう増やしてくかという議論の中で、女性の参加者から「女性の優遇ではなくて平等にしてほしい」という意見が出て、印象に残りました。このような女性の声を受けとめて、女性採用も進めていただければと思います。女性の活躍にはロールモデルが必要かと思います。以上で終わりたいと思います。

【丁子校長】

どうもありがとうございました。都市環境 デザイン工学科のデザイン演習室、確かに先 進的なデザイン・設計がされている。私もこちらに来て初めてあそこを見たときには感動すら覚えました。あれだけのものを持っている、他高専では多分ない、本校だけぐらいではないかなと、あとはその活用をどうするかは我々の課題だと思います。設備をいかに使ってくかというところ、どれだけ効果を上げていくかというところ、大事なところだと思っております。

それから図書館については、古い建物で、 対処もされておりませんので、暗いイメージ です。ただ、学校の中、正面から入ってかな り奥のほうであるので、地域に開放された図 書館といいながらも決してあれは開放されて いないです。ただ、場所的には、寮といわゆ る校舎の部分までちょうどつなぎ目でありま すので、創立当時に図書館を建てたときは恐 らく寮生が寮に帰る途中にしっかり勉強する 位置づけであったのだろうなと私は解釈して いるのですが、そういう意味でも今新しい設 計では、ますますそういう自学自習、アク ティブ・ラーニングというものが十分できる ような、しかも外部との色々な国際交流もで きたらネットでいつでも海外の大学の学生と かと交流もできるようなそういう設備も整え られていけばいいなという思いで、ああいう 設計を考えて要求しております。本年度要求 したのは残念ながら漏れましたが、多分最高 の評価でしたので、来年度は通るのではない かという思いでおります。

それから、女性の活用に関しては、確かにおっしゃるように、特段差をつけるわけでも平等に優秀な女性の教職員をどんどん増やしていく、それにつれて女子学生もどんどん増やしていく、今の社会ではとにかく女性目線で色々なものが必要だと、産業界、ものづくりの世界でも女性目線の設計というのが大切だと言われております。本校も増やしていきたいのですが、全高専の中では女子学生が一番少ない学校でして、これも地域性もあるの

かなという気もするのですけど、男子高が多い地域で、一方でも女子高も多いという中で、女子中学生の皆さんが高専という選択肢をどうすれば選択していただけるのかというのを学内でも色々議論をしているところでございますけれども、ぜひそういうようなこともまたアドバイスをいただければと思っております。女性のことですが、塚崎副校長に、何かご意見があればお願いします。

【塚崎副校長(学生主事)】

学生主事をしております塚崎と申します。 全国的にも女性で主事をしている人は少ない ということで、例えば九州の学生主事会議と いうのに出かけていきましても、女性は私一 人ですし、全国的にも少ないのではないかと いうことで、色々なところでお声をかけてい ただきますけれども、丁子校長は女性の教職 員が一生懸命力を発揮できるような環境を 作ってくださっていて、感謝しております。

今いる女子学生が元気になるような、何か そういうことができないかということや、また 中学生が今いる女子の学生を見て、あ、こう いう先輩がいるなら自分も高専に行って活躍 したい、と思ってくれるようなそういう学校 になれるようにということで今色々な取り組 みをしています。例えば、今年本校の3年生 の情報工学科の女子学生が、日本の女子の高 校生1年生から3年生までの中で8名選ばれ、 国務省から奨学金をもらってアメリカで約1 カ月程度勉強して来るというプロジェクトに、 本校の女子学生が選ばれまして、応募するの も学校として支援をするという、それは一例 ですけれども色々なかたちで女子の活躍する 場を作ろうということでやっております。

目の前が隼人中学校ですけれども、その女子学生は地域に戻って自分が勉強してきたことを中学生に対して講演をさせていただいて、中学校に帰って自分がアメリカで勉強してきたこと、女子の技術者を増やしたい等、

色々なことを語ってくれまして、その姿を見て中学生がその先輩みたいに自分も英語を頑張りたい、工学系に自分も進みたいという声をもらっております。今後女子が活躍できるようなそういう学校を目指していきたいと思っております。

【島津委員】

島津でございます。私、県の教育委員を 8、9年やっておりまして、いわゆる公立の 小中高の学校は何回も見ていますけれど、高 専を見させていただいたのは初めてというこ とで、だいぶ雰囲気違うなという気がいたし ました。とくに実習の教室やそこで学んでい る学生さんたちの真剣で楽しそうにやってい る姿が非常に印象に残りました。また、講義 を受けている子どもたちが寝ている姿は公立 の高校とあまり変わらないなという感じもし たところですけど、やはり子どもたちという のは実習が非常に前向きに取り組めるのかな というふうに思ったところであります。

質問等はできる限り書かせていただいたと ころもあるので、それともダブるのですけれ ども、いくつかお話しさせていただくと、一 つはこの鹿児島にある高専ということで、鹿 児島とのつながりということをぜひ考えてい ただきたいなというのがあります。それで、 事前の質問の中に書かせていただいたのは、 農業だとか、畜産だとか鹿児島の得意分野、 基幹産業といわれる農業、こういったものへ の還元というか教育体制で、いわゆる農業機 械だとかそういった分野、あるいは最近は情 報システムをかなり農業畜産等使っています ので、そういった分野での活用だとか、そう いうことでの地域との連携というのがもっと できたらいいのではないかなというのが一つ でございます。

それからもう一つは卒業生がやはり県外に 出ていってしまうということで、実は公立の 高校でも、就職する子どもたちのうちの4割 が県外に行くということで、鹿児島県の県外 就職率は全国一なのです。だから、そういう 意味で、地元の企業等にもっと頑張ってもら わないといけないところはありますけれど も、その辺の連携をすることによって、地元 での就職ができるようになるのではと期待し ております。そういった方向性というのは何 か考えられないのかなというところです。

それからあと、今、アクティブ・ラーニング、これも教育委員会でもアクティブ・ラーニングが今、本当にはやり言葉のように出てきます。実際に先生方がアクティブ・ラーニングということに対して、今までそういうかたちでやってない先生方が急にアクティブ・ラーニングということを言われてもなかなかそれに取り組めないというケースがあるのだと思います。その辺、高専としてどういうかたちで取り組まれているのかを改めてお聞きできればと思います。

それからもう一つは、今、大学等は国の予算がどんどん減らされています。それで高専の場合は、今、その実態がどうなっているのかを教えていただければ、ということが質問としてあります。

それから、学生さんが結構海外に積極的に 行っているような雰囲気というか、データを 見るとあるので、これはうらやましいなと 思っています。実は、県内の高校生を対象に アンケートを取ると、あまり外に行きたくない い、海外に行きたくないという、そういうアンケート結果が出ています。ですから、そういう では入学している学生さん、大なりいのかなという気もしますけど、よりうまく 誘導している部分がもしあればお聞きしてみたいと思ったところです。以上でございます、よろしくお願いします。

【丁子校長】

ありがとうございます。四つほどご指摘いただきましたけれども、すべて本校に重要な課題と受け止めております。鹿児島とのつながりでございますけれども、確かに高専50年前にこの地にできたときには、恐らく当時の高度経済成長の時代で多分関東・関西あたりの工業地帯に人材を送りだすというニーズも勿論あって、50年間それは本校真面目に取り組んできたと思います。

もう一つ、なぜこの隼人の地に高専ができ たかと考えますと、やはりこの辺に一つの産 業を起したいというのが、ここに誘致をされ た方々とかの思いがあったのではないかな と、そうすると、その思いについては全く達 成されていないのではないかなと思います。 そういうことで、今年度文部科学省の事業で COC+という政府の地方創生の事業にも合 致したことで、鹿児島大学が中心となって、 そのメンバーにも入れていただいたのですけ れども、その中で我々が取り組むとしたら農 業と工業をどう融合させるかということでは なかろうかと思います。実際にそういう観点 については昨年度から大分高専と都城高専の 3校で、農工連携ということで、学校の中に そういう学科とまで言いませんけれども、そ ういうことを主体とした学生を育成するカリ キュラムを作る、そういったことの準備をし ましょうということに取りかかったところで ございます。

ただ、具体的に何をしましょうかというところまで至っておりませんけれども、今委員のおっしゃったような農業機械あるいは農業にも色々と情報関係のそういう今のICTを使ったようなもの、今はやりの言葉で言うとIoTとか、そういったものを活用した技術開発というものが必要ではなかろうか、場合によっては衛星写真によって農地の色々な収穫量が測定できると聞いております。そういったことも勉強しながら、そういうことに興味

を持つ学生を1人でも育てていくことが地域のためになるのではないかなと思っております。できるだけ授業を通じても、県内にも色々な企業様がおられるはずですけれども、どうも学生自身がどういうところにどういう企業があるか知らず、学校としても周知していないところもありますので、そういった授業もやっていこうと、これはかなり力を入れてやっていこうとしております。

次に、予算減の問題はかなり深刻でござい ます。独立行政法人化してもう12年ほどたち ますけれども、毎年1パーセントの予算減で、 全体的にもう12パーセントの軽減になってい るわけです。それが人件費というのは、我々 はもう公務員ではなくなっていますけれど も、一応人勧に準じたことで、上がったり下 がったりで、昨年に引き続き少し上昇気味だ ということになると、いわゆる肝心の物件費 といいますか、それは12パーセント以上に削 減されていると、これは実は深刻でございま して、その打破のために色々と学校の中でも 工夫をしないといけない、それから機構本部 の中でも工夫をしています。これは少子化の 流れの中でやはり学生数を減らして色々規模 を少なくする必要もあるのではないかという 流れで議論は進められて、しかし、高専の場 合は学校独自で何事も決められなくて、すべ て国会を通さないといけないという面倒な手 続きが必要なので、それを国会にお願いして いるような段階です。

ただし、学校としてもそういう方向性というものはどうも避けられそうもないということで準備をしないといけないということです。そのためにも学生には関係ない話ですけれども、我々教職員の中ではそういう対応を今から取り組まないといけないところは取り組まないと、突然そんな話来た時には大変なことになるという認識でおります。まだ、具体的にこうだとかああだとかいうのは分からない段階ですけれども、予算減は大学予算も

恐らくかなり深刻だと聞いていますけれども、高専も同様でございます。それからアクティブ・ラーニングと海外の学生のモチベーションに関しては、アクティブ・ラーニングは須田副校長からお願いします。

【須田副校長(教務主事)】

それではアクティブ・ラーニングに関して ですが、おっしゃる通りに、文部科学省の教 育指導要領ではだいぶ前から言っていると。 小中学校は結構取り組んでいるようですけ ど、高校とかは谷間になっているとよく言わ れます。それで、例えば高校等でやられてい るアクティブ・ラーニングの典型的なかたち というのをいきなりみなさんにやってくださ いというのは難しいと思います。大体プレゼ ンの準備をして15分ぐらいでポイントをワン トピック話して、演習問題をつくってグルー プワークをやって、という大体典型的な流れ がそうです。これだとその準備に相当時間が かかりますし、いきなり転換はできないで す。ですからこの間私が色々なところで読み 聞きした中で皆さんにお願いしているのは、 一部アクティブ・ラーニングを取り入れる。

例えば典型的なのは、一方的に講義をするのではなくて、インタラクティブにやってください。質問をするというのもアクティブ・ラーニングの一つですということです。質問の仕方も、例えばイエス・ノーどちらかだと思う人はい手を挙げてのイエス・ノー、その次は質問をします。そして、例えば課題があったら質問して聞いて、それでは隣の人と話をしてみてというふうに段階的に学生が能動的にやるという手法が色々あります。その手法に関しては少し勉強してきて先生方に紹介しております。そして、そういうのを少しでも取り入れて授業改善をしてくださいと。

非常にお恥ずかしい話ですけれども先ほど 寝ている学生がと、まず学生が寝ないように

するということです。アクティブ・ラーニン グで一番良いのは学生が寝ないという話があ りますけど、そういうところをお願いしてい て、それを実践でできているかどうかという ことを、ちょっと書きましたけれどもピアレ ビューというかたちで、授業力アップアク ティビティということで、各学科まず1人の 先生が簡単に試しにやってもらってレビュ ワーとしてアドバイザーになる先生が入って やって、あとでディスカッションして報告し てくださいというのを今年まず手始めにやっ ています。そういうかたちで、いきなりみん なアクティブ・ラーニングやりましょうとい うとちょっとハードルが高いので、今みたい なかたちで少しでも授業改善、教育力アップ というかたちで取り組んでいるというのが実 情です。

それと、先ほど農工連携等の話ありました けど、これは学校の基本方針とは違う私の感 想として聞いていただきたいのですけど、連 携することはできますけれども、要するにお 手伝いをすることは各学科色々な技術がある からできます。それが研究につながるか、要 するに先生方の業績につながるかというと非 常に難しいものがあります。そこが一番の悩 みで恐らく業績につながるレベルだと実際の 事業者の人が期待しているもの、三歩ぐらい 先になってしまうわけです。事業者の方は一 歩先がほしい、だけれども一歩先のレベルだ と技術提供だとか技術相談はできるけれど も、研究につながらないから先生方もなかな かよしというふうにはならない。その辺をど う解消したらいいか、逆にお力いただけたら というのが私の個人的な感想です。以上です。

【植村副校長(国際交流・地域連携担当)】

最後のご意見のところで、委員のほうから 本校は海外に積極的に出向いている印象を持 たれているということですが、本校の方針と しまして、先ほど須田教務主事からも説明が ございましたけども、本校のホームページのトップには世界に活躍する技術者ということで、やはり技術者の育成もありますが、これからはグローバル化ということで世界で活躍するためには何が必要かということで、本校の方針としまして、低学年の早い時期にとにかく1回海外に行って、現地に触れて、異文化理解あるいは英語でのコミュニケーションカアップのモチベーションの増加につなげます。とにかく低学年で行って、その後今度は高学年で実践的な海外企業でのインターンシップ、あるいは海外の大学生との交流、そういったものを通して実践的な技術者の交流をするという二段構えでやっているわけです。

文部科学省の補助事業を受けまして、本校が代表校となって九州沖縄地区の9高専と連携して大学学生との交流、あるいは民間企業でのインターンシップというのを開拓してきまして、今9高専で130名ほど海外へ行っているわけです。だから、1キャンパスあたり平均すれば12、13名行っているということになります。私の希望としてはもっと行って欲しいなというのはありますが、なかなか学生がそこまでモチベーションが高いかというと、もちろん高い学生もいますけれども、もちろん高い学生もいますけれども、もう少しいて欲しいというのが私の感じではありますけど、やはり経済的なこともあり難しい問題ではございます。

で、特に海外に行く、本校の9高専連携と言っておりますけれども、文部科学省の事業とは別に、本校の事業としては低学年で海外に行かせるということで、今年特に6つのプログラムを用意しまして、合わせて44名の学生が海外に行きましたけど、それが3年生までの間にほぼ全学生がどこかに行って欲しいというのは思っております。その具体的な方策がどういうことかまた検討していかないといけないですが、金額の問題と行く先はアジア圏なのか、あるいは欧米まで含めたのか、

その辺は今年から始めたばかりですのでこれ までの経験といいますか、実績を基にもっと 広めていきたいと思っております。以上で す。

【鶴ヶ野委員】

地元企業の代表としまして、この2年間ほど鹿児島高専とは非常に密接に関わりを持たせていただき、途中途中で学校がやられている様々な取り組みや活動についてお聞きする機会が多々ございました。今日はそういう意味では改めて実際にお話しをお聞きし、現場も拝見させていただいて、やはり環境の変化にしっかり順応されながら姿かたちを少しずつ変えられているのだなと、その辺の素晴らしさが実感できたような気がします。

ただ、今日のこの資料も1カ月ほど前お送 りいただいて、内部的な評価ということで見 させていただいたのですけれども、それぞれ 立てられた目標をA、B、CあるいはSで評 価されているので、それはやっている当事者 として評価しているので、間違いはないだろ うとは思いますけれど、せっかく全国の高専 機構の下に51校あるということであれば、単 独の評価もさることながら、全国にある各高 専の中でしっかりとした定量的な評価をもと に、鹿児島の高専はこういうところに良いと ころがあるよと、そのような評価の仕方とい うのがあるのかどうか、これは一つの質問で ございます。もしあるならば、先ほど少し委 員のほうからもお話しあったように、何かし らこの地域の特性とか学校の風土を生かし た、ここだけは全国の高専でナンバーワン目 指したい、というところがもう少し表面的に 増えてきてもいいのではないかなというのが 一つ思ったところでございます。

あと、校長先生とも2年前お会いしまして、地元企業代表としてお願いをしてきたことが、確かに県内の若手エンジニアを育てる意味ではナンバーワンといっていい学校であ

ることでは間違いありませんので、全国からの求人数、就職率含めて非常に高いレベルにあるというのはもう純然たる事実だと思います。しかしながら、「そもそもこの鹿児島高専というものが地方にできた意味というのはなんですか」と校長先生に質問をしたときに、「地方でエンジニアを育て、地方経済の活性化に寄与する意味でそのエンジニアを育てていく」という割には、地元の就職率があまりにも低いように思います。

今年はそういう意味で地域創生のシンポジ ウムを開催し、地元企業ともう少し密接な交 流を含めて地元企業を知っていただいて、ま た我々も高専をしっかり知ってその関係を深 めていくことで、より良き人材がこの鹿児島 にしっかり残るよう我々も協働して参りま す。これまでも地元就職率の向上には互いに 努力してきましたが、鹿児島高専ではまだほ とんどが県外に出ていくという、実態がござ います。ですので、そういったプランについ ては、校長先生のほうで中期ビジョンとして 何年後に何パーセントぐらいは地元に残すぞ というプランを既に設定していただいている というのをお聞きしておりますので、これを 具体的に進めていく上での施策を我々も一緒 にやっていきたいと思います。少なくとも鹿 児島高専が、これまでのような大企業予備校 みたいな、我々地元企業からするとそんなイ メージにならないように、是非とも協力して やっていきたいと思っています。

最後に本日、改めて学校を拝見しまして、 私の子供がこれから学校選択する段階であれば、この鹿児島高専に入ったらどうだと勧められたような気がします。私の子供は二人とも娘なもんですから、これからは「リケジョだ!」と、やはり技術を学んで世の中に貢献できる、そういった高いレベルの学びが得られるこの鹿児島高専は素晴らしいよと自信を持って勧められる学校だということを今日は実感しましたので、これからは色々なところ で鹿児島高専の自慢話をしていきたいと思い ます。以上でございます。

【丁子校長】

最後に力強いご声援ありがとうございます。まず、全国51高専、55のキャンパスでございますけれども、その中での本校の位置づけはというのは、確かにありそうでない情報でして、高専、外から見ていると何となく金太郎飴のような感じですけれども、実際中身を見ると地域性もあって、特徴もあるということです。高専機構本部のほうでデータを色々と集約はしているのですけれども、単なる数値データがよく一覧表になって、北の旭川・釧路あたりから鹿児島・沖縄までというデータが並んでいるものはありますが、その中からの特徴を読み取るというところまでのデータはないのが現状でございます。

ただ、先ほども申し上げましたように、例 えば女子学生の数はとなると鹿児島は最低ラ ンク、ワースト3に入っているぐらいの値で すとか、そういったようなデータはございま すけれども、それでそれがどうしたという解 析はできないような状況です。ところが、今 の、先ほどの高専のこれからということで、 基本的には財政の面から、もう崖っぷちとい うのが現状でしで、それで大きな改革変革も せざるを得ないという中で、51の高専を北か ら5ブロックに分けまして、鹿児島の場合は 九州沖縄地区の九つの高専で一つのグループ を作ってそこで色々な議論をしなさいという ことで、本年度から本格的にスタートをし て、教務関係ですとか、国際交流関係、それ から研究関係、もう一つ事務的な問題、四つ の部門に分けて議論をしております。その中 で、お互い各高専の状況・情報を持ち寄ると それぞれに特徴があるということがだんだん わかってきまして、それぞれの特徴を生かし た連携というものがあり得るだろうという議 論を始めているところです。

先ほど国際交流の話がありましたけれども、そういう意味では、本校はかなり国際交流、突出した立場にあるということをだんだん理解してきています。教育に対しても進んでいるところは進んでおり、立ち遅れているところは立ち遅れている、というところをお互い下のレベルに合わすのではなくて、各高専高めに合わせましょうという雰囲気も徐々にできまして、例えば色々なことで、各高専が合同で何かやろうとしたときにも、いわゆる夏休みの期間は違うのです。

本校は8月上旬ぐらいから9月末までの夏 休みですが、いまだに昔ながらの7月の下旬 から8月末までという高専もあり、それをみ んな本校と同じような、いわゆるセメスター 制と言いますけれど、そういうふうに合わせ ましょうという話し合いが徐々に進みつつあ りまして、来年度遅くても再来年度ぐらいに はそういった面について多分統一されるので はないかと、統一されれば色々とお互いの強 みを生かし合った連携ができるのではない か、そのような議論をしているところです。 実際に見ると聞くとでは大違いということが ありまして、そういう意味では本校の強みと いうものを再認識しながら、よその高専の良 いところをうまく取り入れていくという段階 でございます。

あとは地元企業との連携というのは、確かに KTC さんも色々と応援していただいてありがとうございます。KTC との関係も今年はもうちょっと若干見直して、より緊密に企業様にも KTC に参加いただいて、その中で実際学生を絡めた色々な授業をやりながら単に企業説明会のような表面的なものばかりではなくて、実際に学生が企業に行って、インターンシップでもいいですし、何か共同研究のようなかたちでもいいですし、そういうようなかたちでより深く知るような事例をどんどん作っていけば実質的に学生はより地元に目も向くだろうと思います。なかなか学校で

こっちへという就職指導はできませんから、 学生が本気になってその気になってくれるような、そういうようなチャンスを色々作って いくところはぜひ一緒にやらせていただけれ ばと、また取り組んでいきたいと思いますの でよろしくお願いいたします。

【中島委員】

私は、一言で言えば、鹿児島高専は評価し ているというか、よくやってらっしゃるとい うふうに日頃から思っています。それですと 評価ということにならないのかもしれません が、それこそ文武両道でありませんが、ス ポーツでも高専のサッカー2年ぶり24度目の 全国優勝とか、3月は種子島ロケットコンテ スト初の大賞だったですか、九州大学とか名 古屋大学とか30チームを確か抑えてだったと 思いますけれども、まさに昨日、一昨日の JAXA のあかつき、金星の探査機じゃない ですけれども、この隼人から種子島を含めて 宇宙につながっているなという、そういう夢 というものを描いてらっしゃると思うし、そ ういう意味で非常によくやっていらっしゃる というのが個人的な意見です。

少し紹介をさせていただきますと、先ほど 霧島市とか日置市との協定の話も少し出てま いりましたけども、2012年の3月に私どもの 新聞社と鹿児島高専で協定を結びました。聞 くところによりますと、高専が新聞社と協定 を結ぶのは全国で初めてらしいのですが、要 するに私ども新聞のほうも偉そうなことは言 えないですけれども、新聞活用を通じて一定 の教育文化の向上に役に立てればいいなと、 百数十年の歴史、地方紙・全国紙みんな持っ ていますから、そういうノウハウを含めて協 定を結ばせていただいて、それで、例えばこ の4月からの検索をしてみました。鹿児島高 専というのをデータベースで打ち込むと何件 ぐらい記事がヒットするのかと、ざっと40件 ぐらいです。それはスポーツのサッカーなど 色々出てくるのですが、そういう鹿児島と宮崎の一部で発行していますので、できるだけ 1本でも2本でも高専というものを露出していくというのが我々の役割でもあると思っています。それからそれは評価とかじゃなくて、それについては少しでも責任を果たしていきたいと思っています。

それから、もう質問については先ほどから出ているのと重なりますけれども、これは鶴ヶ野委員の意見とは少し違うのかもしれないですけれど、地元に本当に残ってほしいというのもあると思います。私の息子は東京の大学にわざわざ出しましたけれども、「勤め人嫌だから」と言って、「じゃあ、何するんだ」と言って1年間、2年ぐらいほったらかしましたら鹿児島に戻ってきて、今農業法人に入っていますが、私はそれでいいと思っているのですけれども、なかなかやはり就職率7割ですか、それから進学率3割です。

非常に多様性があるということで、高専と いうのは、私の理解では、やはりものづくり をされている即戦力をということが社会の要 望だったわけですけれども、では例えば就職 率をもうちょっと減らして進学率多くしたほ うがいいのかとか、そういうような話とか 様々あると思うのですが、霧島に来て九州タ ブチさんを含めて素晴らしい企業がたくさん ありますので、それは学生の方に1人でも2 人でも就職して欲しいというのが取材をする 側のお願いでもあるのですけれども、やはり その辺りは親御さんとか外の世界に目を向け るということもあり致し方のない面もあると 思います。ですから、その辺りを霧島市とも 協定を結んでいらっしゃいますし、地域貢献 をするということで校長も私どもの記事でも 出ておりますけれども、それをどういうふう に具体化していくかということだろうと思い ます。ですから特に質問ということではない ですけれども、そのようなことを感じており ます。以上です。

【大竹副校長 (総務・企画担当)】

ありがとうございました。特に広報関係という意味合いで、中島委員におかれまして、いつも南日本新聞さんには本校の色々な授業を取り上げていただきまして、この場をお借りしまして御礼申し上げます。

私どももできるだけ協定を結ばせていただ いておりますので、また、新聞記者の皆様に 来ていただいて色々なお話をしていただくと かよく新聞等に記載されておりますので、私 も以前から気になっておりましたけれども、 その辺りがまだ弱いかなと私自身も感じてお りましたので、ぜひその辺りも色々とお話し させていただいて具体的にどういうことがで きるかというのを、今技術士会とも協定を結 びまして専攻科の授業等にも来ていただいて いますので、それを参考にしながら南日本新 聞社の色々な方にご協力いただければ、中島 総局長(中島委員)自身にもご協力いただけ ればと思っておりますので、また色々と学ば せていただければと思っておりますので、よ ろしくお願いします。

【丁子校長】

先ほどのお話しでスポーツ関係が検索すると出てくるという、確かに本校スポーツでかなり頑張っているところもあります。それを如何に地域企業に就職という方向に向けるかということで、最近あちこちから提案がございます。

先ほども教務主事のほうから学校の概要の 説明の中で、隼人錦江スポーツクラブとい う、これも全国高専ではここだけがそういっ た組織を持っているということで、これをぜ ひ活用するということで、そのスポーツクラ ブには企業の色々な方々が参加いただき、そ れと本校の学生と交流をする。あるいは本校 の色々な部活動の一環として、企業の中にあ る運動部との交流など。企業とは、先ほど共 同研究とか企業のインターンシップばかりで はなく、社員さんとスポーツの交流もあってもいいのではないかという提案を最近耳にするようになりましたので、そういったようなこともぜひPRしていただいて、それに参加する企業さんがあれば、より学生は地元企業に愛着を持つことになるのではないかなと思いますので、ご協力いただければ、何かそういうことへの挑戦も学内でできるところはやっていければと思っております。以上、よろしくお願いします。

【小林委員】

今日は、委員の中で私だけが鹿児島県外の 人間として評価委員にご指名いただきまして ありがとうございます。今年の4月に創立記 念日の講演をさせていただきまして、それ以 来ご無沙汰して大変申し訳ありません。

もともと会社には本校の卒業生が多数入社 していただきまして、国内外問わず非常に活 躍していただいております。そのようなこと もありまして、私も何度かこの高専にも来て おりますけれども、今回のように校内を見せ ていただいたのは初めてで、非常に感激いた しました。私も技術系の学科を出た者ですけれども、非常に近代化されて、学生皆さんが 生き生きと授業されているのを見まして、非 常に改めて鹿児島高専に対する学風とともに 皆さんの色々なご努力が出ているのだなとい うことを感心させてもらいました。それでは 時間もないので要点だけお話しさせていただ きたいと思います。

まずこれは私の感想ですけれども、この自己点検・評価報告書の内容全般のことでお話しさせていただきたいのですが、我々企業においても同じようなことをやっていまして、3年間の計画を中期事業計画というふうに立て、あと単年度の経営方針の中でそれぞれの目標を展開して、3年間の目標を単年度でそれぞれ評価していくという方法と非常に似ているなと思って全体を読ませていただきま

した。その中で一つ感じたのは、先ほど意見が出たのと重複しますけれども、やはり内容的に定性的な内容で評価していくものと定量的に目標掲げているもの、これは女子学生の比率を何パーセントにしようとか、そういうものに関してはやはり経年的な定量評価で年度を評価していけたらいいのではないか、その中で今年度の課題と来年に対する目標というのを定めたら、より目標達成に向けてのベクトルというか色々な方針が定められるのではないかと思いました。

次に質問的なものになるのですけど、私今 回県外から指名された一つの目的であると思 いますが、特にやはりグローバル化について の質問なのですが、先程植村先生からお話し になりましたけれども、9高専の連携事業の 件で、文部科学省の事業が認定されて、補助 が出ております。それは平成23年から5年間 ということでいうと、来年度が最後の年度に なってしまいます。毎年相当額の補助金が出 ておりますけれども、その平成28年以降は、 29年以降と言ったらいいのでしょうけど、そ の後補助金の無い中でどのようなかたちで今 と同じ、或いはそれ以上のグローバル化に向 けた学生の海外に向けた教育、経験をさせて やっていくかということの計画があるのかど うかお聞きしたいと思います。

2点目が、これは丁子校長のご挨拶の中にもあるのですけれども、グローバルの中でポイントになるのはやはり語学力、英会話力だと思います。もちろんそればかりではなくて、専門的な知識の向上、学問のレベルというのもありますけれども、やはりグローバル化で必要なコミュニケーションを円滑にさせるための一番のポイントは英語力だと思います。私もそういう仕事をやっておりまして、つくづく感じているのです。本校の語学教育、英語教育に関しては、グローバル化に向けて新たな取り組み、あるいは今後力を入れたいような新しい取り組みがあるのかどうか

というのはお聞きしたいと思います。

次に、3点目はあまり馴染みのない話かも しれませんし、資料もありませんので、これ は私の思いの中での質問です。日本国内を含 めて世界中の技術を学ぶ人間、そして製造 業、建設業にとって非常に重要なのが安全で す。今回の評価報告書の中には、コンプライ アンスという言葉はありましたが、安全に対 する評価はありませんでした。今日の実習の ときに、機械の施盤を行っていましたが、そ の中で学生達はきちんとした作業服装、保護 メガネを着用し、安全に配慮した実習をされ ていました。そういうことが、安全の基本だ と思います。本校では、技術を学ぶ学生に対 して、授業の中あるいは教育の中で、どんな かたちで安全衛生や環境というものを取り入 れているのでしょうか。卒業生が産業界に 入ってきて、最初に戸惑うことの一つに、企 業がいかに安全に対する意識が高いかという ところがあります。そのことを踏まえると、 学生の時から、安全衛生法とか安全衛生規則 といった法律は別にして、安全に対する取組 みを何らかのかたちで取り入れるべきではな いかと思います。そのようなことが実施でき るかどうかお聞きしたいと思います。

【丁子校長】

グローバル化については植村副校長から少しお話しします。そのあと安全衛生環境については私のほうから述べさせていただきたいと思います。

【植村副校長(国際交流・地域連携担当)】

小林委員のおっしゃる通り、28年度で9高 専連携事業が終わって、そのあとは自立化と いうことで、今9高専の国際グローバルワー キングでまさに検討しているところですが、 一つにはこの補助事業では、学生の渡航費の 補助もしているわけです。やはり年々この補 助金も減ってきておりまして、学生、来年度 は恐らく2割ほどしか負担ができずに、残り は自分たちの自費で行きなさいということに なるかと思いますが、それと併せて引率教員 の旅費もありますけれど、引率については例 えば民間企業の引率については、ある企業で はこちらから空港まで学生を引率して、あと はもう飛行機に乗せたら向こうで現地の企業 の方に迎えに来ていただいてということで、 引率旅費を出さなくてもいいということも考 えてはいるところです。

ただ、企業のインターンシップについては そういうことが考えられるのですけれども、 向こうの大学との学生交流というと、やはり 安全面のこともあって引率者が行かないとい けないということもあります。ですから、例 えば各高専で基金等を、基金があるところも あれば、ないところもさまざま各高専によっ て一応違いますけれども、そういった基金な どを設けてそこで引率者あるいは学生の旅費 を一部負担するということも考えられるかと 思うのですけれど、まだ今ちょっと色々検討 中で非常に難しい問題ではございます。

あとは派遣だけではなくて、今受け入れも しております。例えば、タイの3大学から昨 年は25名のタイの学生を9高専で受け入れま した。今年度は37名受け入れました。6月、 7月、2カ月間ですけれども、受け入れにつ いてはそんなに費用はかかりませんし、学生 は寮に泊まりますので、経済的な負担は発生 しない。なおかつタイの学生は英語をしゃべ りますので、受け入れた研究室では、その学 生同士が英語でのコミュニケーション力を図 るということ、あとのご質問にもありました けれども、コミュニケーション力アップに寄 与しているのではないかと思っております。 だから、受け入れについてはほとんど問題な いと思いますし、今後受け入れについてはま すます各高専広がっていくのではないかと思 われますけど、やはり派遣のときの費用をど うするかということと、各高専の受け入れ態 勢というよりは事務的な組織等、あとは教職 員のグローバル化、こちらのほうがより重要 とは思っております。そういうことで今その 辺の計画を9高専で検討中している段階でご ざいます。

あとは語学力の強化ということですが、先 ほど受け入れることで学生同士が英語のコ ミュニケーション力のモチベーションアップ になる、あるいはその先ほどのスライドでも ありましたけれども、今回フランスだとかス ウェーデンに行きまして、現地の学生と交流 しました。そのあと、向こうから Skype と かEメールで定期的に交流しましょうとい う提案もありまして、定常的に、ヨーロッパ だと時差が8時間あるのですが、こちらが4 時で向こうが8時だとそれは可能なんじゃな いかということで、そういう提案もいただい ておりまして、今進みつつあると思っており ます。

そういったインターネットを通じた定常的なコミュニケーション力アップのための方策というのは今後考えられると思っておりますし、これも9高専連携の事業費からなのですが、英会話に強い方を非常勤として放課後に雇用して学生や教職員向けにする企画はしております。ただ、これも来年度までですので、そのあとどうするかもまだまだ検討していかないといけないと思いますが、学生に関しては海外を訪問したあと、個別に学生たちがSkype等を使って英会話をやっているということはありますので、そこに期待できるとは思っております。以上です。

【須田副校長(教務主事)】

良いことばかり言っても仕方ありませんので、正直に言いますと、英語力に関しては、 平均的な英語力は上がっていません。積極的に海外に行くとか、そういうコミュニケーションをとるという学生たちの力は確かに上がっています。しかし、全体的な、例えば、 今日話しましたけど、TOEIC、IP TOEIC の平均点は上がってないどころが少し下がっているかなという状態なので、分布をこれからきちんと分析しないといけませんけれども、どのゾーンを期待するのかということで、その結果の見方が違ってきます。ですから積極的に海外にという学生たちは確かに上がってきていると思いますけども、その真ん中のボリュームゾーンを上げるという意味ではこれから分析して対策を取らないといけないというのが正直なところでございます、以上です。

【丁子校長】

確かに9高専連携でも中間審査会の中でも、平均点をTOEICで500点にしてくださいという注文がついていました。平均点です。確かに優秀な学生は600点越えしているらしいですけれども平均500点はかなりハードルが高いので、教務主事中心に対策を取っていかないと実質的に答えは出てこないと思っています。

もう一つご質問の安全環境教育の面ですけれども、基本的には機構本部が安全手帳という名前でしたか、小さな冊子を学生全員に配りまして、実験実習のときには安全にという講習会も年に1回はやっているのですが、それだけでは十分ではないことも理解しております。学校全体の一つ特徴としてそういったものがしっかりと教育されているというものが外に出せればいいかなと思っております。

それに加えて機構本部はそういったものに 関心が強いので、例えば情報セキュリティな どもしっかりと教職員も研修をするように、 全員ある講習のビデオを見て試験があってと いうことまでやっておりますけれども、本校 独自でもそういう安全対策、それからもう一 つ、独法化になってからは、労働基準法管理 下になったものですから、安全衛生委員会と いうのもあります。それで校舎内の安全等に ついては企業さんと同じような目線でやらなくてはいけないのですけれども、やはり企業さんに比べると徹底という面では生ぬるいところがあるかと思います。それはかなり強化しないといけないということで取り組むところです。

もう一つおまけですけれども、例えば特許 や著作権等の侵害も、やはり企業に入れば重 篤な問題なので、これも学生には少なくとも レポートのコピペはやめなさいという指導は ぜひよろしくお願いしますということで、学 生のうちからしっかりと企業人として技術者 としての素養を少しでも身につけるようにとい な、そんな甘いものではないということを 化していきたいと思っています。課題はまだ まだあります。そういったことを言い始めた ところですので、徐々にしっかりカリキュラ ムの中に取り込んでいきたいということは今 後必要だと思っております。指摘ありがとう ございます。以上です。

【相良委員】

卒業生として学校を評価するのは難しいですが、創立当時と比較すると、素晴らしく変化し、充実したと思います。実は評価委員会にこうして出させていただくたびに、学校が毎年、変化したなと感じます。

今回は都市環境デザイン工学科の演習室を 見させていただきました。私の会社もこうい う格好に作り変えてもいいなと思いました。 私の会社では、機械、建築と鉄骨や鋼構造物 の仕事を主にしていますが、母校のある団地 の中に鉄骨専門の工場があります。工場がで きて40年も経ちますと、型にはまった概念に とらわれて柔軟な発想が取れずにいます。新 しい発想ができず同じことの繰り返しです。 非常に今日は感銘を受けました。今回の授業 を見て、学生の目の前で創意工夫のデザイン 設計、伸びるだろうなと思いました。 私たちが卒業するとき、当時の小原校長から「高専はそのうち大きく変わるよ、5年制だけじゃないよ」「そのうちに大学の道も開くし変わっていくだろうと思うけど、今は我慢しなさい」と言われました。当時の卒業生は、私みたいに地元に残る者が少なくて、ほとんどが県外にでました。でも、私は決して県外に出ていくことが悪いとは思っていません。できれば大きく羽ばたいて世界に名を遺すような人になってほしいなと、狭い日本ですから、東京にいようがどこにいようが、やはり地元の人は地元に残したいと。特に少子化になってくるとそう思っているけど、外に行くしか働き先がないのです。

受験の倍率を見たときに1.1倍とか、先生 方にとっては本当にこれでいいのかと思う時 があるかもしれないけれども、残念ながらそ の受ける学校の制約を中学校の先生たちが、 振り分けてしまうのです。決してレベルが低 い子を送ってくるわけではないと思います。 その子どもたちを教育して、素晴らしい学校 に、学校は学生を立派な技術者に育て、世界 中で活躍させる。その役割が高専の使命だと 思います。

学校に対する評価というのは、学生の人間性や能力とは別に、具体的に、一流企業の求人率だと思います。ほとんど求人のないような学校もあるのに16倍以上の求人があるということは、学校に魅力があり、学生に魅力があるからだろうと思います。いずれにしても、そういう要素の中で、南日本新聞さんが、鹿児島高専や都城高専の記事を出してくれます。学校の記事は若い中学生に何らかの影響を与えてくれるのでありがたい。それから日刊工業新聞が全国の高専が何かやると必ず記事にします。ここでこういう教授と学生が一緒になってこういう研究したとか、NHKで農業を取り上げ、植物工場で、仙台高専のLEDで葉緑素に有効な緑色発光の研究をし

ているとか色々なことが載ります。やはりそういうふうな何かを、こちらから発信をすると、学校をPRすると、学生は決して評価のレベルが低いわけではないですから、学校の評価を上げていくとすれば、私はそういうふうな努力が必要じゃないかなと思います。

鹿児島県は人材供出県ですから、親が例え ば早稲田大学出身であれば早稲田に息子は進 ませる。慶応出身だったら慶応にやるという ように、鹿児島市内での経済界を見ると、出 来上がった大学社会を感じます。例えば、高 専という学校制度を全然理解してくれませ ん。高専という教育制度は学校に行って中 を見たこともなければ教育受けたこともな い、高専ということは大学とは全く違う異質 の文化だから、何か専門学校かなと思ってい ます。専門学校って何かわかりませんけれど も、専門学校という名前がついていると、あ ちこちある私立の専門学校のそれだけ専門に やる人たちを専門学校の学生というふうに称 してしまっているのではないかなと思いま す。高専制度は、異質だと思うのです。これ は理解してもらえないから、50年もたってま だ理解してもらえないというのは残念です。

現在、鹿児島高専卒業生の数が約7,000名です。それで、東京の支部から先日話があって「今年のロボコンで東京に出てくるならば東京で同窓会をやろう」だったのですが、残念ながらロボコン決勝に行けなかったので、「来年はやろう」と言っています。支部のほうで確認を取り合えるとしたら2,500人ぐらい関東地区にいるので、500名ぐらいは集まれると聞いています。都市圏特に、関東、中部、関西、近畿圏、に集中しています、それはこの学校の宿命です。それがまた評価なのではないかと思っています。

鹿児島高専の学生は武骨だけど真面目だよとか、そういうふうな長い50年の歴史ですから、一挙に特別な評価を作るのはできないだろうと思います。私どもの創設時、と違って

いるのはやはり学校にすごくゆとりが有ります。他の高専もそうなっているかわかりませんけど、本当にみんなが和気あいあいと、実習室でもああいうふうにのんびりとした雰囲気は、私たちの頃にはなかった余裕です。

気になっているのは、同窓会の同窓会館ができなかったというか、土地の没収なんかもありまして、多分、国からの様々な予算が削られてくだろうと思いますが、その中で、学校をどんなふうにしていくのかというのが、同窓会として、同窓会長として、気になっているところです。特に、同窓会の所有している卒業生のお金を、どのように活用できるのかというのを、今後、我々は考えなければいけないですけど、そういうのはこの評価委員会とは違いますけれども、提案をいただいて、同窓会の理事会を開いて検討したい。

色々なご意見の中で、今後はグローバルに、英語の能力アップが必要だと言われている中で、本日、島津委員が来られていますが、 斉彬の指針というのが脈々と鹿児島県につながっているのではないかなと思います。確かにずっと貧乏県だけど、それでもいいのではと、人材をずっと出し続けて投資しているのですから、なかなか見返りがないのは残念ですが。

【丁子校長】

卒業生として、誇りを持っていただいていることをありがたく思います。学校としてはやはりいつまでも卒業生の方にさらに誇りを持ってもらえる学校で持続させていうことだと思いますので、今後とも応援一つよろしてお願いしたいと思います。確かに地元就職これまであまり多くなかったですけれども、やはりもうそろそろ帰ってきたいという方の受け皿を作ることも学校として何か貢献しないといけないのではないかと、「卒業してしまったらもう知りませんよ」ではなくて、い

つまでたってもそういう応援をさせていただ くのも高専としては重要なことです。

高専の教育は、創造性とグローバル化とい うものが大きな柱にしておりますけれども、 それではやはり世界に羽ばたく学生を育てて いけば、東京の大会社に行って世界にはばた くこともあるでしょうし、地域の中でも世界 に羽ばたいているような企業に就職させてい ただくと、そこでどんどんやると、行った先 で同じところで同窓生同士一緒にやろうねと いう雰囲気が私は鹿児島高専の理想のかたち だと思っています。先程から英語力のご指摘 もございましたけれども、しっかりとそうい う教育をして、良い学生を育てていきたい と、やがては地域が活性化していくという、 どこにいようともそういうことであることは 間違いないと思います。ぜひそういうような ことで今後とも学校を良くしていくように努 めたいと思います。また応援のほどよろしく お願いたします。

【羽野委員長】

ありがとうございました。それでは、最後に私の意見を述べたいと思います。皆様のお手元に渡っている資料に質問事項と回答が書かれてありまして、ありがたいことに私の質問事項は、各見出しの最初に取りあげていただきました。

私は個々の事項に対してではなく、全体として本学が様々な課題にどの様に関わる体制になっているかという体制の整備状況を質問させていただきました。今日いただいた回答欄にはお尋ねした事項全てに丁寧なお答えをいただいておりますので、さらに付け加えるご質問は特にございません。

ただ、今日ご説明を聞いていて、少し気になったことが1点、それは競争率というか志願倍率であります。志願倍率が全学的には1.数倍という値ですけど、いくつかの学科で1倍を切りかかっているところがありまし

て、これは非常に危機です。それで本学のこれまでの競争率、志願倍率の推移が私の手元にデータがございませんけども、ジグザグしながら同じレベルで推移しているのであればよろしいのですが、もし下降傾向になりますと、将来構想にも色々と難しい課題が生じかねない。ではどうしたら受験生を安定確保できるのか、こういった点について他学科の志願倍率アップも含めてぜひ検討いただいて対応策を練っていただきたいというのが一つ気になった事項です。

それから先ほど見学の最後に、都市計画デザイン工学科における自分で書いた設計図に基づいて模型を作るという大変面白い企画を見させていただきました。意欲が感じられる講義だと思います。一つこれは余計なお世話ですが、ボンドの臭いが気になったのです。労働基準法というのがありまして、何ppm以下はどうこうというのがあります。それで問題なければ構わないですが、チェックしていただければと思います。必要な場合にはドラフトチャンバーを作るなり排風装置をつけてはかがでしょうか、風ですぐ飛びますから。今は危険性のある薬品は使ってないとは思いますが、老婆心ながらということです。

ということで、そろそろ時間もまいりましたので、ここから委員による協議を行いたいと思います。

7. 講評及び本校の対応

~外部評価委員会講評~

①入学志願者減少への対策

まず、入学志願者の減少についてでありま すが、具体的な対策を早急に練る必要があり ます。もちろん今動いておられると思います が、従来、中学生対象のアンケート等お取り になったと思いますが、やはりポイントは保 護者の態度といいますか、保護者の気持ち・ 意向が志願者の数に大きく影響するだろうと いうことです。例えば今日行ったような見学 会なども、保護者を対象に行ったらいい、そ ういった具体的なアプローチをぜひ取ってい ただきたい。それから入学志願者の改善は、 資料の中で触れられていたかもしれませんけ れども、全国的な傾向であるのか、多分そう ではないと思います。鹿児島高専独特の傾向 なのか、そういったトレンドについて解析 し、今後、例えば5年、10年規模で志願状況 がどういうふうになると予想されるのか、そ れへの対応を早急に決める必要があるのでは ないでしょうかというご意見をいただき、そ れで一つまとまりました。

②グローバリゼーションのさらなる発展

それから、グローバリゼーションでありますけれども、非常に特徴がある取り組みとして評価できると思いますが、これを今後さらに深めていくためには基本となる経済的な基盤の確立が必要です。これがないとなかなかそれ以上進めないのではないかということですので、グローバリゼーションにさらに取り組むうえでも、資金の確立を検討していただきたい。

③課題に対する定量的評価

それから、これは前年度からの申し送りと いうふうに聞いておりますけれども、課題に 対する高専としての取り組みに定量的な評価をしていただきたいということでした。しかし、今回いただきました資料によりまして定量的にS、A、B、Cといったような評価をするのはなかなか難しいのではないかということで、この扱いについては、外部評価委員長と丁子校長とで少し協議をさせていただきたいと思います。

主に出た意見は以上の3点でありますが、本日外部評価委員がここに同席されておりますので、付け加える点、こういった点をぜひ取り組んでほしい等ございましたらお受けしたいと思います。順不同で結構ですけれども、いかがでしょうか。

【相良委員】

KTC(錦江湾テクノパーククラブ)の会 長さんもおられますので、例えばその国際化 の問題で、学生が今後国外へ行くときの負担 軽減のために、KTCの55社、会社の規模が、 大なり小なりあるとしても、「どのぐらいの 支援をしたら毎年これぐらいの人を送ること ができる。」そういう算定をして、例えば幾 ばくかの会費の基金を作って、それを毎年 やっていくということも必要なのではないか と思います。確かに会費が24,000円の会です から、負担はできないという会社もあると思 います。であれば協力をもらえる会社を集め て、そういう協力をしていただくということ でもしないと、今後なかなか難しいのではな いかなと思います。ぜひ、利用していただけ たらなと、そういうところから KTC と学校 の緊密さも出てくるのではないでしょうか、 そう思いました。

【鶴ヶ野委員】

先ほどの定量的評価の話ですけれども、相

変わらず単年度単年度という評価ではなく、 経年的にトレンドを追って、自分たちが大切 にしたい指標・目標値を経年的に追いながら その傾向を見て課題を見出していくと、非常 にこの先へ繋がる方策が見つかるのではない かと思います。

具体的にいうと、入学志願者数・倍率みたいなものも、これでいうと2倍とか書いてありますけれども、将来、この世の中、人口が減っていって小中学生もどんどん減少していく中で、2倍なんていう目標が本当に自分たちにとって目指すべき目標なのだろうかということは、これは誰が考えてもすぐわかる話を、あえて目標にして、ただ、その実施したことだけを見ながら「Aです」と評価しているのはいかがなものかなと思います。ですから、時代の変化に沿った、過去の実績に沿ったかたちで目標設定し、そしてそれをきちんと大切にしたい指標の一つであれば定量的に目標設定して見ていくということが大切だと思われます。

今一つのポイントだけ言いましたけど、ほかの項目についてもできるだけ数値に置き換えていただけると、より自分たちの進むべき道というのが見えてくるのではないかという話です。以上です。

【石窪委員】

先ほどの入学志願者数の減少のところで、 保護者への対応はもちろん重要な部分だと思いますが、それとともに、ユニークな入試制 度の導入も早期実現を望みます。先程入試方 法の改善については現状のままとなっていて ペンディング状態だと言われましたが、志願 者数を増加させる意味でも、本校が求めてい る学生に合うような入試制度の改革を、一部 からでも取り入れてはどうかと思います。そ の際、受験生や保護者にとって分かりやすい 言葉、ネーミングにすることも重要。鹿児島 高専が求める学生を意識した入試制度改革 と、保護者も含めたアプローチ等で志願者数をどう増やしていくか、本校のPRにつなげていただきたいと思います。

それからもう一つ。グローバリゼーションのところで、先ほど英語力について、ボリュームゾーンへの対応という話がありました。そこの底上げについては、単に英語の授業を強化する以外に、モチベーションをどう上げるか、動機づけのところが一番大切で、どうして英語が必要になるのかというところを自分のこととしてどう認識させるかですので、海外へ実際に出ていく体験に加えて、外国の方に来ていただき、異文化に触れる機会を増やす双方向の仕掛けが効果的だと思います。留学生も含めて来てくださっている人材の有効活用を図ることも継続的に行っていくことが必要かと思います。

【島津委員】

この三つの中でということですか、それ以外にプラスアルファでよろしければ、やはり地域との連携ということで、先ほど申し上げましたけれども、地場産業としての農業との連携を何らかのかたちで組めるようにしていただきたいです。要は一次産業から二次産業か三次産業かということで、いわゆる一次産業としての改善もありますけれども、それをどう加工するかというレベルにおいてもかなり今技術が進んでいますので、そういうところまで考えれば、鹿児島高専でできる分というのはかなりあるのではないかという気がいたしております。ぜひその辺もお考えいただければと思います。以上です。

【丁子校長】

本日は非常に長時間でございますけれども、たくさんの貴重なご意見をいただきました。誠にありがとうございます。ご意見をいただいたものに対して早速それに対する対策・計画を作りまして、またそれで良いのか

どうかのご意見もいただきたいと思います。

講評いただいたように、できるだけ時系列的に時間の変化をきちっとたどれるような、そういう計画を建てるというご指摘であったと思います。おっしゃる通りでございます。そのようなかたちでより良い鹿児島高専にしてくための計画作成に早速取りかかりたいと思います。どうもありがとうございました。

~講評を受けての本校の対応~

①入学志願者減少への対策

外部評価委員会の事前回答に記述したように、保護者に高専を正しく認識してもらう目的で、中学生のみならず保護者に対しても機会あるごとに、多様な進路が可能な「高等教育機関」であり、「技術者(エンジニア)は新たな技術開発をおこなう職種であり、技能職とは異なる」ことをPRして参りました。しかしながら平成28年度入学生の志願状況は、さらに悪化した結果となりました。少子化に伴い、保護者の子供の将来に対する意識も変化してきていることなど、情報収集と分析を早急に行い「保護者の気持ち」に沿ったPR活動へ転換していく必要があると考えます。

志願者減少について全国高専の平均的な傾向は、やはり本校と同様に少子化の割合以上に志願者離れの傾向がみらます。(「志願者数の対中学卒業生比」で見ますと、H24-27の全国高専平均:1.51%, 1.50%, 1.43%, 1.41%、鹿児島県:2.3%, 2.0%, 1.8%, 1.8% となっています。さらに、鹿児島の H28は1.7% に減少しています。)

しかし、競争倍率では鹿児島は(沖縄を除く)九州地区内で H27,28ともに最低となっているなど、地域特性の影響を受けていると思われます。

今後、早急に対策を検討していきますが、 大きな方向性として以下を考慮していきたい と考えています。

- i)中学校との関係を深めていく:特に地元、 霧島市と周辺自治体の中学校へは特段の働き かけをするとともに、生徒・保護者の情報収 集をおこなう。
- ii) 保護者の気持ちを考慮したPRの展開: 体験入学等の従前のイベントにおいても保護 者へのアピールを意識する事は当然ですが、 これまでのような県外の優良企業へ就職でき

るということが、果たして保護者の気持ちに 沿ったものなのか、十分に調査して対応策を 検討する。

②グローバリゼーションのさらなる発展

平成24年度から取り組んできた文科省の大 学間連携共同教育推進事業すなわち、9高専 連係事業において、学生が海外で行う学生交 流およびインターンシップの際の海外渡航費 については、本事業経費から補助していたこ ともあり、平成27年度の参加者は9高専全体 で175名にのぼりました。本校の学生だけで も34名です。9高専連携事業が各高専の学生 に概ね知れ渡ったと考えられますが、それだ けではなく、学生自身の経費負担額がそう大 きくないことも要因だと推察されます。この 連係事業は平成28年度で終了します。従っ て、9高専間でも事業終了後は自立化して連 係事業を進めていく方策を協議しています。 ただ、事業終了後は、国や高専機構などから の渡航費負担などは一切ないため、対策を講 じる必要があります。

対策としては、大きく2点あると思います。一つは、全額自己負担してでも海外での学生交流やインターンシップに参加しようと志す学生マインドを育成すること、もう一つは外部資金を得て少しでも経済的支援をすることです。

学生マインドの育成は難しい面がありますが、高専の学生は将来リーダー的な存在として活躍することが期待されていることを考慮すると、各高専としては、自ら道を切り開こうとする姿勢の育成が求められ、その選択肢の一つにグローバル化志向の意識付けが肝要と思われます。そのための学生への情報提供として、過去にそれらを経験した学生の体験発表会を低学年生対象に行うことで、「海外に行って異文化と国際交流体験してみたい」という動機付けを早くから地道に行うこと、いわゆる草の根運動に近いもので口コミによ

る勧誘です。学生自らの体験談を聞くことは モチベーションアップに効果的です。

もう一つの外部資金の獲得ですが、これ は Jasso (日本学生支援機構) が公募してい る「トビタテ!留学ジャパン」等に応募する ことを学生に勧めることと、同じく Jasso が 公募している海外留学奨学金に学校として 応募することです。「トビタテ!留学ジャパ ン」は学生自ら留学の計画を立てて申請する もので、最低1ヶ月の留学から応募可能であ り、現在、応募者が少ないことで、しっかり した計画書を提出すると採択される可能性が あるとのことで、熱心に希望する学生には有 り難い支援です。他方の海外留学奨学金は、 学校のプログラムとして企画し、それに学生 が参加する形態として応募するもので、従来 の9高専連携事業で実施していたものを経費 面で国が補助しようというものです。こちら は申請にあたり、結構なエネルギーがいると のことですが、一度採択されると後は続けて 申請すると採択される可能性が高いとのこと です。それ以外の外部資金の獲得としては、 企業の寄付をお願いすることが考えられます が、企業にとっては何かメリットがないと寄 付をお願いしても難しいです。ただ、グロー バル感覚を修得した学生がその企業に就職す る可能性の道があることを理解頂いた企業か らは寄付を頂きやすいのではと思います。一 種の奨学金システムです。

今後益々グローバル人材育成は求められますが、以上のような方策をとることでさらなる発展が期待されます。

③課題に対する定量的評価

いくつもの本校の課題に対する定量的評価をお願いしているところですが、その評価項目の定量性に妥当性があるかというご指摘と思います。このようなご指摘を受けたことは、本校が計画した目標値のみをお示しして、その根拠となる説明が不足していたこと

によるものと思います。

例えば、志願倍率を2倍程度に想定していますのは、その程度であれば十分に優秀な学生を確保できるという、これまでの経験則から割り出したところに依るところがあります。しかしながら、そうだからと言って、少子化の今日では以前のように志願者数を増すことは容易ではありません。

このために、既に志願者対策で述べた直接 的な対策に加えて、さらに間接的な対策とし ていくつかを検討しております。

例えば、理科離れと言われる中学生に興味 を持ってもらうプログラムを中学生向けに開 発することも怠らず努力していることが挙げ られます。また、本校では、全国高専に比べ て、圧倒的に女子学生が少ない現状にありま す。これに対しては、女性技術者が活躍でき る分野が多くあることを情報発信するなど、 これまでとは異なる志願者対策をする必要が あると考えております。これまで、受験の対 象とはしていなかった女子中学生に志願して もらえるようになれば、自ずと志願者倍率の 増加につながります。さらに、女子学生のた めの寮が十分に準備されていないために、女 子中学生の受験の機会を奪っていることも考 えられます。このことから、十分に通学可能 な地域からは自宅通学を基本とするような対 策をとることも計画しております。このよう な検討の結果、志願者倍率2倍を目指すこと としております。このような説明が全く欠落 していたものと考えております。

その他の項目の目標についても、以上のような説明が十分ではなかったために、定量的評価について十分に機能しているか懸念を持たれたものと思います。今後は、すべての項目について、定量的評価のための数値目標に対する根拠についてできる限り詳細に説明することといたします。